

さ い き じょう か まち い せ き
佐伯城下町遺跡

戸倉家屋敷跡
保田家屋敷跡

平成25年度大分銀行佐伯支店建て替え工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

2016

大分県
佐伯市教育委員会



佐伯城跡と佐伯城下町遺跡

序 文

本書は平成25年度に実施した、佐伯城下町遺跡戸倉家屋敷跡・保田家屋敷跡の発掘調査の成果をまとめたものです。

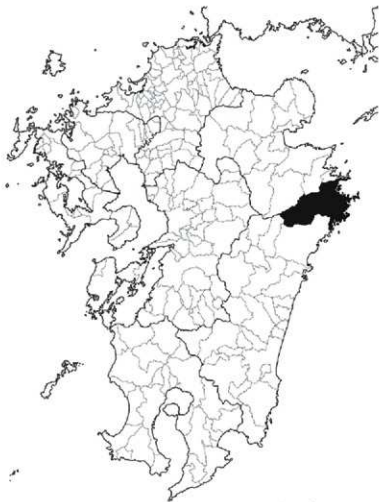
調査地は佐伯城の麓に位置する上級家臣の屋敷地です。大分銀行佐伯支店建て替え工事のために発掘調査したところ、近世の屋敷に関する非常に多くの成果を得ることができました。なかでも保田家屋敷跡では近世初期の遺構と遺物が見つかっています。現在の佐伯市街地の基礎は、慶長6年に佐伯にやってきた佐伯藩初代藩主・毛利高政によって形作られたといわれますが、今回の発掘調査によって城下町形成期のまとまった資料を確認することができ、佐伯の歴史を考える上で非常に重要なものとなりました。この報告書が郷土の歴史研究や文化財の保護と理解への一助となり、多くの方に活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、今回の調査では株式会社大分銀行をはじめ、関係各位に多大な御協力をいただきました。厚く御礼申し上げます。

平成28年3月31日

佐伯市教育委員会

教育長 分 藤 高 嗣



例 言

- ・本書は、平成25年度に実施した佐伯城下町戸倉家屋敷跡・保田家屋敷跡の発掘調査報告書である。
- ・調査及び報告書作成は佐伯市教育委員会社会教育課が主体となって実施した。
- ・本報告書の執筆は福田聡が担当した。
- ・費用は、確認調査費用を佐伯市教育委員会が、本調査及び整理作業・報告書刊行費用を株式会社大分銀行が負担した。
- ・発掘調査における基準点測量と遺構実測は株式会社アーキジオに委託し、写真撮影は福田・五十川慎也が行った。
- ・空中写真は、撮影を九州航空株式会社に委託して実施した。
- ・整理作業は一部を平成25年度緊急雇用促進事業の一環で実施したほか、注記・接合作業を株式会社九州文化財総合研究所に委託して実施した。その他の遺物実測・製図作業は福田・五十川・中元洋一が行った。
- ・出土遺物の自然化学分析は株式会社パレオ・ラボに委託して実施した。
- ・本報告書で用いる方位は座標北、座標は世界測地系、標高は絶対高である。
- ・調査にかかる記録類や出土遺物は、佐伯市教育委員会が保管している。
- ・本報告書では、整理作業及び執筆時の混乱を避けるため、遺構番号（S番号）は発掘調査時のものを使用している。

目 次

目次

第1章	はじめに	1
第1節	調査にいたる経緯	1
第2節	調査体制	2
第3節	地理的・歴史的環境	2
第2章	調査の成果	6
第1節	調査の経過と概要	6
第2節	基本層序	10
第3節	戸倉家屋敷跡の調査	11
第4節	保田家屋敷跡の調査	26
第5節	自然科学分析	68
第3章	まとめ	78

挿図目次

第1図	周辺遺跡地図 (S=1/50,000)	4
第2図	発掘調査地周辺地形図 (S=1/5,000)	5
第3図	文政9 (1826) 年御城下分見明細図絵 (部分)	5
第4図	土層断面図 (S=1/60)	7
第5図	戸倉家屋敷跡・保田家屋敷跡遺構配置図 (S=1/120)	8
第6図	基本層序模式図	10
第7図	戸倉家屋敷跡遺構配置図 (S=1/100)	12
第8図	S1遺構実測図 (S=1/40)	13
第9図	S2遺構実測図 (S=1/40)	13
第10図	S5・S6遺構実測図 (S=1/40)	13
第11図	S7遺構実測図 (S=1/40)	13
第12図	戸倉家屋敷跡遺構内出土遺物 1 (1/3)	14
第13図	戸倉家屋敷跡遺構内出土遺物 2 (1/3)	15
第14図	戸倉家屋敷跡整地層出土遺物 1 (1/3)	16
第15図	戸倉家屋敷跡整地層出土遺物 2 (1/3)	17
第16図	戸倉家屋敷跡整地層出土遺物 3 (1/3)	18
第17図	戸倉家屋敷跡整地層出土遺物 4 (1/3)	19
第18図	戸倉家屋敷跡整地層出土遺物 5 (1/3)	20
第19図	戸倉家屋敷跡整地層出土遺物 6 (1/3)	21
第20図	戸倉家屋敷跡整地層出土遺物 7 (1/3)	22
第21図	戸倉家屋敷跡整地層出土遺物 8 (1/3)	23
第22図	保田家屋敷跡検出面 1 遺構配置図 (S=1/100)	27
第23図	保田家屋敷跡検出面 1 遺構断面図 (S=1/80)	28
第24図	S15・S55遺構実測図 (S=1/40)	28
第25図	S16・S25遺構実測図 (S=1/40)	28
第26図	保田家屋敷跡検出面 1 遺構内出土遺物 1 (S=1/3)	30
第27図	保田家屋敷跡検出面 1 遺構内出土遺物 2 (S=1/3)	31
第28図	保田家屋敷跡検出面 1 遺構内出土遺物 3 (S=1/3)	32
第29図	保田家屋敷跡検出面 1 遺構内出土遺物 4 (S=1/3)	33
第30図	保田家屋敷跡検出面 1 遺構内出土遺物 5 (S=1/3)	34
第31図	保田家屋敷跡検出面 1 遺構内出土遺物 6 (S=1/3)	35
第32図	保田家屋敷跡検出面 1 整地層出土遺物 1 (S=1/3)	35
第33図	保田家屋敷跡検出面 1 整地層出土遺物 2 (S=1/3)	36
第34図	保田家屋敷跡検出面 1 整地層出土遺物 3 (S=1/3)	37
第35図	保田家屋敷跡検出面 1 整地層出土遺物 4 (S=1/3)	38
第36図	保田家屋敷跡検出面 1 整地層出土遺物 5 (S=1/3)	39
第37図	保田家屋敷跡検出面 1 整地層出土遺物 6 (S=1/3)	40
第38図	保田家屋敷跡検出面 1 整地層出土遺物 7 (S=1/3)	41
第39図	保田家屋敷跡検出面 1 整地層出土遺物 8 (S=1/3)	42
第40図	保田家屋敷跡検出面 2 遺構配置図 (S=1/100)	49
第41図	保田家屋敷跡検出面 2 遺構断面図 (S=1/80)	50
第42図	保田家屋敷跡検出面 2 遺構内出土遺物 1 (S=1/3)	51

第43図	保田家屋敷跡検出面2 整地層出土遺物1 (S=1/3)	52
第44図	保田家屋敷跡検出面2 整地層出土遺物2 (S=1/3)	53
第45図	保田家屋敷跡検出面2 整地層出土遺物3 (S=1/3)	54
第46図	保田家屋敷跡検出面3 整地層出土遺物4 (S=1/3)	55
第47図	保田家屋敷跡検出面3 遺構配置図 (S=1/100)	59
第48図	保田家屋敷跡検出面3 遺構断面図 (S=1/80)	60
第49図	保田家屋敷跡検出面3 遺構内出土遺物1 (S=1/3)	62
第50図	保田家屋敷跡検出面3 遺構内出土遺物2 (S=1/3)	63
第51図	保田家屋敷跡検出面3 整地層出土遺物1 (S=1/3)	63
第52図	保田家屋敷跡検出面3 整地層出土遺物2 (S=1/3)	64
第53図	保田家屋敷跡検出面3 整地層出土遺物3 (S=1/3)	65
第54図	近世絵図における調査地周辺	78
第55図	遺構変遷図	80

表目次

第1表	戸倉家屋敷跡遺構一覽	23
第2表	戸倉家屋敷跡遺物一覽1	24
第3表	戸倉家屋敷跡遺物一覽2	25
第4表	保田家屋敷跡検出面1 遺構一覽1	43
第5表	保田家屋敷跡検出面1 遺構一覽2	44
第6表	保田家屋敷跡検出面1 出土遺物一覽1	45
第7表	保田家屋敷跡検出面1 出土遺物一覽2	46
第8表	保田家屋敷跡検出面1 出土遺物一覽3	47
第9表	保田家屋敷跡検出面2 遺構一覽	56
第10表	保田家屋敷跡検出面2 出土遺物一覽1	56
第11表	保田家屋敷跡検出面2 出土遺物一覽2	57
第12表	保田家屋敷跡検出面3 遺構一覽	66
第13表	保田家屋敷跡検出面3 出土遺物一覽1	66
第14表	保田家屋敷跡検出面3 出土遺物一覽2	67

図版目次

図版1	81
戸倉家屋敷跡全景 北東から	戸倉家屋敷跡全景 東から
図版2	82
近代井戸 検出状況	戸倉家屋敷跡 北西壁土層
S1検出状況 南東から	S1完掘状況 北西から
S2遺物検出状況 南から	S2完掘状況 南から
図版3	83
イギリス製磁器製品	ヨーロッパ輸出用磁器製品

第Ⅰ層・第Ⅱ層・第Ⅳ層出土向付 第Ⅳ層出土漆付着土器	第Ⅳ層出土灰落し・水滴 第Ⅳ層出土木製椀	
図版4		84
保田家屋敷跡 検出面1 遺構検出状況	南東が下	
図版5		85
保田家屋敷跡 検出面1 礎石検出状況	北東から	
保田家屋敷跡 検出面1 柱穴検出状況	南東から	
図版6		86
S20・S94検出状況	北から	保田家屋敷跡 調査区南東壁土層
図版7		87
S15検出状況	北東から	S15完掘状況 北東から
S16検出状況	西から	S16半裁状況 南から
S16完掘状況	南から	石敷き検出状況 南西から
図版8		88
S15出土埋甕 第Ⅴ層出土磁器碗・皿	S16出土埋甕	
図版9		89
第Ⅴ層出土陶器碗・皿 第Ⅴ層出土鉢・甕ほか	第Ⅴ層出土在地系壺 第Ⅵ層出土輸入磁器	
図版10		90
保田家屋敷跡 検出面2 礎石検出状況	北東から	
保田家屋敷跡 検出面2 礎石検出状況	東から	
図版11		91
第Ⅵ層掘削状況 S100完掘状況	西から	第Ⅵ層掘削状況 S167検出状況
調査区東端土層堆積状況		調査区北西砂礫層検出状況
図版12		92
第Ⅶ層・第Ⅸ層出土肥前陶器 第Ⅸ層出土在地系陶器皿 第Ⅶ層・第Ⅸ層出土輸入磁器	第Ⅶ層出土陶器 第Ⅶ層出土楽茶碗	
図版13		93
保田家屋敷跡 検出面3 柱穴検出状況	北東から	
保田家屋敷跡 検出面3 柱穴検出状況	東から	
図版14		94
S119木柱検出状況	北西から	S119木柱除去後半裁状況 北西から
S114完掘状況	南東から	S122底石検出状況 南から
S128・S129検出状況	北西から	S129検出状況 北西から
図版15		95
S106出土遺物 第Ⅹ層出土在地系陶器皿	S114出土遺物 第Ⅹ層出土鞆羽口	
図版16		96
第Ⅹ層・第Ⅺ層出土肥前陶器皿	第Ⅹ層・第Ⅺ層出土輸入磁器	

第1章 はじめに

第1節 調査にいたる経緯

平成25年4月、株式会社大分銀行から佐伯市教育委員会社会教育課に対して、佐伯市城西西町に所在する大分銀行佐伯支店の建て替えのため、埋蔵文化財の照会があった。店舗に隣接する駐車場に新店舗を建設する計画で、当該地は佐伯城下町の範囲内であったため、社会教育課から事前に確認調査が必要である旨を回答し、大分銀行から調査の了解を得た。

早急に確認調査の準備を進め、平成25年4月10日から17日にかけて調査を実施した。建て替え工事の予定範囲は大分銀行来客用の駐車場として使用しているため、駐車場の東端と西端それぞれ1.5m×10mのみアスファルトを切断し、重機と人力による掘削を行った。

西端に設定したトレンチ1は近世を通じて戸倉家の屋敷地の一角である。アスファルト・現代の整地層の下位に近世末頃の遺物が出土する整地層を確認した。地下水を多く含むしまりの弱い土質であり、礎石などの遺構は検出されなかった。調査地点を含む佐伯城下町は佐伯藩初代藩主・毛利高政が遠浅の海岸を埋め立てて建設されたものであり、軟弱な砂層が地山となる。ここで検出した近世の整地層は、軟弱な地山の改良を目的とした地業のための整地層であると考えた。また、層中に木片や丸太材が多く残っており、一部には木材が等間隔に並び、基礎の横木の可能性も考えられた。この近世末頃の整地層は地表面から約80cm下のレベルで検出に至ったが、一部を深掘したところ、地表から1.5m下まで続いていた。また、トレンチ全体で地表から約1m下のレベルでかなりの量の湧水があった。

東端のトレンチ2も近世を通じて武家屋敷

地であるが、居住者は時期によって変わる。調査範囲はほぼ屋敷1軒分に相当する。アスファルト・現代整地層の直下に硬く締まる整地層を確認した。上面には礎石が据えられており、旧地表面に近いものと考えられる。また、この整地層の下位にも礎石を検出し、より古期の遺構検出面があることも判明した。トレンチの一部には黄褐色土と黒褐色炭化物層を薄く交互に重ねる整地もあり、何らかの施設があった可能性が高い。また、下位の検出面や整地層からは近世初期の遺物が出土することを確認した。トレンチ2でも、地表から約80cmで地下水が湧き出す。

以上の確認調査結果から、工事予定範囲の全面について本発掘調査が必要であると判断した。このことについて大分銀行と協議を行い、発掘調査及びその費用負担について同意を得た。平成25年7月10日に佐伯市は大分銀行と契約を締結し、発掘調査を受託した。

調査対象面積は510㎡である。本調査は平成25年7月29日に開始し、12月4日に終了した。

第2節 調査体制

調査は以下の体制で実施した。

【調査主体】

佐伯市教育委員会

【調査事務】

佐伯市教育委員会社会教育課文化振興係

清家 隆仁（社会教育課長）（平成25～26年度）

長田 文春（社会教育課長）（平成27年度）

淡居 宗則（文化振興係長）（平成25～26年度12月）

（文化振興係総括主幹）（平成26年度1月～3月）

吉武 牧子（文化振興係長）（平成25～26年度12月）

（文化振興係総括主幹）（平成26年度1月～平成27年度）

成松 重雄（文化振興係総括主幹）（平成27年度）

中元 洋司（文化振興係主任）（平成27年度）

福田 聡（文化振興係主任）（平成25～27年度）

五十川慎也（文化振興係嘱託職員）（平成25～27年度）

このほか、出土陶磁器については佐賀県立九州陶磁博物館名誉顧問・大橋康二氏にご指導いただいたほか、大分県教育委員会・吉田寛氏、杵築市教育委員会・吉田和彦氏のご教示を頂いた。

第3節 地理的・歴史的環境

【地理的環境】

佐伯市は大分県南端に位置する人口約75,000人の自治体である。北に津久見市と臼杵市、西に豊後大野市と竹田市、南に宮崎県延岡市と接し、約902.3km²の面積は九州の市町村では最大である。西は標高1,000m以上の山々が連なる九州山地の祖母嶺国定公園を含み、東は太平洋と豊後水道に面したリアス式海岸が日豊海岸国定公園の一部をなしている。市内には延長38kmに及ぶ一級河川番匠川が東流し、その水系に属する支流のほか、延岡市の五ヶ瀬川水系に含まれる河川によって小規模な盆地や段丘が形成されているが、大規模な平野に乏しく、近世以降は番匠川の河口付近の低地や扇状地を埋め立てて中心市街地を形成した。

内陸部は険しい地形が多い一方で、沿岸部

は水上交通の便には恵まれている。現在では交通の主役は自動車であるが、自動車の普及以前は特に物資の移送には船が利用され、良好な漁場として知られるリアス式海岸の浦々の水産物を番匠川河口の佐伯市街地に集積し、全国各地へと出荷していた。また城下町として整備された際に内堀として取り込まれた小河川が市街地を流れており、市民も船をよく利用していた。さらに林業が盛んな山間部で伐採された木材も筏に組んで番匠川やその支流を下り、市街地で集積された後に各地へ出荷されたという。現在は市街地を流れる河川の幾つかは埋め立てられて道路となり、番匠川も水害対策のための河川改修によって流路が変更された。しかし未だ市街地にはいくつかの小河川が流れている。明治16年に開港した佐伯港は前面に大入島を抱えるために波風穏やかな良港であり、高知県宿毛市や大入島との間に定期便がある。

【歴史的環境】

現在の佐伯市街地は近世の佐伯城下町を基礎に発展してきたが、近世以前の様子については明らかではない。中世の佐伯を支配したのは豊後大神氏に連なる、佐伯氏の一族である。平安時代末頃には佐伯荘を経営していたことが資料から確認されている。彼らは番匠川や豊後水道で活動する水軍を擁し、梅牟礼山の周辺を拠点に活動していたと考えられる。番匠川下流域には上小倉磨崖石塔群や十三重塔など、鎌倉～室町期の佐伯氏に関わる遺跡・文化財が多く、佐伯氏にまつわる伝承も多数残されている。また古市遺跡は成立が13世紀後半～14世紀に遡り、早くから市が成立していたことが窺える。15世紀頃には梅牟礼山の東麓に家臣団居住地が形成される（県埋せ2014）ことも明らかとなり、16世紀前半には梅牟礼山頂に梅牟礼城が築城される。築城者は佐伯惟治といわれ、惟治が動進したとされる寺社がいくつも伝えられている。このように、梅牟礼城周辺の変遷については次第に明らかになりつつある。しかし、番匠川河口付近における中世の様相は伝承による部分が大きい。

中世までの番匠川河口は広い干潟に幾つかの小島が浮かんでいたと考えられる。八幡山（現城山）の山頂には緒方惟栄の創建という八幡社が建てられ、麓には塩屋千軒と呼ばれる製塩集落があったと伝えられている。これら番匠川河口の中世集落については発掘調査の事例はないが、近世城下町の出土遺物の中に中世に遡る遺物がわずかに散見される（佐伯市教委1998・2015）。

慶長6年（1601）に入部した佐伯藩初代藩主毛利高政は、急峻に過ぎる梅牟礼城を廃し、新たな城と城下町を建設する。山頂の八

幡社を北西麓に移して佐伯城を建設、併せてその南東に広がっていた集落と干潟を埋め立てて城下町とした。新たな城下町の一部には梅牟礼山麓から住民を移住させ、幾つかの寺院も移築した。

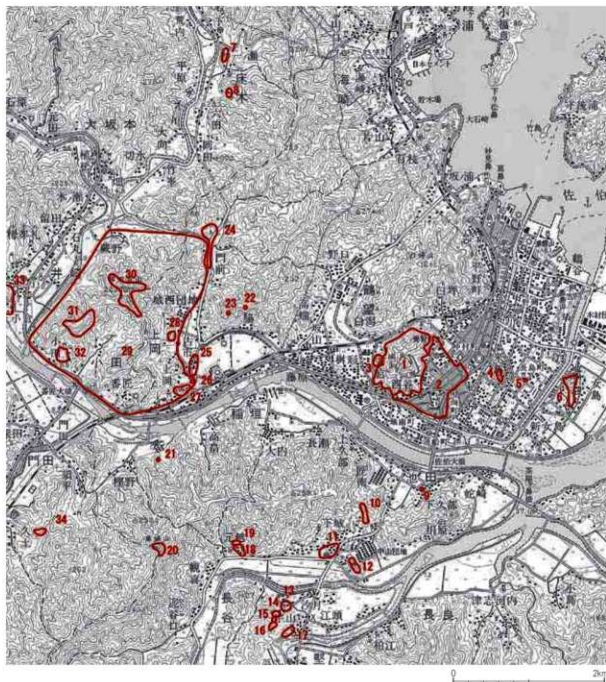
城下町の構成は、佐伯城に最も近い山麓部を上級家臣の屋敷地、その周囲を武家地とし、南の番匠川に接する船頭町と、東の内町を町人地とした。船頭町には船頭や水主も居住した。寺社を分散して配置し、番匠川を外堀、その支流を内堀として利用することで総構えの城下町とする都市計画を見ることが出来る。こうした城下町の形成は、火災や災害による再編を経て18世紀頃には完成したと見られる。城下町を基礎に発展した現在の佐伯市中心市街地には、当時の町割に由来する地名や通りの名称が残っている。

発掘調査対象となったのは、城下町の中でも城内への入口に非常に近く、家格の高い家臣の居住地である。文政9年（1826）の御城下分見明細図絵によると、広大な戸倉家屋敷の一部と、保田家屋敷の中央部分にあたる（第2図・第3図）。特に戸倉家の一族は高政が佐伯に入部する以前からの家臣で、歴代の佐伯藩筆頭家老を担ってきた重臣である。

周辺での主な発掘調査としては、天祐館遺跡と警露館跡がある。天祐館は幕末に藩主の居宅として建築された御殿、警露館は明治中期に建築された旧藩主の邸宅である。建築物の基礎が残されており、地盤の状態によって基礎の施工方法を選択していたほか、かかる加重も想定していた可能性が指摘される。また、どちらの調査地でも近世末または明治初期頃の整地層の下位に地山層が広がり、近世中期以前の様相については明らかではない。

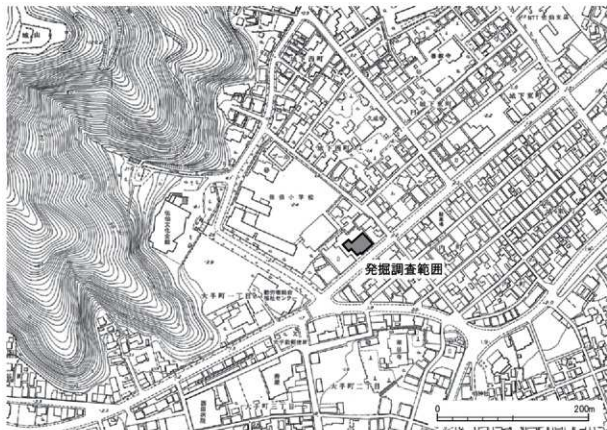
【参考文献】

- 飯沼賢司 2007『海と山と古代の道』『図説海部・大野・竹田の歴史』郷土出版社
- 大分県教育庁埋蔵文化財センター 2014『梅牟礼遺跡天神ノ下地区・梅牟礼遺跡掃木地区・曳地館跡・元越遺跡』
- 佐伯市史編さん委員会 1974『佐伯市史』
- 佐伯市教育委員会 2014『梅牟礼城跡関連遺跡発掘調査報告書2』
- 佐伯市教育委員会 1998『天祐館遺跡』
- 佐伯市教育委員会 2015『佐伯城下町遺跡 警露館跡』



1. 佐伯城跡	2. 佐伯城下町	3. 白湯遺跡	4. 萩山遺跡群
5. 宝剣山古墳	6. 女島山古墳群	7. 大友山砦跡	8. 瀬戸遺跡
9. 岡ノ谷古墳	10. 中山砦跡	11. 下城遺跡	12. 八幡山城跡
13. 長良貝塚	14. 上ノ台館跡	15. 上ノ台遺跡	16. 汐月遺跡
17. 宇山城跡	18. 元越遺跡	19. 長谷山際遺跡	20. 高城跡
21. 櫻野古墳	22. 三上寺跡	23. 二上寺跡	24. 佐伯門前遺跡
25. 古市遺跡	26. 十三重塔	27. 木戸城跡	28. 曳地館跡
29. 梅牟礼遺跡	30. 梅牟礼城跡	31. 小田山城跡	32. 小田山館跡
33. 上小倉横穴群	34. 平城跡		

第1図 周辺遺跡地図 (S=1/50,000)



第2図 発掘調査地周辺地形図 (S=1/5,000)



第3図 文政9 (1826) 年御城下分見明細図絵 (部分)

第2章 調査の成果

第1節 調査の経過と概要

調査地は2軒の武家屋敷地にまたがる位置にあり、文政9年(1826)の絵図によると南西側が戸倉家屋敷の一部、北東側が保田家屋敷にあたる。

排土置き場を確保する都合上、調査範囲を2分割し、戸倉家側をA区、保田家側をB区と仮称した。まず戸倉家の敷地にあたるA区を調査し、埋め戻した後に保田家屋敷にあたるB区の調査を行う計画とした。調査期間はA区が平成25年7月29日から9月30日、B区が10月1日から12月4日までである。なお、A区の調査を進めたところ、一部は保田家屋敷の敷地が含まれていることが分かったため、その部分は埋め戻しをせず、B区と併せて調査を行った。

戸倉家屋敷跡では、現代のアスファルトと砕石の下位に近代の石組井戸を検出した。石組を避けて掘削を進め、試掘調査で丸太材等を検出した暗褐色整地層の上面で遺構検出作業を行った。その結果、建物の基礎等は検出されず、廃棄土坑やピットを確認したのみであった。これらの遺構を検出した整地層の堆積は非常に厚く、屋敷地の内側では地下2m以上まで達している。遺構内と整地層中からは近世末頃の遺物が多く出土し、この時期に大規模な整地が行われたことが窺える。なお、整地層は地下水を多量に含んでいたために木質資料の出土も多かったが、ほとんどの遺物は形状をとどめていない。

保田家屋敷跡は、遺構検出面が3面存在した。現代のアスファルトと砕石の直下に焼土混泥土層と黄褐色整地層が広がっていた。検出面1となる黄褐色整地層上面には礎石が残り、柱穴や埋壘、石敷きも検出した。遺構及び整地層からは近世中頃から後半にかけての遺物が出土した。なお、埋壘が便所遺構である可能性を検討するために埋土の寄生虫卵分析を行ったが、寄生虫卵は検出されなかつ

た。また、戸倉家との屋敷境付近には多数の杭穴があり、土塀などの施設があった可能性がある。いくつかの杭穴は埋壘や土坑を切っていることから、のちに屋敷境の変更があったことも考えられる。木杭は一部が残存しており、年代測定と樹種同定を行ったところ、近世末頃のマツ属樹木であると考えられる。

検出面1の整地層にバックされるかたちで、検出面2では礎石や土坑、柱穴を検出した。礎石は比較的良く残っており、主屋の位置が推測できる。柱穴は戸倉家との屋敷境に並び、小規模な建物跡または堀跡の可能性が高い。遺構内や周囲の整地層からは中世末から近世初期頃の遺物が出土し、近世初め頃の屋敷跡であると判断した。

さらに、検出面3となる最下層からは中世末頃～近世初頭の遺物とともに、柱穴、土坑、焼土溝を検出した。柱穴は整然と並ぶものではなく、建物配置の復元は難しい。柱穴内には木柱が一部残存していたため、年代測定と樹種同定を行った結果、中世末頃に伐採された可能性の高いマツ属樹木であることが判明した。

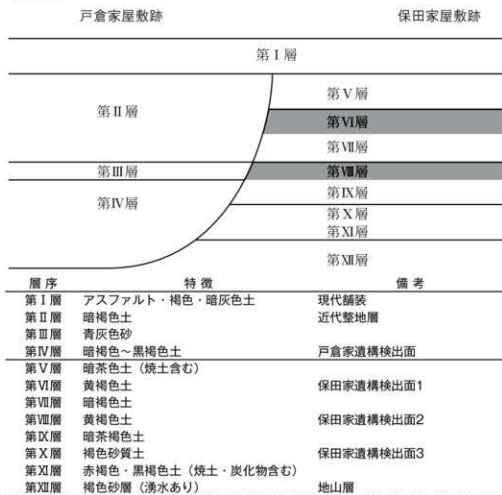
これら検出面2・検出面3の遺構や遺物は近世初期の城下町形成期頃のものとして判断できる。佐伯城下町遺跡の範囲内ではこれまでに近世初期のまとまった資料が発掘されたことはなく、貴重な成果となった。

本報告書では、発掘調査時のA区とB区を統合して整理し、戸倉家屋敷跡と保田家屋敷跡として報告する。また、保田家屋敷跡は3面の検出面それぞれについて、検出層など関連する整地層とともに報告する。遺物に関しては、遺構内出土遺物と各整地層の時期比定の参考となるものを中心に図化したほか、中世末から近世初期に遡る遺物群は、後世の整地層の混入も含め、残りの良いものを積極的に図化した。



第5図 戸倉家屋敷跡・保田家屋敷跡遺構配置図 (S=1/120)

第2節 基本層序



第6図 基本層序模式図

本調査範囲における土層堆積状況は、戸倉家屋敷跡と保田家屋敷跡で大きく異なっている。

戸倉家屋敷跡では、アスファルト舗装の下には第Ⅱ層の暗褐色土が全面に堆積し、一部はその下位に第Ⅲ層・青灰色の砂層が薄くところどころに堆積する。これらの層には近代以降の遺物が多く含まれていた。第Ⅳ層が戸倉家屋敷跡の遺構検出面となった層で、試掘調査での深堀によって、検出面から1.5m以上の厚さがあり、水気が多くしまりの弱い土質であることが分かった。第Ⅳ層からは近世末頃の遺物が出土している。

これら戸倉家屋敷跡の近世から近代にかけての整地層第Ⅱ層から第Ⅳ層に切られるかたちで保田家屋敷跡の整地層が存在する。アス

ファルト舗装の直下に近世後期の遺物を含む第Ⅴ層があり、第Ⅵ層の黄褐色礫混土層は固く締まる安定した土質である。第Ⅵ層上面で礎石や柱穴などの遺構を検出した。さらに下層の第Ⅷ層も、やや薄くて疎らなものと同様に固く締まる黄褐色土で、礎石・柱穴の検出面となった。第Ⅵ層及び第Ⅷ層は生活面として整地されたものと考えられる。第Ⅹ層と第Ⅺ層は本調査区での最古期の整地層で、層厚は薄いが面的な広がりを持つ。第Ⅶ層以下では中世末から近世初頭の遺物が中心となる。

第Ⅴ層以下はいずれの層にも共通して、調査区南東の道路側の堆積が厚い。これは近世において南東に面した道路沿いに川が流れていたため、地下水位が高く整地層の沈下の進行が早かったことが考えられる。

第3節 戸倉家屋敷跡の調査

戸倉家屋敷跡は、佐伯藩の中でも最も面積の広い家臣の屋敷地である。調査箇所は屋敷地の東端の一角にあたる。

アスファルト舗装（第Ⅰ層）を除去すると、全面に暗褐色の整地層（第Ⅱ層）と青灰色砂層を確認した。第Ⅱ層からは近世末頃の遺物に加えて近代以降の遺物も多く出土したことから、近代の整地層であると判断し、第Ⅲ層まで重機により除去した。なお、第Ⅱ層掘削中に調査区北西で石組み井戸を検出している。

第Ⅱ層および第Ⅲ層を除去すると、全面に近世末頃の遺物を含むやや軟質の整地層（第Ⅳ層）が堆積しており、その上面で廃棄土坑やいくつかのピット等を検出した。生活面は第Ⅱ層と第Ⅲ層の整地層によって削平されているため、戸倉家屋敷跡で検出した遺構は全て上部を消失していると考えられる。確認調査で検出した木材は第Ⅳ層上面での検出となる。確認調査時はこうした木材が等間隔におかれ、胴木のような施設の基礎が周囲にも広がっている可能性を想定していた。本調査の結果、検出した木材は単独で第Ⅳ層に混入していたものであることが分かった。

第Ⅳ層の堆積は戸倉家屋敷地の中央に近い西側ほど厚く、調査区の西端では検出面から1.5m以上の堆積がある。一方で保田家屋敷との境界付近では薄くなり、保田家の整地層の上に重なっている。今回の調査によって地表から約1mまでの整地層を除去した時点で、保田家屋敷に近い調査区東半は地山である砂層が現れるが、調査区西半は第Ⅳ層がさらに深くまで堆積している。

遺構（第7図～第11図・第1表）

検出した遺構は、土坑とピットである。

土坑は4基を検出した。S1とS2は瓦廃棄土坑である。S1は浅く、おそらく上部を後世の整地によって失ったものと考えられる。遺物は平瓦片のほか、18世紀後半の陶磁器が少数出土した。これに対してS2は遺構の残存率は比較的良く、内部には多量の瓦と礫が廃

棄されていた。瓦はそのほとんどが平瓦と椀瓦で、瓦当はない。18世紀代の陶磁器とともに、中世末から近世初期頃のものも含まれる。

S5・S6・S7は第Ⅳ層除去後に検出したもので、第Ⅳ層の残存の可能性もあるが、比較的明瞭な輪郭を観察できたために土坑として図化したものである。S5とS7はやや不整形の土坑、S6は礫廃棄土坑と考えられる。出土遺物には近世後期の遺物と近世初期の遺物が混在する。ここでは近世初期の遺物を中心に図化した。

これらの遺構から出土した近世初期の遺物は、後述するように第Ⅳ層の下位に現れる最下層の第Ⅻ層の遺物が混入していた可能性がある。

遺物（第12図～第21図・第2表～第3表） 土坑出土遺物（第12図・第13図）

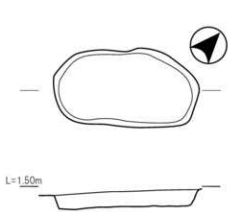
戸倉家屋敷跡の出土遺物として図化したものは1～16である。遺構内出土遺物は多くはなく、18世紀後半を中心とする陶磁器のなかに、3・7・11・14など16世紀末から17世紀前半の肥前陶器や8・12といった16世紀代の輸入磁器がわずかに含まれる。

第Ⅰ層・第Ⅱ層出土遺物（第14図・第15図）

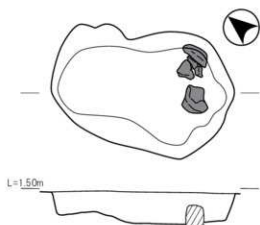
整地層のうち、第Ⅰ層から第Ⅲ層までは近代・現代の遺物に混じて18世紀から19世紀代の近世遺物が出土している。特殊なものとして21の19世紀中頃のイギリス産磁器皿がある。高台内部の文字はDAWSONの頭文字を欠いたものであろう。22は1590～1610年代の在地産と思われる陶器皿である。灰オリーブ色の灰釉がかかる。佐伯藩の初期に短期間採集したとされる波越焼の可能性が高い。23は16世紀朝鮮産の白磁皿、24は17世紀前半の漳州産色絵皿。26・31は中世末期に遡る向付で、26はいわゆる織部の製品、31は志野である。

第Ⅳ層出土遺物（第15図～第20図）

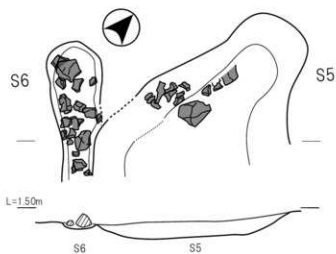
32～106は第Ⅳ層の出土遺物で、18世紀後半から19世紀の遺物が主体となる。82は関西系の灰落して、使用によって口縁部はすべて釉が剥落する。84の水滴は墨入れとして用いられたらしく、内部に墨が付着する。98は土師質の火鉢である。同一個体と思われる破片には器表面に赤と黒の漆が塗られていた（図版3）。



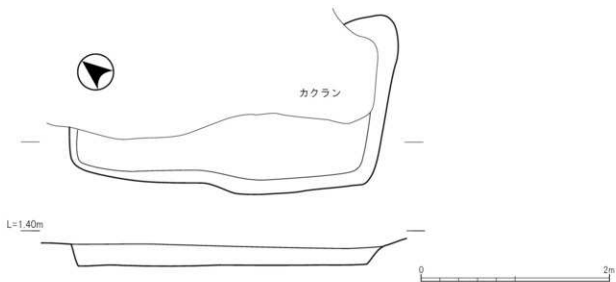
第8図 S1遺構実測図 (S=1/40)



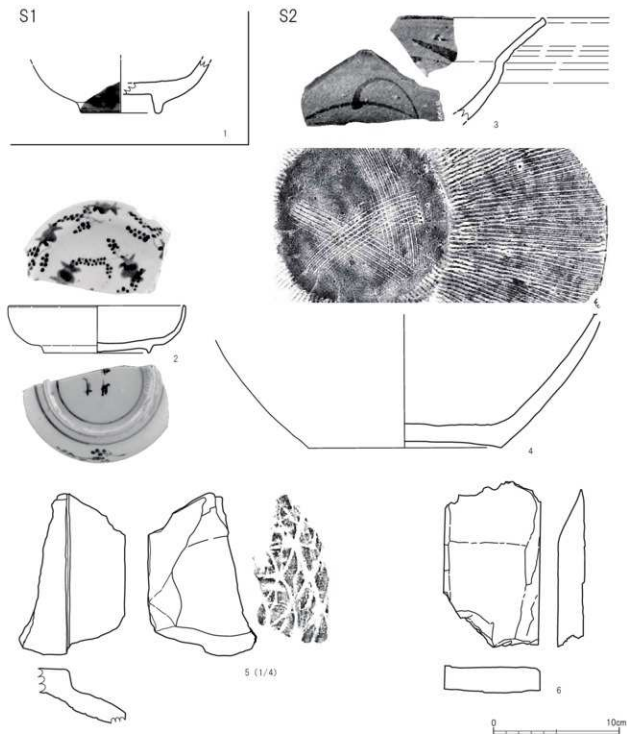
第9図 S2遺構実測図 (S=1/40)



第10図 S5・S6遺構実測図 (S=1/40)



第11図 S7遺構実測図 (S=1/40)



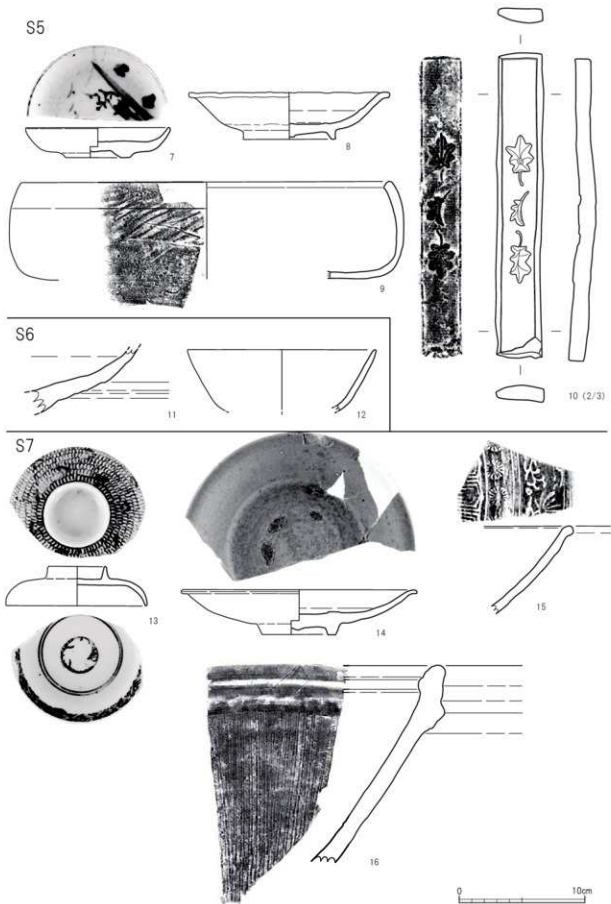
第12図 戸倉家屋敷跡遺構内出土遺物1 (1/3)

第Ⅻ層出土遺物 (第21図)

なお、第Ⅻ層は地山層にあたるが、上層の遺物の混入とみられる資料がわずかに出土した。107は輸出用に作られた小杯で、未製品であった33に対して、色絵を施した完成品である。輸出先のヨーロッパではコーヒーカップとして使用された。114も輸出向け製品で、マスタードポットとして用いられたものであろう。

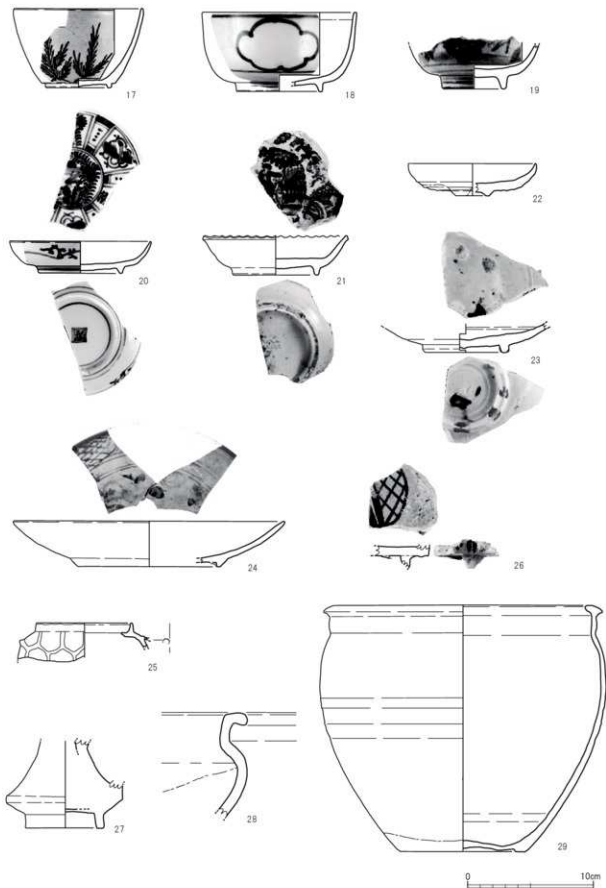
攪乱出土遺物 (第21図)

攪乱からの出土資料は2点を図化した。115は明治初期の白杵で製作された焜炉。116は軒丸瓦で、瓦当には家紋と思われる文様がある。第Ⅳ層からは木質の資料も少なからず出土しており、多くは原形をとどめていなかったが、116と同じ紋の入った漆塗りの碗の一部が出土している (図版3)。



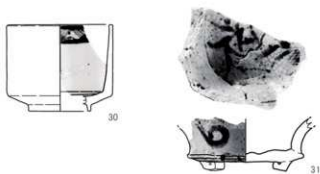
第13図 戸倉家屋敷跡遺構内出土遺物2 (1/3)

I 層

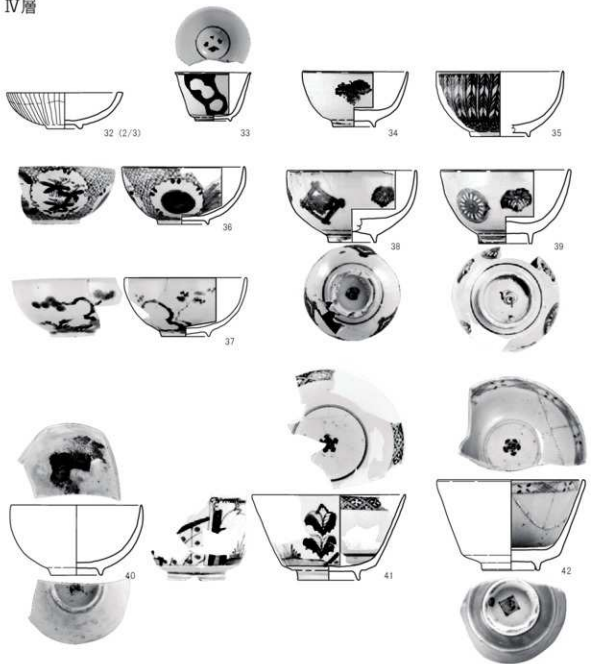


第14図 戸倉家屋敷跡整地層出土遺物1 (1/3)

II層



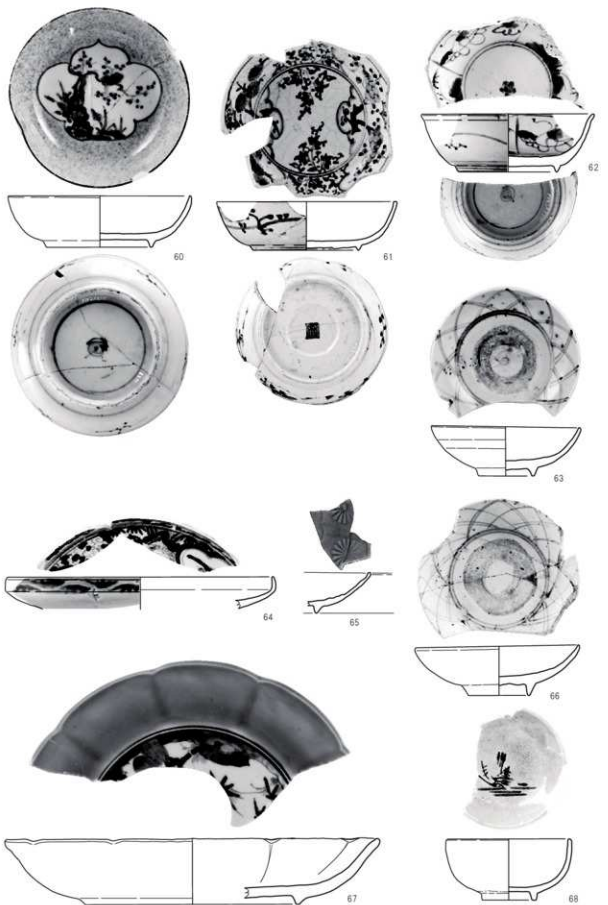
IV層



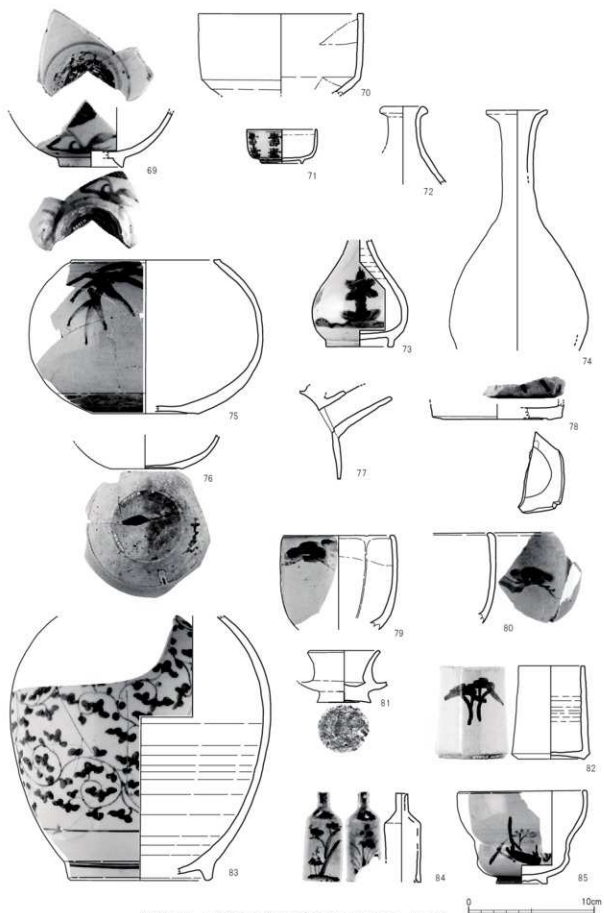
第15図 戸倉家屋敷跡整地層出土遺物2 (1/3)



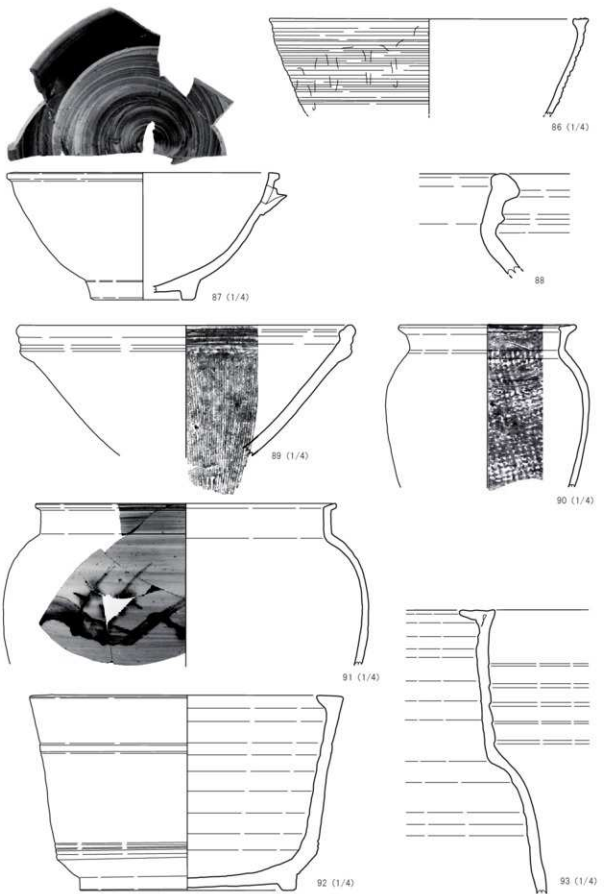
第16図 戸倉家屋敷跡地層出土遺物3 (1/3)



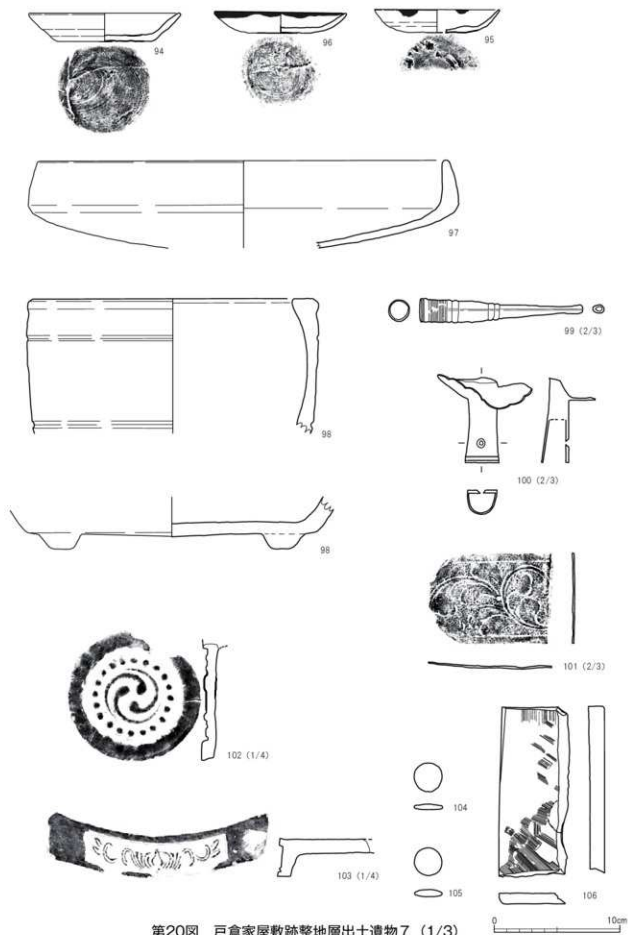
第17図 戸倉家屋敷跡整地層出土遺物4 (1/3)



第18図 戸倉家屋敷跡地層出土遺物5 (1/3)

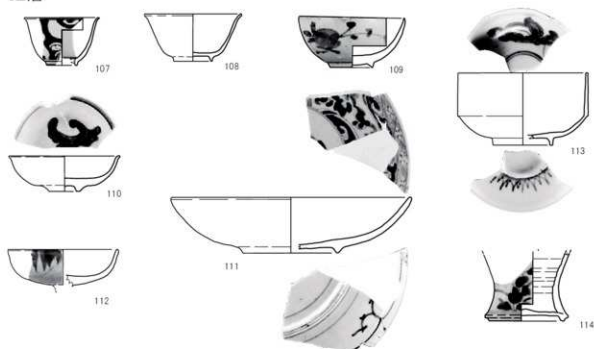


第19図 戸倉家屋敷跡整地層出土遺物6 (1/3)



第20図 戸倉家屋敷跡整地層出土遺物7 (1/3)

XII層



攪乱



第21図 戸倉家屋敷跡整地層出土遺物8 (1/3)



第1表 戸倉家屋敷跡遺構一覧

遺構番号	種別	埋土注記	備考
S1	廃棄土坑	i : 暗灰褐色土。締まり弱く、粘性やや弱い。炭を含む。 ii : 黄褐色土。締まり・粘性やや強い。壁土か。	
S2	廃棄土坑	暗灰褐色土。締まり・粘性やや強い。砂・炭・赤褐色粒を含む。	
S5	土坑	黒褐色砂質土。	
S6	廃棄土坑	暗灰色砂質土。礫を多量に含む。	
S7	土坑	暗褐色砂質土。礫を含む。	
S8	ビット	暗灰色砂質土。炭を含む。	
S9	ビット	黒褐色土。やや砂質。	
S10	ビット	褐灰色砂質土。炭・小礫を含む。	
S11	ビット	暗褐色土。粘性やや強く、やや砂質。	
S12	ビット	暗茶褐色土。緑灰色礫を含む。	
S13	ビット	暗茶褐色土。緑灰色礫を含む。	
S14	ビット	暗褐色土。黄褐色ブロックを含む。	
S19	ビット	茶褐色土。粘性強い。	

第2表 戸倉家屋敷跡遺物一覧1

陶器番号	位置	種類	器種	法 屋(cm)		文 様					年代	産地	備 考			
				口径	器高	底径	胎付・胎	外面	内面	見込み				高台内		
1	S1	陶器	碗			(5.0)	胎付染付					18C後半	肥前	貫入		
2	S2	磁器	皿	(11.3)	3.0	6.8	染付・透明釉	折枝	桃か		大明半葉	18C前半	肥前	コンニャク印判、やや酸化気味		
3	S2	陶器	皿				透明釉・黄絵					1590～1610年代	肥前			
4	S2	陶器	抹茶鉢			14.5						18C前半～中葉	堺			
5	S2	瓦	丸瓦			幅13.6								内面布目模・色調くすんだ黄緑色		
6	S2	石製品	規			幅6.0										
7	S5	磁器	手塚皿	(9.2)	1.9	4.0	染付・透明釉		山水			1640年代頃	肥前	口紅・高台置付輪割ぎ・砂付着		
8	S5	磁器	皿	(12.8)	3.1	6.0	白磁					16C後半	福建省	梅花里、藍の目輪割(重ね焼きの跡)の上へのせた皿の一部が残る・高台回り縁割		
9	S5	土師器	焙烙	(25.4)	6.7	(24.8)						17C前半～中	大阪周辺	内外面ヨコナギとナギ・外面中位平行明き・口縁保存着		
10	S5	鉄製品	小柄			幅1.4	厚0.5							紅葉文か		
11	S6	陶器	皿小									1590～1630年代	肥前			
12	S6	磁器	碗	(12.0)			白磁					明末	漳州			
13	S7	磁器	蓋	(9.0)	2.5	3.5	染付・透明釉	胡蝶草	胡蝶草			1820～60年代	肥前			
14	S7	陶器	皿	(15.0)	2.8	4.7	透明釉					1610～40年代	肥前	砂目積・兜巾有・全面施釉・置付目縁付着		
15	S7	陶器	大皿				染付・透明釉					17C後半頃	肥前	三島手		
16	S7	陶器	抹茶鉢				染付・透明釉					18～19C	備前系			
17	I	陶器	碗	(10.4)	6.4	(5.2)		若松				18C	関西系	小柄焼		
18	I	磁器	碗	(12.2)	6.4	(6.8)	染付・透明釉					18C後半頃	有田	蓋物・色絵生地		
19	I	陶器	碗			5.0	胎付染付					17C第4半期～18C	有田か			
20	I	磁器	皿	(11.4)	2.6	(6.8)	染付・透明釉		芙蓉手			18C第2第3第4半期	有田			
21	I	磁器	皿	(11.8)	3.2	(6.8)	黄絵印判					19C中頃	イギリス	全面施釉・高台内朝印・「DAWSON」か		
22	I	陶器	皿	(10.4)	2.6	2.8	灰釉					1590～1610年代	在来か			
23	I	磁器	皿			(6.4)	白磁					16C	朝鮮	砂目積・胎土に黒色粒子多く含む		
24	I	陶器	皿	(22.0)	3.7	(11.6)	色絵					17C前半	漳州			
25	I	陶器	念珠	(7.4)								19C	関西系	万古焼か		
26	I	陶器	肉付				長石釉・黄絵					1590年後	織部			
27	I	陶器	湯差し			5.8	鉄釉					18C代	肥前	取っ手付か		
28	I	磁器	大香炉				青磁					18C代	肥前			
29	I	陶器	甕	(30.2)		(13.6)						19C	関西系	高根岩見など中国地方の可能性も		
30	II	磁器	碗	(8.2)	6.7	(4.8)	青磁染付		四方罫			18C後半	肥前	筒型碗		
31	II	陶器	肉付			(9.0)	長石釉・黄絵					16C末	志野			
32	IV	磁器	紅皿	4.3	1.4	1.4	白磁					18C中頃～末	肥前	貝殻状型押し		
33	IV	磁器	小碗	5.9	3.8	2.7	染付色絵生地					18C前半	有田	政州輸出用コーヒークップ・未製品		
34	IV	磁器	小碗	8.1	3.3	4.3	染付・透明釉					18C中～末	肥前	コンニャク印判・黄熟受ける		
35	IV	磁器	碗	(9.9)	5.1	(4.6)	染付・透明釉	矢印模				18C前半	肥前			
36	IV	磁器	碗	9.5	4.5	4.0	染付・透明釉					18C前半	肥前			
37	IV	磁器	碗	9.6	4.6	3.7	染付・透明釉	梅樹				18C前半	有田	京焼の影響		
38	IV	磁器	碗	9.8	5.6	(3.8)	染付・透明釉	桐				濃福	18C第2～3第4半期	波佐見系	コンニャク印判	
39	IV	磁器	碗	10.0	5.8	4.3	染付・透明釉	桐・菊花				濃福	18C後半	肥前	コンニャク印判・くらわんか碗	
40	IV	磁器	碗	(10.3)	5.5	(4.0)	青磁染付					濃福	18C後半	肥前	模成不良	
41	IV	磁器	碗	(11.9)	6.7	4.8	染付・透明釉	草花	五弁花			18C第2～3第4半期	肥前	朝顔形碗		
42	IV	磁器	碗	(10.2)	7.1	4.5	青磁染付	四方罫	五弁花			濃福	18C後半	肥前	高台砂鉢	
43	IV	磁器	碗	(11.2)	5.7	4.5	染付・透明釉	梅樹				大明半葉	18C後半	波佐見	くらわんか碗	
44	IV	磁器	碗	(10.4)	5.3	4.2	染付・透明釉	雲龍梅樹				大明半葉	18C後半	肥前	くらわんか碗	
45	IV	磁器	碗	10.1	5.0	4.2	染付・透明釉	雲龍梅樹				大明半葉	18C後半	波佐見	くらわんか碗・置付砂付着	
46	IV	陶器	碗	(10.3)	6.3	4.8	鉄絵	若松				細紅(六)	18C第2～3第4半期	関西系	小砂焼	
47	IV	陶器	碗	(10.1)	6.5	4.9						17C末～18C初頃	肥前	筒形碗・模成不良		
48	IV	陶器	碗	(10.3)	6.7	4.8	刷毛目					18C前半	肥前			
49	IV	陶器	碗	(10.2)	6.6	4.2	灰釉					18C	肥前か	兜巾		
50	IV	磁器	碗	9.8	5.7	3.4	灰釉					18C後半	関西系	置付蓋胎・砂付着		
51	IV	陶器	碗	(9.0)	5.7	(3.2)	色絵					18C	関西	底部無釉		
52	IV	陶器	碗	(9.2)	5.2	(4.0)	灰釉・鉄絵					18C	関西系	腰折		
53	IV	陶器	碗	(9.3)	4.9	3.7	灰釉・鉄絵					18C前半	肥前	腰折		
54	IV	陶器	土瓶蓋	7.3	1.7	3.8	鉄釉					19C	関西系			
55	IV	陶器	蓋	(12.0)	1.6	(10.0)	鉄釉					18C後半～19C	関西系か	70とセットか		
56	IV	磁器	蓋	9.3	3.0	3.8	染付・透明釉					五弁花	濃福	18C第2第3第4半期	肥前	
57	IV	磁器	手塚皿	10.1	2.6	5.4	染付・透明釉						1690～1730年代	有田	八角形・型紙押	

第3表 戸倉家屋敷跡遺物一覧2

陶器番号	位置	種類	器種	法 屋(cm)			文 様				年代	産地	備 考		
				口径	器高	底径	絵付・輪	外面	内面	見込み				高台内	
26	IV	磁器	手塩皿	(11.0)	2.6	5.9	染付・透明釉		草花	五弁花	天明中期	18C後半	肥前	コナヤク印刷	
39	IV	磁器	皿			(9.0)	染付・透明釉					1660～80年代	肥前	コナヤク印刷	
40	IV	磁器	皿	14.3	4.1	8.4	染付・透明釉					18C第2～3四半期	有田	黒はじき	
61	IV	磁器	皿	14.1	3.8	8.4	染付・透明釉					18C第2～3四半期	肥前	吹き墨	
62	IV	磁器	皿	(13.5)	4.6	7.7	染付・透明釉					18C後半	肥前	蛇の目型高台・跡不明・焼成不良	
63	IV	磁器	皿	11.5	4.0	4.5	染付・透明釉					18C後半	肥前	流し見糸	
64	IV	磁器	皿	(23.2)			染付・透明釉		草花			18C後半	肥前	蛇の目輪割ぎ・貸付露胎	
65	IV	磁器	皿			3.2			白磁か			18C	肥前	型打ち成形	
66	IV	磁器	皿	13.0	4.0	4.8	染付・透明釉					18C後半	肥前	焼成不良・蛇の目輪割ぎ	
67	IV	磁器	皿	(29.4)	5.2	(17.0)						18C第2/3四半期	有田	漆繪・輪花皿	
68	IV	陶器	皿	10.0	4.8	4.3	鉄絵					18C第1四半期	肥前	京焼風陶器	
69	IV	磁器	碗			(5.0)	染付・透明釉					16C後半～17C初期	津州	貫入	
70	IV	陶器	蓋物	(13.2)			釉繪					18C後半～19C	関西系	SSとセットか	
71	IV	磁器	蓋物	(5.4)	2.7	(3.2)	染付・透明釉					18C第2～3四半期	肥前		
72	IV	陶器	瓶	3.2			黒灰釉・鉄絵					17～18C	福岡系		
73	IV	磁器	瓶			5.3	染付・透明釉					18C前半	肥前		
74	IV	磁器	瓶	4.8					青磁			17C後半	肥前		
75	IV	陶器	土瓶	(11.2)	12.3	8.4	鉄絵・鉄絵					18C中葉～末	肥前		
76	IV	陶器	土瓶			5.7	鉄絵					18C後半～幕末	関西系	底部墨書・足付きハツ楕	
77	IV	陶器	釣子				鉄絵					17C	瀬戸美濃		
78	IV	陶器	向付			(10.4)	長石釉					16C末	志野	びん積みか	
79	IV	陶器	火入れ	(8.6)			鉄絵・鉄絵					18C後半～19C	関西系		
80	IV	陶器	火入れ				鉄絵・鉄絵					18C後半～19C前半	関西系		
81	IV	陶器	灯火具	(5.5)	4.1	4.2	鉄絵					江戸後期	肥前	底部露胎・糸切	
82	IV	陶器	灰落し			5.3	鉄絵					18C後半～幕末	関西系	底部無輪・口縁部使用痕跡	
83	IV	磁器	大徳利			(11.0)	染付・透明釉					17C第4四半期～18C初期	有田		
84	IV	磁器	水筒	0.9	7.1	(3.1)						18C後半	肥前	型押し成形・墨入れか	
85	IV	陶器	小鉢	9.8	7.4	4.0	鉄絵・白磁絵					18C	関西系	高台無輪	
86	IV	陶器	大鉢	(33.6)			鉄絵・白磁絵					17C～18C	丹波か	口縁部付着	
87	IV	陶器	片口鉢	(28.3)	13.5	10.4	朝来目					18C前半	肥前	底部中位下位露胎	
88	IV	陶器	鉢				鉄目					17C～18C	丹波		
89	IV	陶器	楕鉢	(34.4)								18C～19C	堺		
90	IV	陶器	菓子窓	(18.8)			外面釉繪					17C後半～18C前半	肥前	叩き成形	
91	IV	陶器	羹	(31.6)			二彩手					17C末～18C前半	肥前		
92	IV	陶器	火鉢	(33.2)	20.7	23.0	鉄絵					18C後半～幕末	瀬戸美濃	見込み胎土目痕	
93	IV	陶器	羹				鉄泥					近世	信楽か		
94	IV	土器土質	皿	(11.3)	2.2	7.4								底部糸切・内外面ヨコナデ	
95	IV	土器土質	灯明皿	(9.9)	1.8	(4.8)								底部糸切り・備付着・内外面ヨコナデ	
96	IV	土器土質	灯明皿	10.3	1.7	4.8								底部糸切り・備付着・内外面ヨコナデ	
97	IV	土器土質	拾得	(32.6)								18C後半		内外面断面ナデ・外備付着・金雲母多含む	
98	IV	土器土質	火鉢か	(22.0)		(19.2)								漆塗り・内外面ヨコナデ	
99	IV	金属製品	磨管	長54.3		径8						18C		吸口	
100	IV	金属製品	不明												
101	IV	金属製品	飾り金具	長55.1		幅3.6									
102	IV	瓦	軒丸瓦			径10.9	瓦厚1.3							時計回り巴紋・真文◎	
103	IV	瓦	軒平瓦			瓦厚1.0	瓦厚0.7							楕状文を中心飾りとする均整磨草文	
104	IV	石製品	基石	径22		厚0.4								黒	
105	IV	石製品	基石	径22		厚0.5								黒い基石を白く塗る	
106	IV	石製品	基石	長5.133		幅5.4	厚1.2								
107	III	磁器	小鉢	(6.0)	3.8	(2.4)	色絵					18C前半	有田	九州輸出用コーヒーカップ・33と同じ種類	
108	III	磁器	小鉢	(7.7)	3.7	3.1	白磁					18C	肥前		
109	III	磁器	碗	8.3	4.1	3.2	染付・透明釉					18C前半	肥前	丸碗	
110	III	磁器	手塩皿	(8.8)	2.8	2.5	染付・透明釉					1630～1640年代	肥前	貸付移付着・全面釉繪	
111	III	磁器	皿	(18.7)	4.4	7.4	染付・透明釉					18C前半～中葉	有田		
112	III	磁器	仏飯器	(8.8)			染付・透明釉						雨降	肥前	
113	III	磁器	碗	(10.4)	5.8	(4.8)	染付・透明釉					18C後半	有田		
114	III	磁器	菓子窓			5.9	染付・透明釉					17C後半	有田	九州輸出用・外面面取り・底部胎り付け	
115	III	瓦	軒丸瓦									明治	白袴	内面スス付着断面に割印「白袴丸山◎海軍」	
116	III	瓦	軒丸瓦												

第4節 保田家屋敷跡の調査

(1) 検出面1の調査

保田家屋敷跡の調査では、3枚の遺構検出面を確認した。ここでは、それぞれ上層から検出面1・検出面2・検出面3として報告を行う。

検出面1の調査は、アスファルト等の現代舗装である第I層を除去し、その下位に検出した焼土粒の混じる第V層の掘削から開始した。検出当初は第V層を近代の整地層と考えていたため重機によって掘削を進めたが、層中の遺物から近世後半頃の層であると判明し、作業員による精査と掘削に切り替えた。第V層は層厚が薄く、近代の造成の影響もあって堆積状況は不安定だったため、最終的な遺構検出面は第VI層上面である。第VI層は固く締まる黄褐色礫混層で、保田家屋敷跡の中央から南東にかけて厚く堆積する整地層である。北東・北西・南西の屋敷境に近くにつれて薄くなり、さらに下層の第VII層が露出するようになる。調査区の北西には現代の建築物に伴う攪乱があり、1m近い大きな礫がまとめて廃棄されていた。

遺構 (第22図・第4表～第5表)

検出した遺構は、建物跡、柱穴列、埋壘、焼土土坑、廃棄土坑、石敷き、杭痕である。

1号建物跡 (第22図・第23図)

調査区の中央からやや北東側にかけて、礎石や礎石跡・石列が規則的に並ぶ状況を確認できることから、礎石建物跡の一部であると考えた。礎石の多くは掘り込みを確認できず、根石も見られなかった。S39・S40・S58・S59・S84などは浅い掘り込みの底面に拳大の礫を数個検出し、礎石を抜き取られた跡であろう。こうした礎石や礎石跡の配列は、断面A-A'・B-B'とC-C'が軸となると思われる。なお、調査時にはこれらの礎石に囲まれた範囲を建物の想定範囲としてS80と遺構番号を付して遺物の取り上げを行った

が、遺構検出面とした第VI層が不安定で、下層の第VII層が露出する状況である。

1号柱穴列 (第22図・第23図)

柱穴列と捉えたS36・S37・S38は掘り込みのなかに30cm以上の大振りの礫があり、先述の建物礎石とは状況が異なる。軸もずれることから別遺構の一部であろう。S37・S38では最下部に礫を据えていることから、柱を地下に埋めるタイプの柱穴列と考えられる。S38でさし銭状態であったと思われる銭貨が出土しており、祭祀行為が行われた可能性もある。

2号柱穴列 (第22図・第23図)

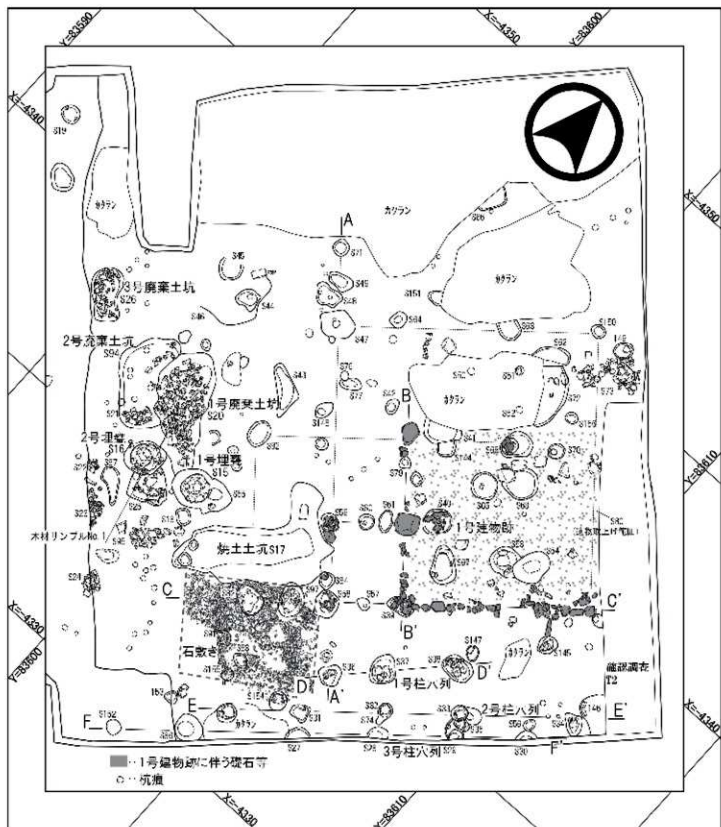
調査区の南東壁際にも柱穴が並び、建物礎石や1号柱穴列ともわずかに軸がずれている。2号柱穴列としたものはS31～S34である。検出面から浅い掘り込みの底面に礫の平坦面を上にして据えている。S31の南西方向には攪乱の下位に同様の礫が検出されており、一連の遺構である可能性が高い。

3号柱穴列 (第22図・第23図)

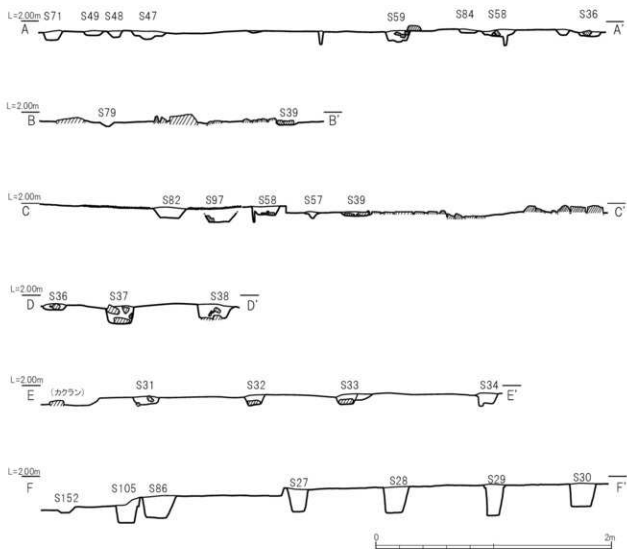
S27～S30・S86が調査区南東壁に沿って並び、先述の2号柱穴列とはほぼ並行しているが、構造は各柱穴が深く、底面に礫を置かない点で異なる。S152も上部を攪乱によって失っているものの、柱穴列の一部の可能性がある。S27～S30は調査区南東壁面の土層にも現れ、第V層の上層から掘り込まれていることが判明したため、3号柱穴列は他の遺構よりも新しいものと判断できる。

1号埋壘 (第22図・第24図)

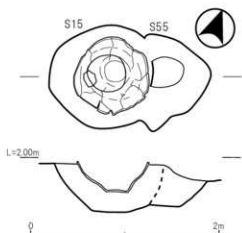
戸倉家との屋敷境近くに、対になると思われる埋壘2基を検出したうちの1基である。第V層掘削中に土器片が円形に現れ、周囲を精査したことで掘り方も確認することができた。埋壘は最大径約80cmの大型のもので、頭部以下はほぼ完存する。口縁部付近の破片の多くは壘の内部に散乱していたことから、人為的に破棄されて埋められたとみられる。埋土には焼土や炭化物が多く含まれ、掘方と壘の間に礫を配置することで安定させている。同じ構造の埋壘が2基並ぶことから便所



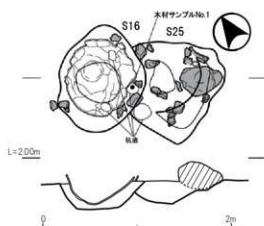
第22図 保田家屋敷跡検出面1遺構配置図 (S=1/100)



第23図 保田家屋敷跡検出面1遺構断面図 (S=1/80)



第24図 S15・S55遺構実測図
(S=1/40)



第25図 S16・S25遺構実測図
(S=1/40)

遺構を想定していたが、埋土を寄生虫卵分析にかけたところ、寄生虫の痕跡は発見できなかった。また、掘方とほぼ同じ規模の土坑S55を切っている。

2号埋壘（第22図・第25図）

遺構の規模・埋土の特徴は1号埋壘とほぼ同じであるため、1号埋壘と対で設置されたものと考えられる。掘方と同規模の土坑S25を切ることも共通する。S55とS25はより古期の埋壘であった可能性が高く、わずかに場所をずらして改修されたと考えられる。

焼土土坑（第22図）

焼土土坑としたS17は長辺約4mを測る平面L字型の土坑で、埋土には焼土や焼土粒が多量に含まれている。他の土坑に比べて埋土中の焼土が非常に多く、焼土の廃棄土坑であると判断した。S59を避けるように掘られており、周囲の施設に規制を受けた形状である可能性が高く、他の遺構よりも新期の遺構と判断できる。

1号廃棄土坑（第22図）

埋壘などと同じく、戸倉家との屋敷境に近い部分にやや不整形な土坑を検出した。S20は不整形な平面形の土坑で、埋土中に10～30cmの礫が多いことから礫廃棄土坑とした。

2号廃棄土坑（第22図）

S26は礫とともに多数の瓦も廃棄されており、その大半は平瓦と棧瓦である。

3号廃棄土坑（第22図）

S94は礫や瓦などは少ないが、少破片も含めた陶磁器類は比較的多く、これも廃棄土坑の一つとした。

石敷き（第22図）

1号建物跡の南西側に、3cmほどの厚さを持って小円礫・破砕礫が敷かれている。一部を重機掘削の際に削ってしまったが、焼土土坑に壊されている部分を除けば約4m四方の範囲であったものと思われる。

杭痕（第22図）

保田家屋敷跡のなかでも特に南西の戸倉家との敷地境に沿って顕著で、上記の遺構を

切っているものが多い。整然と並ぶものはないことから、櫛列ではなく土塀などを支える基礎杭の痕跡であると考えられる。

杭痕のうち、いくつかは杭の先端部が地中に残存していた。2号埋壘（S16）が破棄された後に打ち込まれた木杭（木材サンプルNo.1）について年代測定と樹種同定を行った結果、マツ属の樹木で17世紀後半から18世紀前半、または19世紀代の可能性が高いことが分かった。2号埋壘（S16）で18世紀後半の遺物が出土していることから、杭は19世紀に打たれたものと判断した。

遺物（第26図～第39図・第6表～第9表）

検出面1に関する出土遺物として図化したものは117～293である。

このうち遺構内の遺物は117～186である。まとまった量の遺物が伴う遺構が少ないために各遺構毎の年代を推測することは難しい。16世紀末から17世紀前半頃までの遺物が散見されるものの、検出面1の遺構全体としては18世紀後半頃に位置づけられる。

埋壘出土遺物（第26図）

117と118はそれぞれS15・S16の埋壘である。砂粒を含む胎土は土器に近い印象を受け、屈曲部分には輪積みの痕跡が見られる。117は口縁部から体部にかけての外面約20cmが暗褐色に変色し、この部分を地表に出していたものと思われる。また内外面に剥落がある。このほかS16には18世紀代の遺物が出土する。S16に切られるS25からは丸瓦の瓦当が出土したのみ。

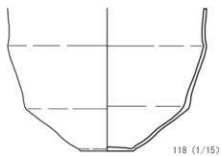
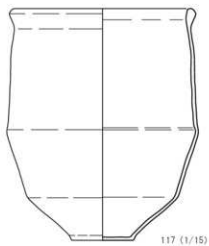
焼土土坑出土遺物（第26図）

123～125は焼土土坑としたS17の出土遺物。123は瀬戸美濃産天目碗で16世紀末から17世紀初頭。この他には瓦が出土した。

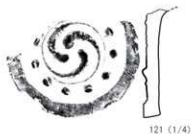
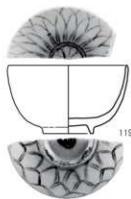
廃棄土坑出土遺物（第27図）

126～138は廃棄土坑と考えたS20・S26・S94からの出土で、少破片が多く、図化可能なものは少なかった。131は油差しの注口部分である。132は漳州窯産の皿で、口縁部を

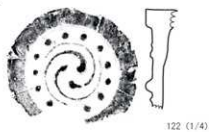
S15



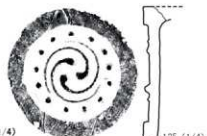
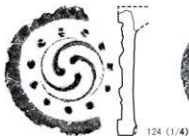
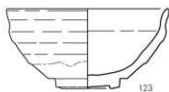
S16



S25



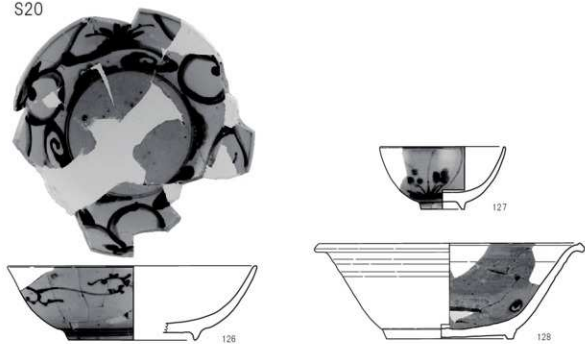
S17



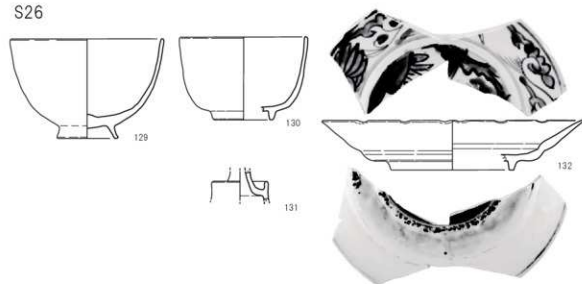
0 10cm

第26図 保田家屋敷跡検出面1遺構内出土遺物1 (S=1/3)

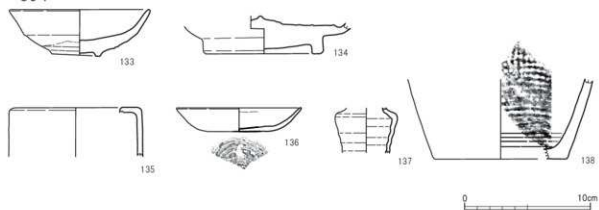
S20



S26

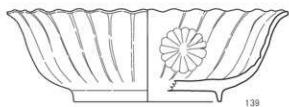


S94



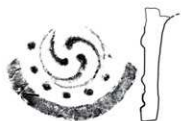
第27図 保田家屋敷跡検出面1遺構内出土遺物2 (S=1/3)

S21



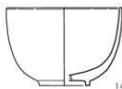
139

S22



140 (1/4)

S23



141

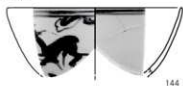


142



143 (1/4)

S37ii



144



145



146

S38



147



148 (2/3)



149 (2/3)



150 (2/3)



151 (2/3)

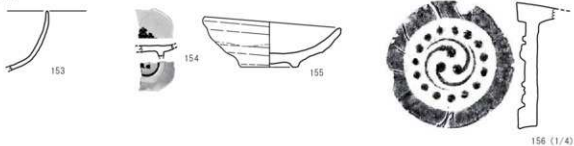


152 (2/3)

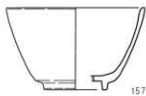
0 10cm

第28図 保田家屋敷跡検出面1遺構内出土遺物3 (S=1/3)

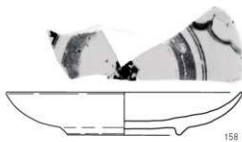
S41



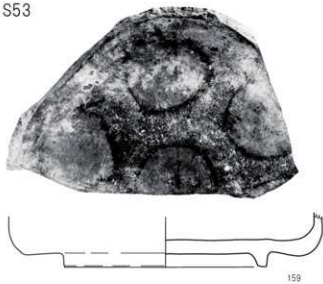
S43



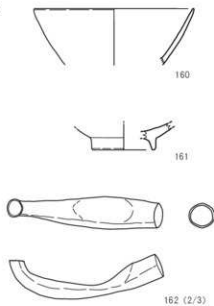
S46



S53



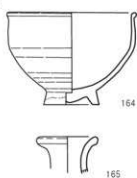
S54



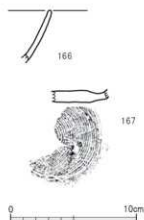
S66



S67



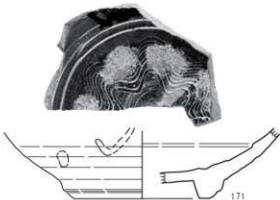
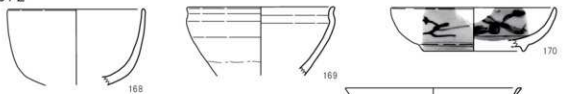
S71



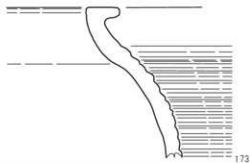
0 10cm

第29図 保田家屋敷跡検出面1遺構内出土遺物4 (S=1/3)

S72



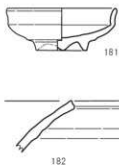
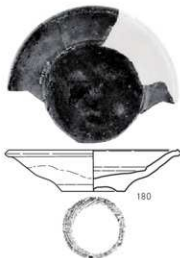
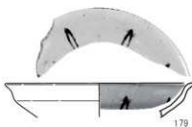
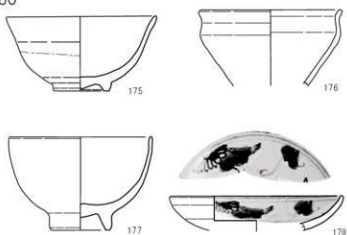
S77



S87

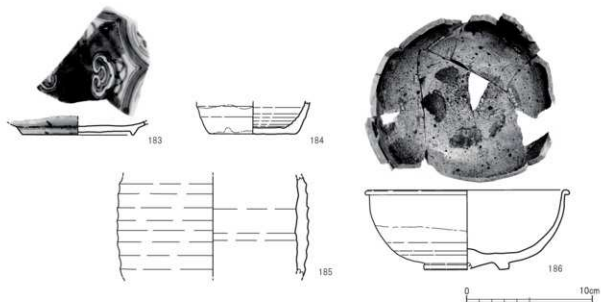


S80



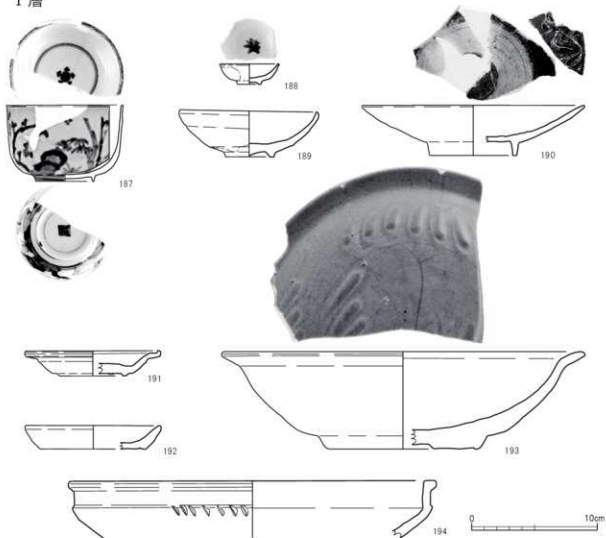
0 10cm

第30図 保田家屋敷跡検出面1遺構内出土遺物5 (S=1/3)

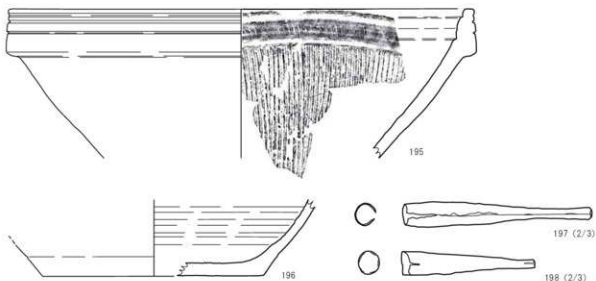


第31図 保田家屋敷跡検出面1 遺構内出土遺物6 (S=1/3)

I 層



第32図 保田家屋敷跡検出面1 整地層出土遺物1 (S=1/3)



攪乱



第33図 保田家屋敷跡検出面1 整地層出土遺物2 (S=1/3)



小さく窪める輪花皿である。S94からの出土遺物には135の瀬戸美濃産陶器水差しや、137の瀬戸美濃産茶入れもしくは肩衝があり、17世紀代の茶道具が目を引く。

その他の遺構出土遺物(第28図～第30図)

140～174までは、はっきりと建物跡に帰属させられなかった柱穴や小型の土坑からの出土遺物である。146は肥前陶器の台付皿で、台部分は別造りとしている。148～152はS38で出土した寛永通宝である。合計30枚分があり、さし銭の状態であったと考えられる。地鎮などの祭祀が行われた可能性がある。

1号建物跡範囲内出土遺物(第30図・第31図)

175～186は、礎石に囲まれた建物跡想定範囲をS80として取り上げた遺物である。17

世紀前半代の遺物が主となるが、下層の整地層が現れている状態であったことは考慮しておく必要がある。

187～293は整地層からの出土遺物である。

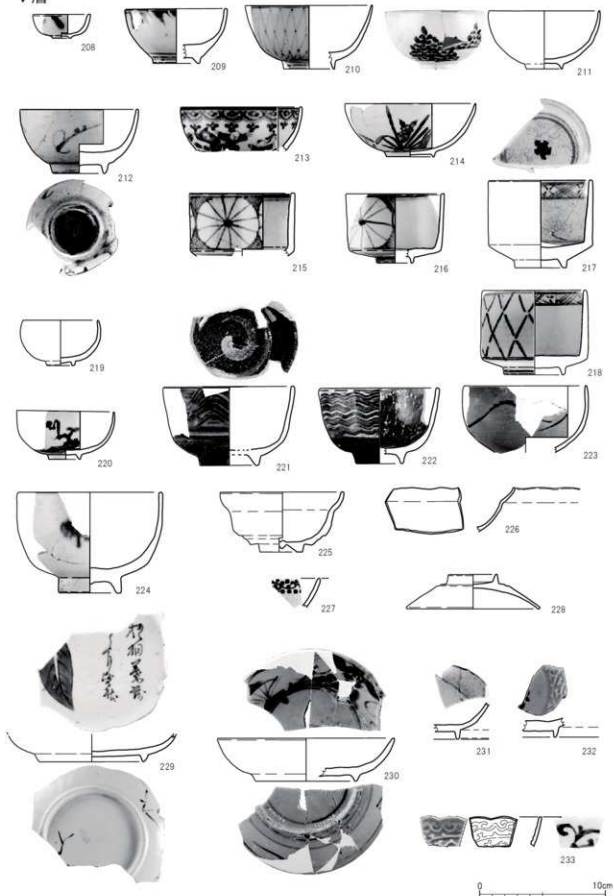
第I層・攪乱出土遺物(第32図・第33図)

第I層は戸倉家屋敷跡と同じく現代のアスファルト舗装に伴うものであるが、近世後期の陶磁器のほか近世初期の遺物が少数出土している。また、攪乱では第I層と同様の遺物に中世の輸入銭貨から近代までの銭貨が出土した。

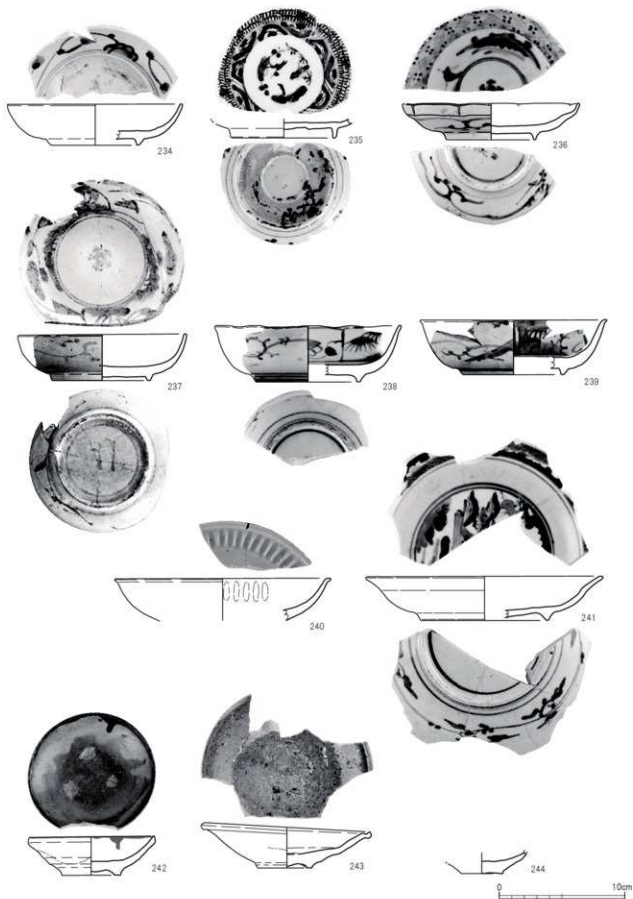
第V層出土遺物(第34図～第38図)

第V層からの出土遺物は208～272である。第V層は検出した遺構を覆っていた整地層で、18世紀後半頃から19世紀にかかる遺物が主体である。碗と皿はほぼ肥前産で、わずか

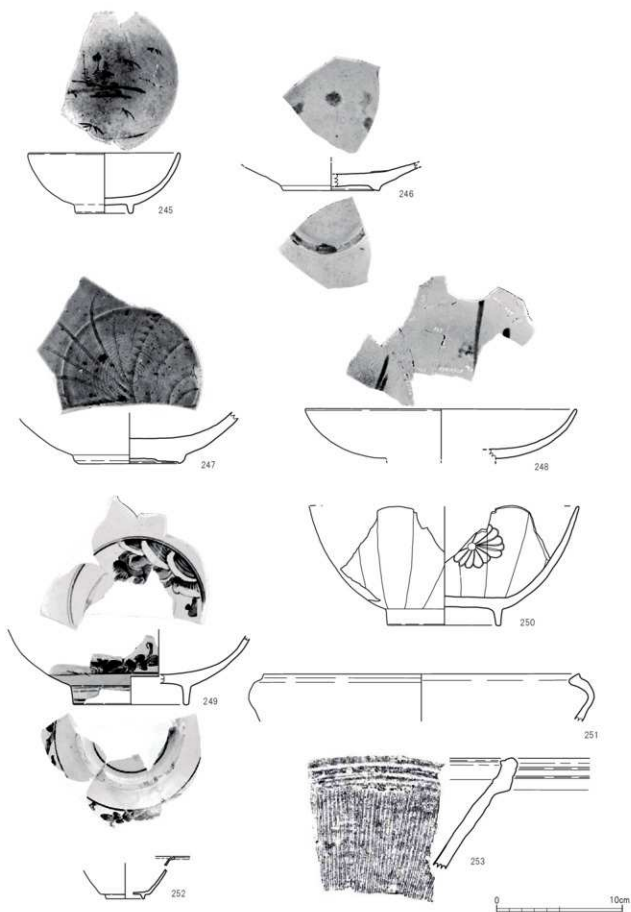
V層



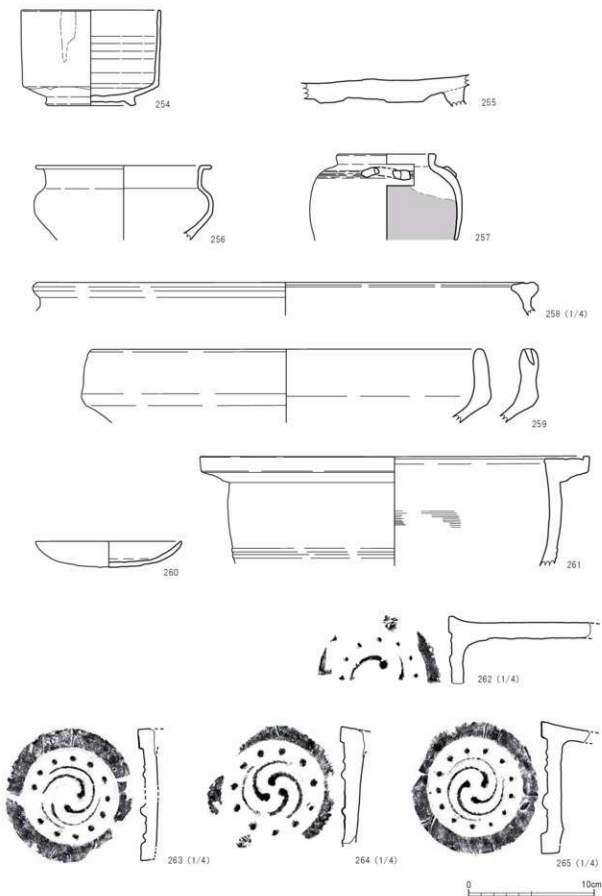
第34図 保田家屋敷跡検出面1 整地層出土遺物3 (S=1/3)



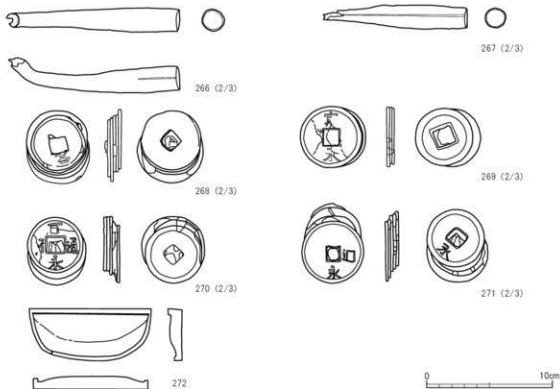
第35図 保田家屋敷跡検出面1 整地層出土遺物4 (S=1/3)



第36図 保田家屋敷跡検出面1 整地層出土遺物5 (S=1/3)



第37図 保田家屋敷跡検出面1 整地層出土遺物6 (S=1/3)



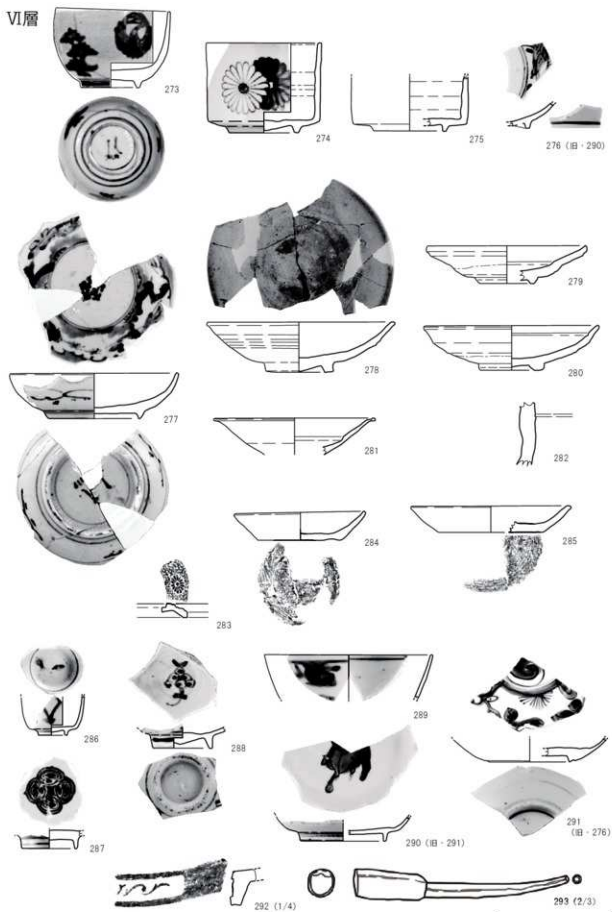
第38図 保田家屋敷跡検出面1 整地層出土遺物7 (S=1/3)

に関西産などがある。肥前産磁器碗には215～218の筒型碗が一定量含まれる一方で、くらわんか碗はわずかである。陶器碗のうち223は18世紀代の関西産色絵。227も関西産の色絵陶器碗か小杯。224は肥前産陶器碗のいわゆる呉器手碗で、体部に銅緑釉を流し掛ける。皿は多数を占める磁器製品が18世紀後半にまとまりが見られるのに対し、陶器皿は17世紀の製品が目立つ。237は全面が被熱をうけ、軸は白濁し素地は橙色に変色している。242・243は16世紀末から17世紀前半の肥前陶器皿。244は肥前産陶器小皿で、底部には糸きり痕がある。246は陶器皿で、近世初期に操業した小倉藩菜園場窯の製品である。248は17世紀末から18世紀初頭の肥前産陶器台付皿で、台の剥落痕をわずかに観察できる。226と250は有田南川原窯の上手の製品で、17世紀末から18世紀初頭の皿と鉢。251・255は17世紀、福岡上野産の比較的大型の製品である。261は瓦質の火鉢とみられ、中世末期に大分市周辺で製作されたものの可能性がある。268～271は銅銭で計22枚の寛永通宝で、まとめて出土したが、遺構は検

出されなかった。272は半円形の石製硯である。
第VI層出土遺物 (第39図)

273～293は、遺構検出層であり、旧生活面と想定した第VI層からの出土遺物である。第VI層自体が混入物の少ない非常に均質な整地層であり、層中からの出土遺物は少ない。第V層に比べると17世紀以前に遡る肥前産陶磁器が多いが、やはり18世紀代の遺物も一定量が含まれる。274・275は17世紀前半の筒型碗。壺付は露体で砂が付着する。276は17世紀後半から18世紀初頭の肥前磁器皿。277は同じく肥前産の磁器皿で18世紀第2四半期から第3四半期のもの。281は口縁端部が外反する溝縁皿で、1610～1630年の肥前産。282は壺の体部片とみられる。戸倉家第I層出土の22と同様の軸調で、近世初期に佐伯藩内で操業した波越焼の可能性がある。283は土師質の蓋であろう。菊花文を打ち出す。286～291は近世初期の輸入磁器である。288は漳州窯、その他は景徳鎮で製作されたものである。288は壺付に初殺とみられる付着物がある。

VI層



第39図 保田家屋敷跡検出面1整地層出土遺物8 (S=1/3)

第4表 保田家屋敷跡検出面1遺構一覧1

遺構番号	種別	埋土注記	備考
S15	埋堿	i : 暗灰褐色土。しまりやや強い。炭・焼土粒を多量に含む。 ii : 茶褐色土。締まり強い。焼土粒多く含む。	1号埋堿
S16	埋堿	i : 暗褐色土。しまりやや強い。炭・焼土粒を含む。 ii : 暗茶色土。締まり強い。焼土粒を含む。	2号埋堿
S17	土坑	i : 暗赤褐色土。炭・焼土を多量に含む。 ii : 暗褐色土。しまり強い。粘性やや強い。黄褐色ブロック多く含む。	焼土土坑
S18	ピット	茶褐色土。焼土・炭を含む。	
S20	廃棄土坑	茶褐色土。焼土・炭を含む。締まり強い。黄褐色礫・焼土粒を含む。	1号廃棄土坑
S21	礫集中		
S22	礫集中		
S23	礫集中		
S24	礫集中		
S25	土坑	暗茶色土。焼土・黄褐色礫を多く含む。	
S26	廃棄土坑	茶褐色土。瓦を多量に含み、焼土を含む。	2号廃棄土坑
S27	柱穴	暗茶色土。しまりやや強い。粘性弱い。小礫・焼土含む。	3号柱穴列
S28	柱穴	暗茶色土。しまり、粘性やや弱い。黄褐色礫・焼土含む。	3号柱穴列
S29	柱穴	暗茶色土。しまり、粘性やや弱い。黄褐色礫・焼土含む。	3号柱穴列
S30	柱穴	暗茶色土。しまり強い。粘性やや弱い。黄褐色礫・焼土含む。	3号柱穴列
S31	柱穴	暗灰褐色土。しまり強い。粘性弱い。やや砂質。	2号柱穴列
S32	柱穴	暗褐色土。しまり、粘性弱い。黄褐色礫含む。	2号柱穴列
S33	柱穴	暗褐色土。しまりやや強い。粘性弱い。黄褐色礫・焼土粒含む。	2号柱穴列
S34	柱穴	暗灰褐色土。しまり強い。粘性やや強い。炭含む。	2号柱穴列
S35	ピット	暗茶色土。しまり強い。粘性やや強い。焼土含む。	
S36	柱穴	暗茶色土。しまり、粘性弱い。焼土多量に含む。炭含む。	1号柱穴列
S37	柱穴	暗褐色土。しまり強い。粘性弱い。黄褐色礫少量含む。	1号柱穴列
S38	柱穴	暗褐色土。しまり強い。粘性弱い。焼土多く含む。	1号柱穴列
S39	柱穴	灰褐色土。しまりやや強い。粘性弱い。焼土多く含む。	1号建物跡
S40	柱穴	黄褐色土。しまり強い。粘性弱い。小礫含む。	1号建物跡
S41	土坑	茶褐色土。しまり、粘性やや弱い。礫多量に含む。	
S42	ピット	黒褐色土。しまりやや強い。粘性弱い。黄褐色礫含む。	
S43	土坑	暗茶褐色土。しまり、粘性やや強い。小礫・焼土粒・含む。	
S44	土坑	黒褐色土。しまり強い。粘性弱い。炭多く含む。小礫含む。	
S45	土坑	暗茶色土。しまり強い。粘性弱い。礫多量に含む。焼土粒含む。	
S46	土坑	茶褐色土。しまり強い。粘性弱い。黄褐色礫・炭含む。	
S47	土坑	茶褐色土。しまりやや強い。粘性やや弱い。黄褐色礫・焼土粒・炭含む。	
S48	土坑	茶褐色土。しまりやや強い。粘性やや弱い。黄褐色礫・焼土粒・炭含む。	
S49	土坑	茶褐色土。しまりやや強い。粘性やや弱い。黄褐色礫・焼土粒・炭含む。	
S50	ピット	暗茶褐色土。炭含む。	
S51	ピット	暗茶褐色土。炭含む。	
S52	ピット	暗茶褐色土。炭含む。	
S53	土坑	茶色土。しまり強い。粘性弱い。黄褐色ブロック・焼土ブロック・炭多く含む。	
S54	土坑	茶色土。しまり、粘性やや弱い。焼土粒・炭含む。	
S55	土坑	暗灰褐色土。しまりやや強い。粘性弱い。黄褐色礫・焼土含む。	
S56	ピット	暗褐色土。しまり、粘性やや弱い。焼土含む。	
S57	ピット	暗赤褐色土。しまり、粘性弱い。焼土粒、炭多量に含む。	
S58	柱穴	暗茶色土。しまり、粘性弱い。焼土粒・炭多量に含む。	1号建物跡
S59	柱穴	暗茶色土。しまり、粘性やや弱い。焼土粒多量に含む。	1号建物跡
S60	ピット	褐色土。しまりやや強い。粘性弱い。焼土ブロック・黄褐色ブロック・炭多く含む。	
S61	ピット	茶褐色土。しまり、粘性弱い。	

第5表 保田家屋敷跡検出面1遺構一覧2

遺構番号	種別	埋土注記	備考
S62	土坑	暗褐色土。しまり強い。粘性弱い。黄褐色ブロック多量に含む。焼土・炭含む。	
S63	土坑	黒褐色土。しまり強い。粘性弱い。焼土粒・炭含む。立ち上がりには明褐色土。	
S64	ピット	茶褐色土。しまりやや強い。粘性弱い。焼土粒・炭少量含む。	
S65	土坑	黒褐色土。しまりやや強い。粘性弱い。黄褐色礫・炭少量含む。	
S66	土坑	黒褐色土。しまり、粘性なし。炭多量に含む。焼土含む。	
S67	土坑	赤茶褐色土。しまり、粘性弱い。焼土粒含む。	
S68	土坑	暗褐色土。しまり強い。粘性弱い。黄褐色礫・炭少量含む。	
S69	土坑	明茶色土。しまり強い。粘性やや強い。黄褐色礫少量含む。	
S70	ピット	暗褐色土。しまり強い。粘性やや弱い。焼土粒含む。	
S71	ピット	暗褐色土。しまりやや弱い。粘性やや強い。焼土粒・炭含む。	
S72	土坑	暗灰褐色土。しまり強い。粘性なし。やや砂質。焼土・炭少量含む。	
S73	ピット	暗褐色土。しまりやや強い。粘性なし。やや砂質。焼土粒多く含む。炭含む。	
S74	ピット	暗赤褐色土。しまり、粘性弱い。焼土・炭多く含む。	
S75	杭跡	茶褐色土。しまり弱い。粘性やや弱い。焼土粒少量含む。	
S76	ピット	赤褐色土。しまり強い。粘性弱い。焼土粒含む。	
S77	ピット	黒灰色土。しまり弱い。粘性強い。炭多量に含む。	
S78	杭跡	黒灰色土。しまり弱い。粘性強い。炭多量に含む。	
S79	ピット	赤褐色土。しまりやや強い。粘性弱い。焼土含む。	
S80	整地層		建物想定範囲
S81	杭跡	赤褐色土。しまり強い。粘性弱い。焼土・炭含む。	
S82	ピット	暗褐色土。しまり弱い。粘性やや強い。黄褐色ブロック少量含む。	
S83	ピット	暗赤茶色土。しまりやや強い。粘性弱い。焼土含む。	
S84	柱穴	茶褐色土。しまりやや強い。粘性弱い。焼土含む。	1号建物跡
S85	杭跡	暗褐色土。しまり、粘性やや強い。焼土粒多く含む。炭含む。	
S86	柱穴	暗茶色土。しまり弱い。炭・ブロック土含む。	
S87	土坑	赤褐色土。炭・ブロック土含む。	
S91	柱穴	暗茶色土。しまりやや弱い。粘性弱い。焼土粒含む。	
S92	土坑	暗茶褐色土。しまりやや強い。粘性弱い。	
S94	廃棄土坑	暗茶色土。礫・炭・黄色ブロック含む。	3号廃棄土坑
S95	土坑	暗茶色土。礫・炭・黄色ブロック含む。	
S97	柱穴	暗茶色土。しまり、粘性やや強い。焼土粒少量含む。	
S141	土坑		整理報告用番号
S142	土坑		整理報告用番号
S143	土坑		整理報告用番号
S144	土坑		整理報告用番号
S145	柱穴		整理報告用番号
S146	土坑		整理報告用番号
S147	ピット		整理報告用番号
S148	ピット		整理報告用番号
S149	ピット		整理報告用番号
S150	ピット		整理報告用番号
S151	ピット		整理報告用番号
S152	柱穴		3号柱穴列 整理報告用番号
S153	ピット		整理報告用番号
S154	ピット		整理報告用番号
S155	ピット		整理報告用番号
S156	ピット		整理報告用番号

第6表 保田家屋敷跡検出面I出土遺物一覽I

陶器 番号	位置	種類	器種	法 量(cm)			文 様				年 代	産地	備 考
				口径	器高	底径	輪付・輪	外面	内面	見込み			
117	S15	土師土器	罍			(21.3)							外面の割落多い
118	S16	土師土器	罍	(69.1)	(92.2)	(24.5)							外面の割落多い
119	S16	磁器	碗	(9.2)	5.4	4.0	染付・透明釉	二重黒目	二重黒目	溝掘	18C前半	流佐見	高台・砂付直
120	S16	磁器	碗	(12.7)	3.3	4.3	染付・透明釉			柳松雲	18C後半	流佐見	見込縁の目録調・高台跡
121	S16	瓦	軒丸瓦	瓦形10	瓦厚10		巴紋						反時計回り巴紋・珠文10+a
122	S25	瓦	軒丸瓦	瓦形10	瓦厚18								時計回り巴紋・珠文12+a
123	S17	陶器	鉢	(13.0)	6.3	5.0	鉄輪				16C～17C初	瀬戸美濃	天目碗
124	S17	瓦	軒丸瓦	瓦形13	瓦厚16								反時計回り巴紋・珠文11
125	S17	瓦	軒丸瓦	瓦形13	瓦厚15								時計回り巴紋・珠文13
126	S20	磁器	皿	19.8	5.9	10.0	染付・透明釉	毛・北本			18C後半	流佐見系	
127	S20	磁器	碗	(10.0)	5.0	3.4	染付・透明釉	草花			18C後半	肥前系	
128	S20	陶器	鉢	(28.2)	9.9	13.3	灰輪		黒縁赤目		18C後半～幕末	瀬戸美濃	高台跡・見込みに常置具痕有
129	S26	陶器	碗	(12.1)	7.9	4.8	透明釉				17C第2期3/4半期	肥前小	供器手碗
130	S26	陶器	鉢	(10.2)	6.6	(4.8)					17C後半	肥前	畳付輪調・砂付着
131	S26	磁器	湯差し	江津15	佐津42		白磁小				17C末～18C前半	肥前	
132	S26	磁器	皿	(20.8)	3.9	(9.8)	染付・透明釉				17C前半	津州	畳付砂付着・高台内無輪・輪花直
133	S94	陶器	鉢	11.2	3.8	4.0	蒸灰輪				1580～90年代	伊豆美濃	高台周辺露胎・高台内無輪
134	S94	磁器	壺小			9.2	白磁				1630～40年代	肥前	畳付輪調
135	S94	陶器	水指小	(10.4)			外面蒸灰輪 内面鉄輪				17C代	瀬戸美濃	
136	S94	土師土器	灯明皿	(10.0)	1.9	(4.8)							底部赤切・内面刻ナ字
137	S94	陶器	茶入れ 小留蓋				鉄輪				16C～17C初頭	瀬戸美濃	
138	S94	陶器	壺			(14.0)	鉄輪				1630年代～17C後半	肥前	印き成彩
139	S21	磁器	鉢	(22.2)	7.3	(11.6)	白磁	菊花			18C後半	肥前系	畳付輪花・陽刻
140	S22	瓦	軒丸瓦	瓦形14 (14.0)	瓦厚13								反時計回り巴紋・珠文7+a
141	S23	陶器	碗	(9.2)	6.2	(4.0)				陰刻	1690～18C初頭	肥前	京地風陶器
142	S23	陶器	碗	(10.4)	6.9	4.8					18C前半	肥前	朝毛目録・畳付輪調・砂付着
143	S23	瓦	軒丸瓦	瓦形10	瓦厚17						18C後半		横状文均整帯草文
144	S37 a	磁器	碗	(14.0)			染付・透明釉	雲			16C末～17C前半	景徳鎮	
145	S37 a	磁器	碗	(12.8)			口紅				1640～50年代	有田	
146	S37 a	陶器	台付皿								17C末～18C初	肥前	台は別
147	S38	磁器	小杯			3.4	染付・透明釉				17C後半	肥前	
148	S38	金属製品	銅銭								1698～		寛永通寶新寛永
149	S38	金属製品	銅銭								1636～		寛永通寶古寛永
150	S38	金属製品	銅銭								1698～		寛永通寶新寛永
151	S38	金属製品	銅銭								1636～		寛永通寶古寛永
152	S38	金属製品	銅銭								1636～		寛永通寶古寛永
153	S41	陶器	碗								18C	関西系信楽	
154	S41	磁器					青磁染付		五弁花	大明年間	18C前半	肥前	
155	S41	陶器	皿	11.0	4.0	4.5	灰輪				1590～1610	肥前	胎土目録・丸形皿・三日月高台・体部下 半露胎・口縁部に使用痕・焼成あまい
156	S41	瓦	軒丸瓦	瓦形13 13.4	瓦厚 1.8								時計回り巴紋・珠文15
157	S43	陶器	碗	(11.0)	6.5	(5.0)	透明釉				18C	関西系	小杯碗
158	S46	磁器	皿	(18.8)	3.4	(9.0)	染付・透明釉		五弁花		18C後半	流佐見	コンナヤ印・蛇の目録調
159	S53	陶器	大皿			(16.0)					16C末～17C初頭	備前	見込み常置具痕
160	S54	陶器	碗	(12.8)			鉄輪に灰輪 小長七輪を 裏し磨り				17C小	肥前小福間	
161	S54	陶器	鉢	(5.0)							17C後半	肥前	供器手碗・見込み油痕跡小
162	S54	金属製品	銅管	長 8.1									瓶首
163	S66	磁器	樽酒瓶小	2.4			色絵	つらら			江戸後期	肥前	軽い・焼熱小
164	S67	陶器	碗	10.3	7.3	4.5	灰輪				1610～30年代	肥前内野山	肥巾・高台跡
165	S67	陶器	瓶	4.9							16C末～17C初	備前小	
166	S71	磁器					青磁				17C中頃～後半	肥前	
167	S71	土師土器	皿			(9.4)							底部赤切・内面刻ナ字
168	S72	陶器	碗	(10.4)			透明釉						肥前
169	S72	陶器	碗	(11.8)			鉄輪				1590～1610年代	肥前	天碗
170	S72	磁器	碗	(13.0)	3.5	(4.0)	染付・透明釉	唐草			18C前半	肥前	

第7表 保田家屋敷跡検出面1出土遺物一覧2

陶器番号	位置	種類	器種	法長 (cm)			文様				年代	産地	備考	
				口径	器高	底径	絵付・施	外面	内面	見込み				高台内
171	S72	陶器	大皿			(11.4)	二彩					13世紀前半~18世紀前半	肥前	網毛目状文・見込み砂目跡
172	S72	金属製品	鉢	(14.0)										
173	S77	陶器	壺	(45.0)								17C代	丹波	
174	S87	磁器	皿	138			染付・透明釉	唐草				18C前半	肥前	
175	S80	陶器	碗	12.0	5.9	4.4	鉄軸					1800~1610年代	肥前	兜市
176	S80	陶器	碗	11.4			鉄軸					16C末~17C前半	瀬戸美濃	天目碗
177	S80	磁器	碗	(11.4)	7.4	4.6	白磁					1630~40年代	肥前	雲付轆漣
178	S80	磁器	小皿	(13.6)			染付・透明釉	菊花				1630~40年代	肥前	
179	S80	磁器	皿	(15.0)			染付・透明釉					1610~30年代	肥前	やや酸化気味
180	S80	陶器	皿	(14.0)	3.3	5.0	灰軸					1610~30年代	肥前	砂目様・溝線・底部赤切・三日月高台
181	S80	陶器	小皿	(8.5)	3.4	4.0	灰軸					1610~30年代	肥前	高台内兜市・雲付砂目蓋
182	S80	陶器	大皿				鉄軸					17C第29半期~後半	肥前	砂目様・溝線・底部赤切・三日月高台
183	S80	磁器	皿			(8.8)	染付			室		1590~17C前半	豊後鎮	
184	S80	陶器	椀									16C末~17C初頭	肥前	底部に砂付着
185	S80	陶器	赤土蓋				鉄軸					16C末~17C前半	瀬戸美濃	
186	S80	陶器	丹口鉢	(21.5)	8.4	9.0						1600~30年代	肥前	見込み砂目
187	I	磁器	鉢	(9.4)	6.1	4.6	染付・透明釉			五弁花	溝線	18C前半	有田	
188	I	磁器	缸	(4.8)	1.6	1.8	染付・透明釉					18C前半頃	肥前	雲押成形
189	I	陶器	皿	11.2	3.8	3.9	灰軸					1590~1610年代	肥前	高台付蓋・兜市・皮輪手・胎土目
190	I	陶器	皿	(18.0)	(4.0)	7.0	網毛目					18C第2~第39半期	肥前	見込み蛇目轆漣
191	I	陶器	皿	(11.0)	2.0	(5.4)	灰軸					16C後半	瀬戸美濃	折線・横文・見込み蓋・焼成不良
192	I	土器土器	皿	(11.0)	1.9	(8.5)							肥前	底部赤切・内外面ヨコナテ
193	I	磁器	皿	(29.0)	7.8	11.9	青磁					1670~90年代	濃佐見	蛇目門型高台・折線形・丹切り彫り
194	I	陶器	鉢	(29.4)			灰軸					17C初頭	福岡	口縁下部に胎土目・口唇部に貝目跡
195	I	陶器	漆鉢	(37.0)								18C~19C	堺	
196	I	陶器	薬小			17.5	灰軸					江戸後期	瀬戸美濃	砂目跡・体部下端と底部露胎
197	I	金属製品	棒管	長57.5	φ9.0									吸口
198	I	金属製品	棒管	長55.3	φ9.8									吸口
199	探査	金属製品	銅銭	径2.4								北宋(1023~1032年)		天智元寶小
200	探査	金属製品	銅銭	径2.4								北宋(1119~1125年)		宣和通寶
201	探査	金属製品	銅銭	径2.4								北宋(1028~1085年)か		元豊通宝小
202	探査	金属製品	銅銭	径2.4								北宋(1028~1085年)か		元豊通宝小
203	探査	金属製品	銅銭	径2.4								北宋(1028~1040年)		皇寧通宝
204	探査	金属製品	銅銭	径2.4								1636		寛永通宝(古寛永)
205	探査	金属製品	銅銭	径2.4								1636		寛永通宝(古寛永)
206	探査	金属製品	銅銭	径2.4								1636		寛永通宝(古寛永)
207	探査	金属製品	銅銭	径2.8								明治10年		一銭銅貨
208	V	磁器	缸	(4.5)	1.9	1.4	染付・透明釉					18C頃	肥前	雲押成形
209	V	磁器	小皿	(6.0)	4.2	(3.6)	染付・透明釉	雨降				18C前半	肥前系	
210	V	磁器	碗	(10.0)	5.0	(4.0)	染付・透明釉	網目				18C前半~中葉	肥前	
211	V	磁器	碗	8.8	4.6	2.9	染付・透明釉	草				18C前半	肥前	
212	V	磁器	碗	9.4	5.1	4.2	染付・透明釉				大明半葉	18C後半	濃佐見	くらわんか碗
213	V	磁器	碗	(9.6)			染付・透明釉	唐子菊	輪文			18C後半~19C初頭	越前・三浦	砂付・三浦
214	V	磁器	碗	(10.2)	4.2	3.8	染付・透明釉					18C後半	肥前	
215	V	磁器	碗	(8.4)			染付・透明釉	唐子菊				18C後半	肥前系	胎製碗
216	V	磁器	碗	(7.8)	5.5	(3.0)	染付・透明釉	唐子菊				1780~1810	肥前	胎製碗
217	V	磁器	碗	(8.2)	6.9	4.0	青磁染付		四方標	上段・刻		18C後半	肥前	胎製碗・コンニャク印
218	V	磁器	碗	(8.2)	6.7	(4.7)	染付・透明釉	格子目	四方標	上段・刻		18C	肥前	胎製碗・コンニャク印
219	V	陶器	小杯	(5.8)	3.5	2.0	施					18C	関西系	
220	V	磁器	小皿	7.6	3.8	2.5	染付・透明釉					18C第49半期~幕末	肥前	
221	V	陶器	碗	(10.3)	6.2	4.4	網毛目					18C前半	肥前	
222	V	陶器	碗	(9.6)	6.0	(3.7)	網毛目					18C前半	肥前	白泥網毛目・内面打ち網毛目
223	V	陶器	碗	(9.6)			色絵	松				18C	関西系	
224	V	陶器	碗	(11.6)	8.0	(4.8)	黒緑釉成しかけ 薬灰軸・鉄 軸成し					17C後半	肥前	呉器手碗
225	V	陶器	碗	(9.7)	4.7	3.3						18C後半~19C	萩	
226	V	磁器	皿				白磁					17C末~18C前半	相模川台	型打ち成形・輪花皿
227	V	陶器	碗小杯				色絵					18C	関西系	
228	V	磁器	碗	(11.6)	2.7	3.8	白磁					18C前半	有田	
229	V	磁器	皿			8.3	染付・透明釉	折枝				17C末~18C初	有田	
230	V	磁器	小皿	(14.0)	3.4	(8.0)	染付・透明釉	唐草・蓮				18C前半	肥前	
231	V	磁器	皿				白磁					18C前半	有田	型打ち成形
232	V	磁器	皿				染付・透明釉					18C後半	肥前	型打ち成形・蛇の目門型高台
233	V	磁器	皿				染付・透明釉					18C中葉~末	肥前	輪花皿・型打ち成形
234	V	磁器	皿	(13.6)	3.2	(6.8)	染付・透明釉	六文書形	松竹梅			18C~末	濃佐見	見込み蛇目轆漣
235	V	磁器	皿			8.2	染付・透明釉	松竹梅				1820~1860年代	肥前	蛇の目門型高台・型打ち成形・輪花皿
236	V	磁器	皿	(14.1)	2.9	(7.0)	染付・透明釉	唐草	五弁花	大明半葉		18C後半	肥前系	六角形か八角形・型打ち成形
237	V	磁器	皿	13.4	3.7	7.8	染付・透明釉	唐草	五弁花			18C後半	肥前	被熱受
238	V	磁器	皿	(14.8)	4.5	(8.4)	染付・透明釉	唐草		雨降		18C後半	濃佐見	雲付砂付着

第8表 保田家屋敷跡検出面1出土遺物一覧3

陶器 番号	位置	種類	器種	法 量 (cm)			文 様				年 代	産地	備 考
				口径	器高	底径	輪付・輪	外面	内面	見込み			
239	V	磁器	皿	(14.8)	4.4	(8.0)	染付・透明釉	唐草			18C後半	浪佐見系	
240	V	磁器	皿	(17.2)			青磁				1630～1640代	肥前	縮文へら彫
241	V	磁器	皿	(18.7)	3.5	(10.0)	青磁染付	唐草			18C前半	肥前	染付輪飾
242	V	陶器	皿	10.0	3.1	4.6	灰輪				1590～1610年代	肥前	船土目・高台高脚・皮輪手・底面輝起付着
243	V	陶器	皿	13.5	3.6	4.3					1630～1630年代	肥前	見込み砂目・溝線皿・底部下手露筋・変巾・高台砂付着
244	V	陶器	小皿			3.4					1610～20年代	肥前	砂目縁・底部糸切り痕
245	V	陶器	皿	(12.0)	4.8	4.8	色絵		山水		1690～1700年代前後	肥前	底部無縁・京焼風
246	V	陶器	皿			(7.6)					1620～1630年代	小倉藩御用	見込み砂目・たまご手
247	V	磁器	皿小鉢			7.8	青磁				1660～1690年代	浪佐見	縮ノ目凹形高台・見込みへら彫り
248	V	陶器	台付皿	(21.6)			灰輪・糸絵筋 染付・透明釉				17C末～18C初頭	肥前	台の淵露痕
249	V	磁器	鉢			(9.2)					1660～1690年代	肥前	染付輪飾・変成やや不貞
250	V	磁器	鉢	(21.5)	9.5	(9.0)	白磁				17C末～18C初頭	有田御用	整打成形
251	V	陶器	鉢小鉢	(25.0)			釉輪				17C	額津結	貫入
252	V	陶器	鉢			(9.0)	灰輪・鉄泥				1660～90年代	肥前	溝縁
253	V	陶器	漆鉢								18C代	堺	
254	V	陶器	火入少	(11.0)	7.6	7.1	鉄輪				18～19C	関西系	高台短脚露筋・内面に重ね積み痕・貼り付け高台
255	V	陶器	惣弁土器			8.1	灰輪				17C	上野	目縁・見込み部に重ね積み跡
256	V	磁器	香炉	(7.0)			青磁				18C前半	肥前	
257	V	陶器	耳付器	(7.8)			裏灰輪小				17C～18C	有田	埋入れか
258	V	陶器	壺	(53.4)							17C頃	丹波	
259	V	土師器土器	焙烙	(31.0)							18C後半		胎土に金雲母含む
260	V	土師器土器	皿	(11.6)	2.0	(5.0)							手摺ね・薄い白黄色土・内面ナメ外面底部指押さえ後、横はナメナ上
261	V	瓦葺土器	火鉢	(31.0)							16C末か	大分市か	
262	V	瓦	軒丸瓦			幅幅15							時計回り巴紋・珠文7+α
263	V	瓦	軒丸瓦			幅幅18							時計回り巴紋・珠文13・土師質
264	V	瓦	軒丸瓦			幅幅14							反時計回り巴紋・珠文11・土師質
265	V	瓦	軒丸瓦			幅幅20							時計回り巴紋・珠文13
266	V	金属製品	煙管			幅0.9							煙首
267	V	金属製品	煙管			長55.7							吸口
268	V	金属製品	銅銭										268～271まで一体・寛永通寶22枚
269	V	金属製品	銅銭										268～271まで一体・寛永通寶22枚
270	V	金属製品	銅銭										268～271まで一体・寛永通寶22枚
271	V	金属製品	銅銭										268～271まで一体・寛永通寶22枚
272	V	石製品	硯小	長59.7	幅4.1	厚1.1							
273	V	磁器	碗	9.0	6.3	4.7	染付・透明釉	鶴・松		大明寺製	18C第14半期	肥前	コンニャク印刷
274	V	磁器	碗	(9.2)	7.1	5.5	染付・透明釉	菊花			1630～1640年代	有田	筒型輪・染付輪砂付着
275	V	磁器	碗			(5.8)	染付・透明釉				1610～40年代	肥前	筒型輪・染付露筋・一部砂付着
276	V	磁器	皿				染付・透明釉				17C後半～18C初頭	肥前	
277	V	磁器	皿	(13.3)	3.6	7.5	染付・透明釉	唐草	五弁花	大明寺製	18C第2～3期半期	肥前	
278	V	陶器	皿	15.0	4.0	5.3	灰輪				1610～1640年代	肥前	見込み砂目・染付露筋・やや焼成不貞
279	V	陶器	皿	(12.8)	3.0	(4.4)	釉輪				1590～1610年代	肥前	船土目
280	V	陶器	皿	(14.0)	3.6	(5.0)	灰輪				1590～1610年代	肥前	皮輪手
281	V	陶器	皿	(12.8)			釉輪				1620～1630年代	肥前内津山	溝線皿
282	V	陶器	壺小				灰輪				江戸初期	在場か	
283	V	土師器土器	蓋小					菊花			18C後半小		菊花文打ちだし
284	V	土師器土器	皿	10.5	2.3	6.6							糸切後ナデ・内外面ヨコナデ
285	V	土師器土器	皿	(12.7)	2.1	(8.4)							底部糸切・内外面ヨコナデ
286	V	磁器	小鉢			2.3	染付・透明釉				17C前半	景徳鎮	
287	V	磁器	碗			(4.5)	染付・透明釉				17C前半	景徳鎮	染付露筋
288	V	磁器	碗			4.7	染付・透明釉				16C末～17C初頭	津州	染付粉散か
289	V	磁器	碗	(13.4)			染付・透明釉				17C前半	景徳鎮	
290	V	磁器	皿小			(6.8)	染付・透明釉				17C前半	景徳鎮	
291	V	磁器	皿			(6.4)	染付・透明釉		馬		17C前半	景徳鎮	赤筒底
292	V	瓦	軒平瓦	長5幅15	幅幅9	厚幅2.0							唐草
293	V	金属製品	煙管	長58.0	幅幅9	幅幅0.2					17C		吸口

(2) 検出面2の調査

検出面1の調査を終了し、遺構検出面となっていた第Ⅵ層を除去したところ、第Ⅵ層におおわれる状態の礎石を複数検出した。土層観察により、薄く堆積する第Ⅶ層の下位に第Ⅵ層と同じく黄褐色の整地層が存在することを確認していたため、この2枚目の黄褐色整地層を第Ⅷ層と捉え、遺構検出面とした。しかし第Ⅷ層は薄く、第Ⅷ層掘削後に第Ⅸ層が現れるところも多い。第Ⅸ層は調査区の全体に薄く広がる砂質の整地層である。

遺構 (第40図・第9表)

第Ⅷ層の上面で検出した遺構は、建物礎石、土坑、柱穴列である。このほか、調査区東端には幾重にも重なる整地が施された一画があり、何らかの施設のための地業ではないかと考えた。また、第Ⅸ層掘削時に調査区北東と南西で砂礫層を帯状に検出した。

2号建物 (第40図・第41図)

第Ⅵ層掘削地に検出した礫が調査区のほぼ中央で規則的に並び、これを2号建物とした。断面G-G'・H-H'及び直行するI-I'・J-J'が建物の軸である。さらに南東のL-L'上の礫も平行しており、建物の一部である可能性が高い。礎石を据えるための掘方は検出できなかったものもあり、土層断面観察によって確認できたものも非常に浅いものが多い。検出面1の遺構に見られたような根石は持たず、掘方に直接礎石を据えるものである。

1号土坑・2号土坑 (第40図)

第Ⅷ層上面で検出した土坑はS99とS100である。どちらも掘り込みは浅く、遺物も少ない。遺構の性格は不明である。

4号柱穴列 (第40図・第41図)

4号柱穴列として捉えたS105・S103・S111・S109はいずれも直径約50cmの柱穴である。4基とも柱の沈下防止のため底面に扁平な礫を設置する。S111は先後関係が明確ではないもののS104・S110・S108との切りあいがあり、幾度か据え直されていると見ら

れる。直線上に並ぶ柱穴は4基のみで、南東方向には調査区外に続く可能性もあるが、北西側には検出されなかった。

また、4号柱穴列の北西延長線上に小規模な石列が確認された。礫の大きさは10～40cmとやや不揃いだが、北西側に面を揃えており、意図的に据えられたものである。

地業跡 (第40図)

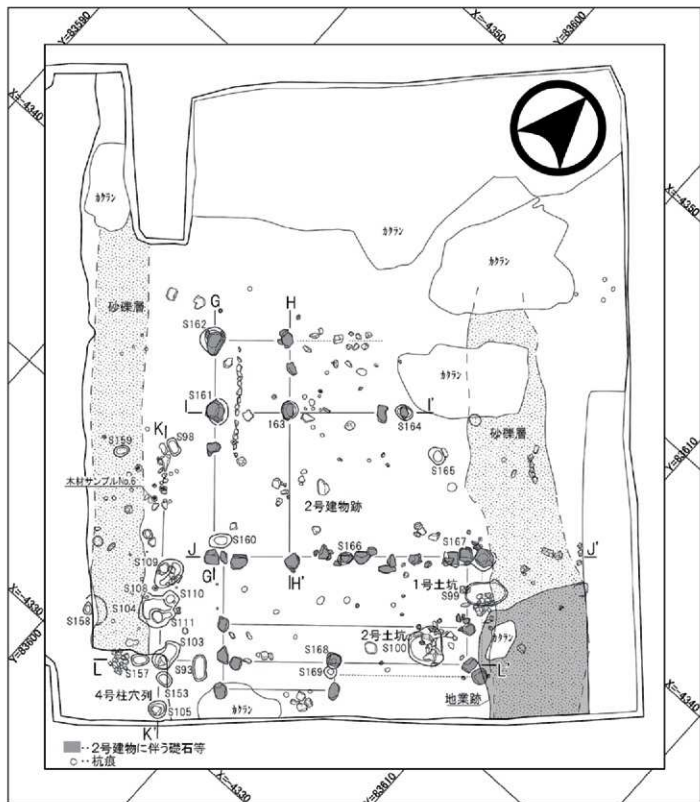
調査区東端の約2.7m四方、検出面から深さ約10cmの範囲において、それぞれ厚さ5mm～2cmの黄褐色土・暗灰色砂質土・黒色炭化物混土が少なくとも5回以上にわたって繰り返し薄く丁寧に敷かれていた。それぞれの層は締まりが強く、全体的に砂質で軟弱な屋敷地の中で、この一画のみは安定していた。地盤が少し沈下する度に整地を行ってかさあげを繰り返した結果ではないかとも考えたが、非常に局所的なものであり、各整地層がほぼ水平に堆積していたことから、一度のタイミングで行われた整地であると判断した。かなりの荷重がかかる建築物を想定した地業ではないかと考えられる。調査期間の都合により、範囲の確認と土層断面写真の撮影にとどめざるを得なかった。

砂礫層 (第40図)

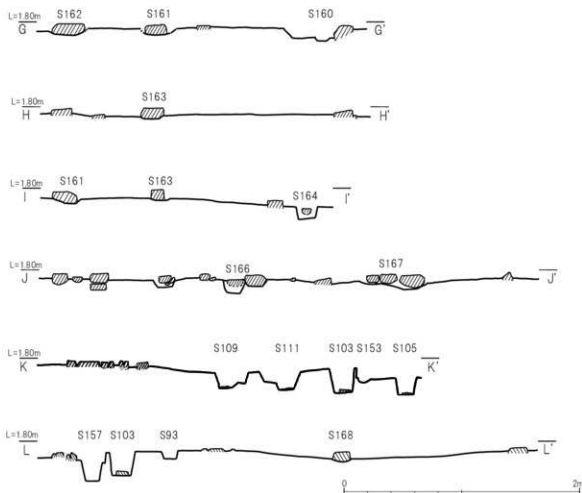
遺構検出面となった第Ⅷ層を除去し、下層確認のため第Ⅸ層を掘削中、調査区の北東と南東に砂礫の密度の高い範囲があることを確認した。第Ⅸ層自体にも少量の砂礫は含まれていたのだが、調査区の北東端と南西端に近い帯状の範囲において、その密度が高くなる。含まれる礫は3cm以下の円礫と微細な角礫が混じっている。

杭痕 (第40図)

検出面1と同じく、戸倉家屋敷跡との敷地境に沿って杭痕が比較的多い。杭痕のなかには杭の先端が残存しているものがあり、うち1点(木材サンプルNo.6)の自然科学分析を行ったところ、マツ属樹木で17世紀末～18世紀前半または19世紀初頭～20世紀前半のものであるとする結果であった。前者の年代



第40図 保田家屋敷跡検出面2遺構配置図 (S=1/100)



第41図 保田家屋敷跡検出面2遺構断面図 (S=1/80)

であれば、周囲の遺構と概ね整合するが、後者の場合は検出面1での杭痕の年代とはほぼ同じであり、これらの杭痕が検出面1に属するものの可能性は残る。

遺物 (第42図～第46図・第10～第11表)

検出面2の関連遺物は294～381、このうち遺構内出土遺物は294～308である。古期の資料も多く、概ね16世紀末から17世紀代2四半期の幅におさまる。

土坑出土遺物 (第42図)

土坑としたS99とS100からの出土遺物は294～299である。294はいわゆる皮鯨手と呼ばれる肥前産陶器皿で、1590～1610年代。295は16世紀から17世紀の備前産大甕の底部片。296は中国・明代の洪武通宝で、背面に浙の字がある。297は16世紀末から17世紀初頭の比較的大型の陶器皿である。口縁部には鉄軸がかかる。299は17世紀頃の肥前産陶器

皿で、やや焼成不良である。

柱穴出土遺物 (第42図)

300～307は4号柱穴列を構成する柱穴からの出土遺物。中でもS103は比較的多量の遺物が出土した。301は砂目積み痕の残る1610～1630年代の肥前産陶器皿。303も同時期の有田産磁器皿、304は1610～1640年代の肥前産磁器皿である。302はミガキ調整する瓦質の鉢。305は中世末の瓦質火鉢で、吉田寛氏が「二連雷文」と呼ぶ文様を刻印する。中世末期の豊後府内周辺に特徴的な在地色の強い遺物で、産地も大分市周辺が推定されている。

2号建物跡出土遺物 (第42図)

2号建物跡の礎石のうち、遺物が出土したのはS167のみである。308は1610～1630年代の肥前産陶器の小杯。309は1590～1610年代の皮鯨手の肥前産陶器皿。

S99



294

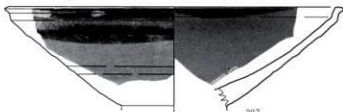


295



296 (2/3)

S100



297



298



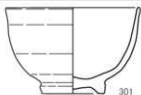
299



S103



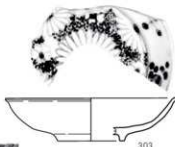
300



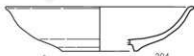
301



302



303



304



305



S104



306 (2/3)



S109

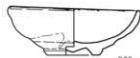


307

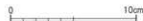
S167



308

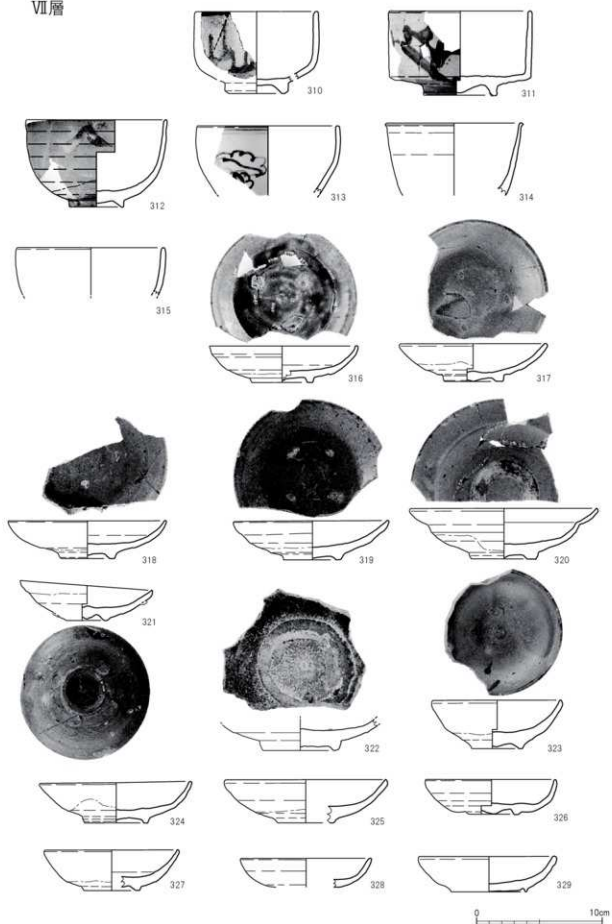


309

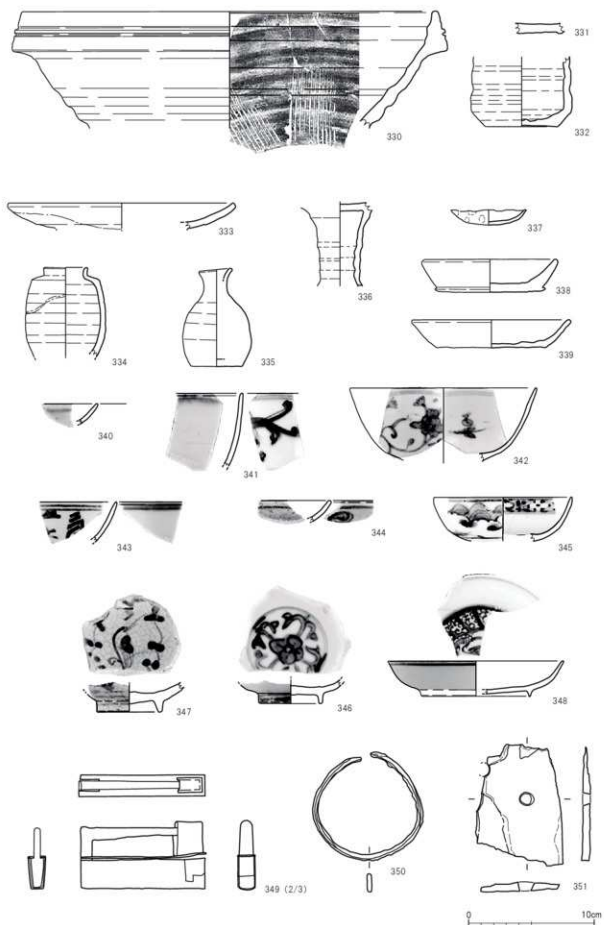


第42図 保田家屋敷跡検出面2遺構内出土遺物1 (S=1/3)

Ⅶ層

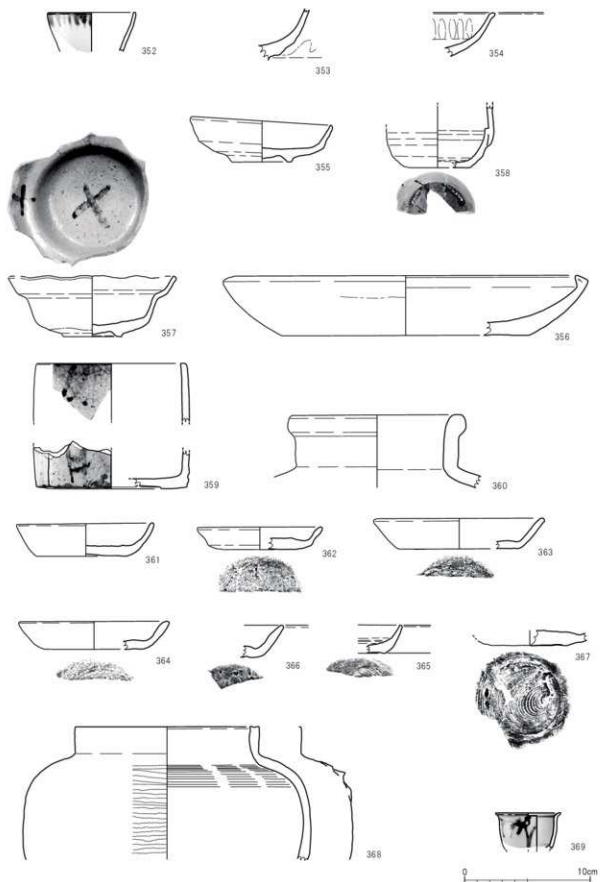


第43図 保田家屋敷跡検出面2 整地層出土遺物 1 (S=1/3)

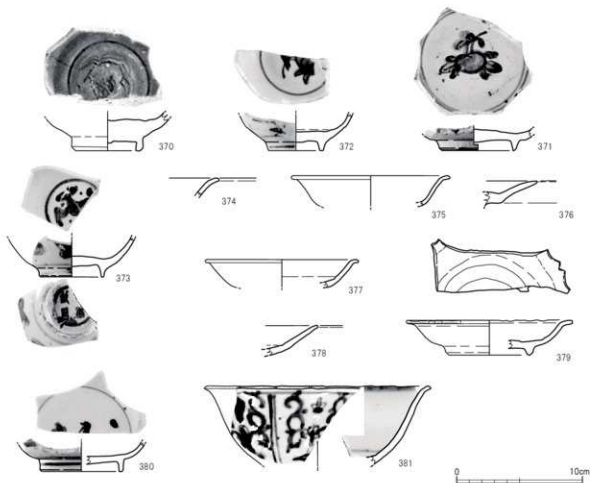


第44図 保田家屋敷跡検出面2 整地層出土遺物2 (S=1/3)

Ⅸ層



第45図 保田家屋敷跡検出面2 整地層出土遺物3 (S=1/3)



第46図 保田家屋敷跡検出面2 整地層出土遺物4 (S=1/3)

第Ⅷ層出土遺物 (第43図・第44図)

310～351は第Ⅶ層の出土遺物である。310は軟質の施釉陶器で、外面には白化粧土と灰釉の上に緑釉を流し掛け、内面には黒釉を施す。京都・楽焼のうち、一般的に黒楽と呼ばれる茶器で、1600～1630年代の製品である。311は1590～1630年代の筒形碗。兜巾高台で刳殻が付着する。316・322は17世紀前半の福岡産の陶器皿で貝目跡が残る。320は蛇の目軸剥ぎをする陶器皿で、17世紀末から18世紀前半の肥前内野山窯の製品。これらを除く317～328は1590～1610年代前後の肥前産陶器皿。329は16世紀末の瀬戸美濃産陶器皿。331も瀬戸美濃産の皿の可能性が有る。332は17世紀の京都産とみられる軟質施釉陶器で、茶道具の香炉として用いられたと考えられる。333は17世紀の肥前か福岡産器台とみられ、一部白化粧土の上に銅緑釉をかける。334は16世紀後半から17世紀初頭の小瓶

で器表面には火漶が現れる。茶入れとして用いられた可能性がある。

なお、第Ⅷ層からの出土遺物はない。

第Ⅸ層出土遺物 (第45図・第46図)

352～381は第Ⅸ層出土遺物である。全体量が少なく、352のように18世紀代の遺物もごくわずかに含まれるが、16世紀末から17世紀前半の遺物が主体である。354は1630～1640年代の肥前産青磁碗。355は1590～1610年代の波越焼の製品であろう。357は1590～1610年代の絵唐津で十字を描く。358は16世紀末から17世紀初頭の備前産水注か。360は中世にさかのぼる備前壺の口縁部。368は瓦質の羽釜であろうか。369～381は輸入陶磁器である。370・374は14世紀から15世紀にさかのぼる龍泉窯産の青磁碗と皿。このほかは16世紀末から17世紀初頭の景德鎮窯産や漳州窯産で、371は焼成不良、376は被熱を受ける。378は16世紀の朝鮮産磁器皿である。

第9表 保田家屋敷跡検出面2 遺構一覽

遺構番号	種別	埋土注記	備考
S93	柱穴	暗褐色土。しまり強い。粘性弱い。	
S98	ピット	暗褐色土。しまりやや強い。粘性弱い。焼土・黄褐色ブロック・炭含む。	
S99	柱穴	暗褐色土。しまり強い。粘性やや弱い。焼土やや多く含む。	1号土坑
S100	土坑	暗褐色土。しまりやや弱い。粘性強い。焼土・黄褐色少量含む。貝殻片多く含む。	2号土坑
S103	柱穴	i: 明茶褐色土。炭・小礫・ブロック土含む。 ii: 暗茶褐色土。炭・小礫・ブロック土含む。 iii: 暗茶灰色シルト土。炭・小礫含む。	4号柱穴列
S104	土坑	i: 暗茶褐色土。炭・小礫・ブロック土含む。 ii: 灰茶色シルト土。炭含む。	
S105	柱穴	茶褐色土。粘性弱い。小ブロック土・炭含む。	4号柱穴列
S108	ピット	淡茶色土。炭・黄褐色ブロック含む。	
S109	柱穴	灰茶色シルト土。炭・黄褐色ブロック含む。	4号柱穴列
S110	ピット	暗茶灰色土。炭・黄褐色ブロック含む。	
S111	柱穴	暗灰色シルト土。炭・黄褐色ブロック含む。	4号柱穴列
S157	ピット		整理報告用番号
S158	ピット		整理報告用番号
S159	ピット		整理報告用番号
S160	土坑		整理報告用番号
S161	柱穴	灰褐色土。しまり強い。粘性やや弱い。小礫含む。	2号建物跡 整理報告用番号
S162	柱穴	灰褐色土。しまり強い。粘性やや弱い。	2号建物跡 整理報告用番号
S163	柱穴	暗灰色土。しまり強い。粘性弱い。	2号建物跡 整理報告用番号
S164	柱穴		2号建物跡 整理報告用番号
S165	ピット		整理報告用番号
S166	ピット	灰褐色土。しまりやや弱い。粘性弱い。黄褐色ブロック・炭少量含む。	整理報告用番号
S167	柱穴	暗灰色土。しまり弱い。粘性弱い。炭含む。	2号建物跡 整理報告用番号
S168	ピット		整理報告用番号
S169	ピット		整理報告用番号

第10表 保田家屋敷跡検出面2 出土遺物一覽1

発掘 番号	位置	種類	器種	法 量 (cm)			文 様				年 代	産地	備 考
				口徑	器高	底径	輪付・輪	外面	内面	見込み			
294	S99	陶器	皿	11.2	2.9	3.3	灰輪				1590～1610年代	肥前	皮輪手・高台跡・見込み胎土目
295	S99	陶器	大甕								16C～17C	備前	
296	S99	金属製品	銭貨	1824							1368年	明(中国 浙江省杭州)	洪武通寶背上「壽」
297	S100	陶器	皿	(27.0)			鉄輪				1590～1610年代	肥前	
298	S100	土師器土器	皿	(11.0)	2.2	2.7							底部赤釉・内外面ヨコナデ・焼付着
299	S100	陶器	皿	(12.6)	3.8	4.6	灰輪				17C前後	肥前か	焼成不良
300	S103	陶器	碗	(12.4)			鉄輪				1590～1610年代	肥前	火目輪
301	S103	陶器	碗	10.4	6.7	4.8					1610～30年代	肥前	砂目積
302	S103	瓦葺	鉢										みがき肌
303	S103	磁器	皿	(13.6)	3.4	5.4	染付・透明輪	菊花			1610～30年代	有田	染付露胎・砂付着
304	S103	磁器	皿	(15.0)	3.6	(5.9)	染付・透明輪	團扇	菊花		1610～40年代	肥前	染付砂付着・染付輪跡
305	S103	瓦葺	火鉢								1580年頃	在地系	
306	S104	金属製品	樽首										樽首・火眼を欠く
307	S109	陶器	皿								1610～40年代	肥前	三鳥手
309	S167	陶器	皿	10.2	3.5	4.1	灰輪				1590～1610年代	肥前	高台付露胎・皮輪手
308	S167	陶器	小杯	(7.9)	4.1	(3.6)	灰輪				1590～1630年代	肥前	
310	Ⅴ	陶器	碗	(9.8)	(6.5)	5.2	灰輪・鉄輪(土 止・鉄輪型)				1600～1630代	京都(粟 赤)	外面灰輪。縁輪成し掛け。白化粧土・内 面黒釉(黒業)で内外面掛け分け
311	Ⅴ	陶器	碗	(11.4)	6.7	5.8	灰輪・鉄輪				1590～1630代	肥前か	
312	Ⅴ	陶器	碗	(11.2)	6.9	4.2	灰輪・鉄輪				1590～1610年代	肥前	
313	Ⅴ	磁器	碗	(11.2)			染付・透明輪				1610～40年代	肥前	
314	Ⅴ	陶器	碗	(11.0)							17C前半	肥前	

第11表 保田家屋敷跡検出面2出土遺物一覧2

陶器 番号	位置	種類	器種	法 量(cm)			文 様				年 代	産 地	備 考
				口径	器高	底径	輪付・輪	外面	内面	見込み			
315	Ⅴ	陶器	碗	(60)							17C前半	福岡か	
316	Ⅴ	陶器	皿	11.8	2.9	4.8					17C初頭	福岡	貝目肌・貫入・高台露胎・変巾
317	Ⅴ	陶器	皿	(11.7)	3.0	4.8	灰輪				1590～1610年代	肥前	見込み胎土目肌・変巾
318	Ⅴ	陶器	皿	(12.6)	3.0	4.4	施輪				1590～1610年代	肥前	見込み胎土目肌
319	Ⅴ	陶器	皿	(12.4)	3.1	4.6	灰輪				1590～1610年代	肥前	見込み・高台胎土目肌
320	Ⅴ	陶器	皿	(14.8)	4.0	(4.9)					17C末～18C前半	肥前中福	蛇の目輪割
321	Ⅴ	陶器	皿	10.4	3.2	3.1	灰輪				1590～1610年代	肥前か	高台付近露胎・胎土目肌・変巾
322	Ⅴ	陶器	皿			6.0	灰輪				17C前半	福岡	砂目肌
323	Ⅴ	陶器	皿	(10.3)	3.8	4.0	灰輪				1590～1610年代	肥前	見込み胎土目肌・皮輪手
324	Ⅴ	陶器	皿	12.0	3.3	5.0	灰輪				1590～1610年代	肥前	高台付近露胎・変巾若干有り
325	Ⅴ	陶器	皿	(12.8)	3.4	(4.4)	灰輪				1590～1610年代	肥前	高台付近露胎
326	Ⅴ	陶器	皿	10.4	2.8	3.8	灰輪				16C末～17C初頭	肥前か	見込みと高台砂目肌・高台露胎・変巾
327	Ⅴ	陶器	皿	(10.7)	3.2	(4.4)	灰輪				1590～1610年代	肥前	高台露胎
328	Ⅴ	陶器	皿	(10.4)			灰輪				16C末～17C初頭	肥前か	貫入あり
329	Ⅴ	陶器	皿	10.9	2.8	5.8	施輪				16C後半	瀬戸美濃	雲付輪割
330	Ⅴ	陶器	掛鉢	(32.6)			長石輪				17C前半	備前	摺り目10～11条
331	Ⅴ	陶器	皿か				長石輪				16C末～17C初頭	瀬戸美濃	びん積み肌
332	Ⅴ	陶器	香炉か			5.6	長大丸輪酒流				17C	京都か	軟質施輪陶器・内面無輪
333	Ⅴ	陶器	器台か	(17.6)			黒緑地・透明輪				17C	肥前中福	一部黒緑地の下に白化粧
334	Ⅴ	陶器	茶人丸	(3.6)							16C後半～17C初頭	肥前	火押
335	Ⅴ	陶器	小瓶	2.5	7.8	4.0					16C後半～17C初頭	備前	
336	Ⅴ	陶器	台付瓶				胎土目肌				17C前半	福岡	貫入・内面は垂灰輪
337	Ⅴ	土師器上群	皿	(6.0)	1.2								手押ぬ
338	Ⅴ	土師器上群	皿	(10.8)	2.6	(8.8)							赤切・内外ヨコナテ
339	Ⅴ	土師器上群	皿	(12.6)	2.2	(8.6)							底部赤切・内外面ヨコナテ・内面黒色に 変色
340	Ⅴ	磁器	碗か				染付・透明輪				16C末～17C前半	景徳鎮	
341	Ⅴ	磁器	碗				染付・透明輪				16C末～17C初頭	景徳鎮	
342	Ⅴ	磁器	碗	(14.2)			染付・透明輪				16C末～17C前半	漳州	
343	Ⅴ	磁器	碗				染付・透明輪				16C末～17C初頭	漳州	
344	Ⅴ	磁器	皿				染付・透明輪				16C末～17C初頭	漳州系	
345	Ⅴ	磁器	碗	(11.0)			染付・透明輪				16C末～17C初頭	漳州	
346	Ⅴ	磁器	碗か			5.2	染付・透明輪				16C末～17C前半	漳州	貫入
347	Ⅴ	磁器	碗			5.0	染付・透明輪				16C末～17C前半	漳州	唐草
348	Ⅴ	磁器	皿	(14.0)	2.8	(8.6)	染付・透明輪	團扇	雲・獅子		16C第4四半期～17C初頭	景徳鎮	
349	Ⅴ	金属製品	錠前	氏5.49	幅1.1	厚0.6							
350	Ⅴ	金属製品	不明	外径8.7	内径7.8	厚0.4							
351	Ⅴ	石製品	空										瓶輪か 穴有り
352	Ⅴ	磁器	膳口	(7.0)			染付・透明輪	雨降			18C前半	肥前	
353	Ⅴ	陶器	碗				灰輪				16C末～17C初頭	肥前中福	
354	Ⅴ	磁器	皿				青磁				1630～1640代	肥前	へう彫り・羅文
355	Ⅴ	陶器	皿	11.3	3.6	4.8					1590～1610代	在地方 (流紋少)	雲付輪割・高台内程設
356	Ⅴ	陶器	皿	(29.0)	4.7	(19.6)					16C後半～17C初頭	備前	
357	Ⅴ	陶器	皿				鉄絵				1590～1610代	肥前	梅花風・胎土目・高台に目肌
358	Ⅴ	陶器	水注			(5.5)					16C末～17C初頭	備前	底部へう書き
359	Ⅴ	陶器	小鉢	(11.8)		(12.0)	長石輪・鉄絵				16C末～17C初頭	志野	
360	Ⅴ	陶器	空	(13.4)							中世	備前	
361	Ⅴ	土師器上群	皿	10.9	2.6	7.3							赤切後ナテ・内外面ヨコナテ
362	Ⅴ	土師器上群	皿	10.0	1.8	(6.0)							底部赤切・内外面ヨコナテ
363	Ⅴ	土師器上群	皿	(13.6)	2.4	(9.5)							底部赤切・内外面ヨコナテ
364	Ⅴ	土師器上群	皿	(12.0)	2.2	(7.8)							底部赤切・内外面ヨコナテ
365	Ⅴ	土師器上群	皿										底部赤切・内外面ヨコナテ
366	Ⅴ	土師器上群	皿			2.6							底部赤切・内外面ヨコナテ
367	Ⅴ	土師器上群	皿か			(6.7)							底部赤切・内面ヨコナテ
368	Ⅴ	丸瓦	羽釜か	(14.5)									在地方 外面みき肌
369	Ⅴ	磁器	小坪	(5.2)			染付・透明輪				17C前半	景徳鎮	
370	Ⅴ	磁器	碗			(5.0)	青磁				14C末～15C中葉	泉屋系	
371	Ⅴ	磁器	碗			5.6	染付・透明輪				16C末～17C初頭	肥前	焼成不良
372	Ⅴ	磁器	碗			(4.3)	染付・透明輪				16C末～17C初頭	漳州	
373	Ⅴ	磁器	碗			(5.0)	染付・透明輪				16C後半	景徳鎮	
374	Ⅴ	磁器	皿				青磁				14C後半～15C中葉	泉屋系	
375	Ⅴ	磁器	皿	(12.6)			白磁				16C	景徳鎮	
376	Ⅴ	磁器	皿				青磁				17C前半	景徳鎮か	鉄熱
377	Ⅴ	磁器	皿	(12.2)			白磁				16C末～17C初頭	漳州	
378	Ⅴ	磁器	皿				白磁				16C	朝鮮か	
379	Ⅴ	磁器	皿	(13.0)	2.7	(6.4)	白磁				16C末～17C初頭	福建系	蛇の目輪割等・雲付露胎
380	Ⅴ	磁器	小鉢			(6.4)	染付・透明輪				1590～1630年代	景徳鎮	天香手
381	Ⅴ	磁器	鉢				染付・透明輪				17C前半	漳州	梅花

(3) 検出面3の調査

検出面2の調査後に第IX層を掘り下げると、第X層の暗灰色砂質土が調査区中央から南東にかけて比較的安定して堆積していることが判明したため、第X層上面で精査を行い、土坑や柱穴を検出した。しかし実際には第X層上面での遺構の輪郭は非常に不明瞭なものが多かったため、少しずつ整地層を掘り下げながら数回の遺構検出を行った。また、土層観察によって第X層の下位に焼土・炭化物を多量に含む層を確認したため、これを第XI層とした。第X層調査後に第XI層の面的な広がりを観察すると、調査区の中央から東半にかけて、途切れながらも広がっていることが明らかとなった。第XI層の下位は、砂層が全面に堆積しており、遺物や礫の混入もないことから地山層であると判断した。第XI層とした地山の砂層では、地表から1.5m前後下のレベルで地下水が湧き出してくる。

遺構 (第47図・第12表)

検出面3の遺構は、柱穴・土坑・溝状遺構である。礎石は見られず、検出面1と検出面2で多くみられた杭跡も検出されなかった。検出した遺構は調査区の中央から東にかけて分布し、西半は空白地となる。

5号柱穴列 (第47図・第48図)

検出面3で検出した柱穴はいずれも掘方のみで、上層で検出した柱穴よりもやや大型である。柱を固定するための礫は見られない。これらの柱穴のうち、埋土に焼土を多く含む一群があり、配置に規則性があることから5号柱穴列とした。5号柱穴列を構成する遺構はS113・S116・S117・S119・S120・S123・S125である。クランク状に直角に2度曲がる線上に並び、南東は調査区外に続いていると思われる。北西方向には遺構を検出することができなかったが、大きな攪乱によって整地層が失われているため、こちらの方向にも延びていた可能性は否定できない。その配置から、建物跡ではなく塀などの施設であった

と考えられる。また、これら焼土を含む柱穴のうちS119において、木柱の最下部が出土した。木柱は直径30cmほどで先端は尖らせず平らに切断されており、S116の底面に据えられていた。この木柱について年代測定及び樹種同定を行ったところ、16世紀に伐採されたマツ属の可能性が高いことが判明した。

6号柱穴列・7号柱穴列 (第47図・第48図)

5号柱穴列を除くと、検出面3の柱穴にはあまり規則性は見られない。6号柱穴列としたS128・S126・S127と7号柱穴列としたS130・S132・S107・S112が直線上に並び、柱間はやや不規則で、上層構造の推測は難しい。

なお、柱穴を埋土に焼土を含むか否かで分類した場合、焼土を含むS125が焼土を含まないS124に切られている。このことから、先述の5号柱穴列は焼土を含まない柱穴群よりも古期の遺構である可能性が高い。

3号土坑・4号土坑 (第47図・第48図)

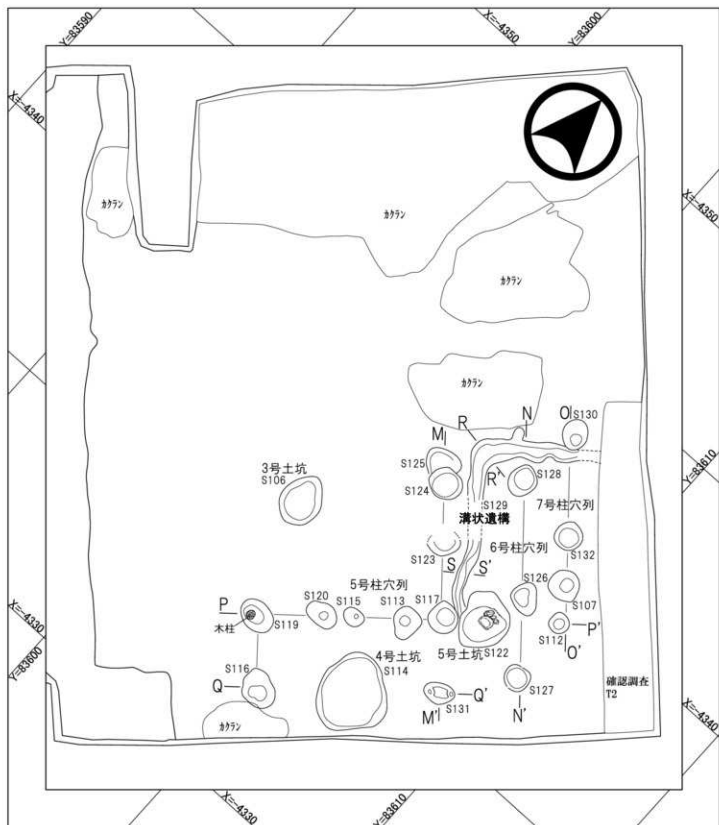
3号土坑としたS106と4号土坑としたS114は、どちらも浅く掘られた略円形の土坑である。陶磁器は比較的多く出土したものの、多量の焼土や礫・瓦などは確認されなかったため廃棄土坑とは考えられず、具体的な性格は明らかにできなかった。

5号土坑 (第47図・第48図)

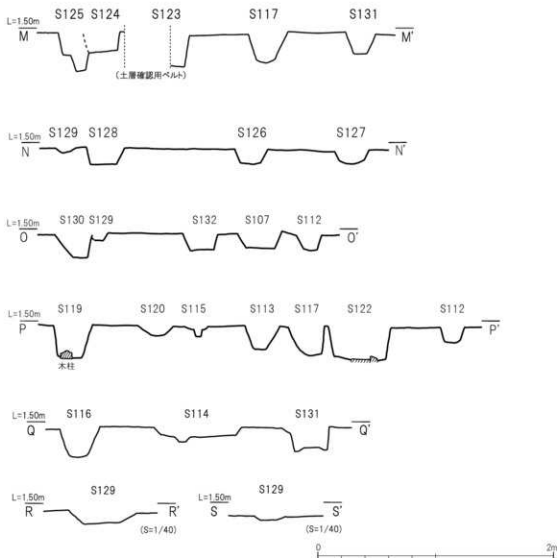
S122はかなり深くまで掘られた土坑である。底面中央に40cm以上ある大きな礫を据え、この礫を囲むように10cmほどの礫を4個検出した。本来は中心の礫の周囲をぐるりと取り囲むように設置されていたと思われる。土坑の最下部は地下水面よりも下位に達しているため、礫は常に水に浸かっている状態となる。発掘調査時も、頻繁に水を汲みあげなければならなかった。こうした検出状況から井戸跡の可能性を考えて調査したが、石組や木枠の痕跡はない。

溝状遺構 (第47図・第48図)

S129はL字型に曲がる溝状遺構である。埋土には焼土が多量に含まれており、同様に



第47図 保田家屋敷跡検出面3遺構配置図 (S=1/100)



第48図 保田家屋敷跡検出面3遺構断面図 (S=1/80)

埋土に焼土を含む5号柱穴列と時的または機能的に関連したものであることも考えられる。浅い溝であり、明瞭に確認できた範囲は狭く、北東方向にはわずかに痕跡を追えるものの、南東方向には検出できなかった。

遺物 (第49図～第53図・第13表～第14表)

検出面3での出土遺物は382～443である。このうち遺構内出土遺物は382～403で、16世紀末から17世紀前半までの資料が主体となる。

柱穴出土遺物 (第49図)

柱穴は、先述のとおり埋土に焼土を含む5号柱穴列の一群と、焼土を含まない一群に分類することができた。S113は焼土を含む柱穴で、出土した382は瀬戸美濃産天目碗で16

世紀代の可能性が高い。383は16世紀末から17世紀初頭の漳州窯系磁器皿で見込みを蛇の目軸剥ぎする。酸化気味のため全体がやや赤味があった色調である。S123も焼土を含む柱穴で、384は16世紀の景德鎮窯産白磁皿。断面に漆継の痕跡がある。

S107・S124・S130は埋土に焼土を含まない柱穴である。385は肥前産陶器皿で1610～1630年代の溝緑皿。386は1640～1650年代の肥前産白磁碗、387は1630～1640年代の肥前産染付皿である。389は16世紀から17世紀初頭の備前産陶器甕。

出土遺物数が少ないために単純な比較は難しいが、焼土を含む柱穴の出土遺物は概ね16世紀末から17世紀初頭、焼土を含まない柱穴の出

土遺物は17世紀前半頃と時期差が認められ、先に述べた両者の切り合い関係と整合する。

土坑出土遺物（第49図・第50図）

3号土坑としたS106の出土遺物は390～395である。390は鉄軸をかける17世紀前半の肥前産陶器碗。391も肥前産陶器碗で1590～1610年代。392は1590～1610年代の肥前産陶器皿で皮鯨手。393と394は輸入磁器で、393は16世紀末から17世紀初頭の漳州窯産磁器碗。高台に砂が付着する。394も漳州窯系の白磁皿で、16世紀末から17世紀前半。

4号土坑としたS114は比較的大型の土坑で、遺物も多い。396は肥前産陶器碗で1610～1630年代の製品。397は1590～1610年代の陶器輪花皿。398は焼壺である。内面はナデ調整で布目は見られない。また内面全体がスズで黒く変色する。401～403は輸入磁器。401は17世紀前半の景徳鎮窯産小杯。402は16世紀末から17世紀初頭の漳州窯産磁器碗で、高台に砂が付着する。403は景徳鎮窯産磁器碗の底部で、畳付を釉剥ぎする。16世紀後半の製品である。

第X層出土遺物（第51図～第52図）

遺構検出面となった第X層の出土遺物は404～434である。遺物の時期は概ね16世紀後半から17世紀前半におさまる。

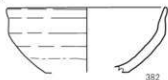
404は1590～1610年代の肥前産陶器小杯。405は17世紀第2四半期から17世紀後半の肥前産陶器碗で緑釉をかけ、畳付を釉剥ぎする。407は1630～1640年代の肥前産磁器碗。408は17世紀初頭の陶器皿で、波越焼の製品であろう。409～413はいずれも1590～1610年代の肥前産陶器皿。409は焼成不良のため釉が溶けきれておらず、部分的に暗緑色のガラス質に変質している状態である。見込みには胎土目の痕がある。414は瀬戸美濃産の陶器皿で16世紀末から17世紀初頭。びん積みの痕が残る。415は1610～1630年代の肥前産陶器皿で、見込みに砂目跡があり畳付を釉剥ぎする。416は17世紀前半の福岡産陶器大皿の

底部で、体部外面は露胎となるもの。417は肥前産の大皿。1590～1610年代の製品で、内面には胎土目痕があり、鉄線で文様を描く。418は1590～1630年代の肥前産片口または鉢である。体部下半は鮫肌となる。419は片口の注口付近の破片であろう。17世紀の福岡産の可能性ある。421・422は大型の陶器皿で、どちらもたたき成形。421は17世紀第1四半世紀の福岡産、422は16世紀末から17世紀初頭の肥前か福岡産のものである。428～432は輸入磁器で、428～430は景徳鎮窯、431・432は漳州窯の製品である。431は高台に砂目痕がある。433は輪の羽口である。被熱により先端部は表面の一部がガラス質に変質している。

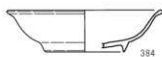
第XI層出土遺物（第53図）

第XI層は地山層の上層に堆積していた、焼土・炭化物を多く含む層である。層厚が薄く範囲も限られるため、出土遺物は多くないが、16世紀末から17世紀初頭のものである。435・436は1590～1610年代の肥前産陶器皿。437は1590～1610年代肥前産の磁器皿である。見込みは蛇の目釉剥ぎし、畳付も釉を剥ぎ、砂目痕が残る。また、破片の断面には漆で継いだ痕跡が確認できる。438は16世紀頃の備前産陶器壺の肩部である。櫛状の道具による波状文が廻ると思われる。439は16世紀後半から17世紀初頭の景徳鎮窯産の磁器碗で、断面に漆継の痕跡がある。440は16世紀後半頃の景徳鎮窯産磁器皿。少破片のため判断しづらいが、口縁部は輪花になると思われる。釉が白濁しており、焼成が十分ではない可能性がある。441は漳州窯産の碗か皿の底部片。16世紀後半から17世紀初頭の製品で、見込みを蛇の目釉剥ぎする。442は16世紀末から17世紀初頭の景徳鎮窯産磁器皿。440と同じく白濁した釉調で、焼成不良により溶けきれなかったようである。443は16世紀末から17世紀初頭の白磁皿で、福建省で焼かれたものであろう。蛇の目釉剥ぎし、重ね積みの跡が残る。

S113



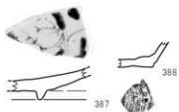
S123



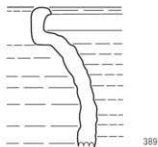
S107



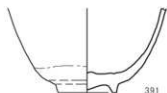
S124



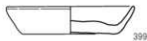
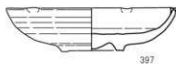
S130



S106

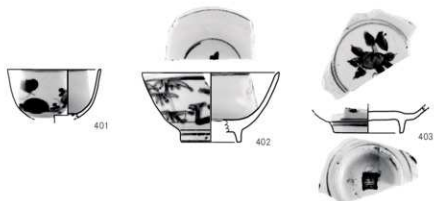


S114



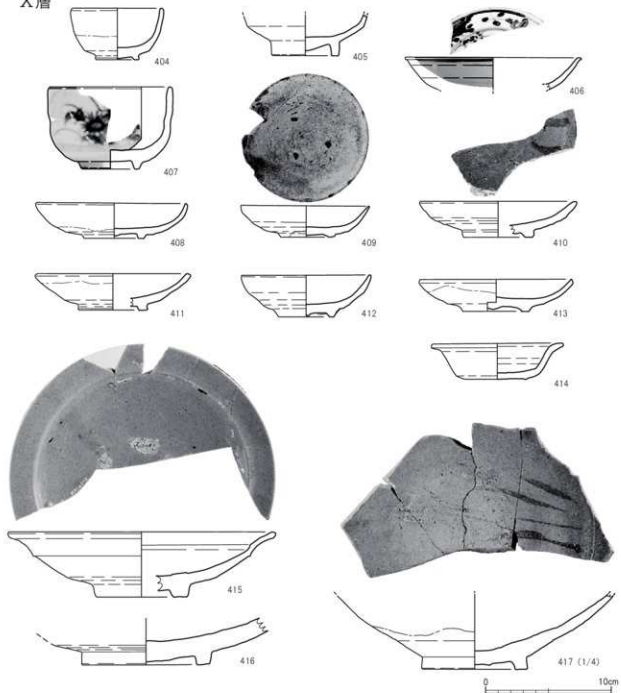
0 10cm

第49図 保田家屋敷跡検出面3遺構内出土遺物1 (S=1/3)

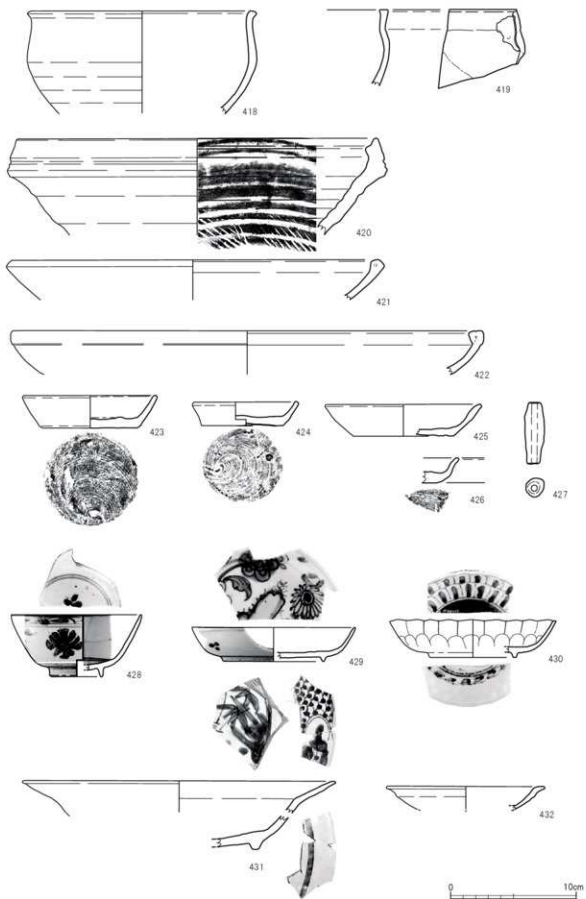


第50図 保田家屋敷跡検出面3遺構内出土遺物2 (S=1/3)

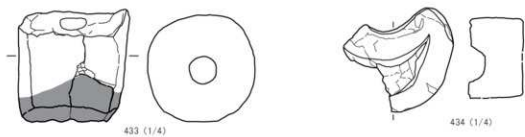
X層



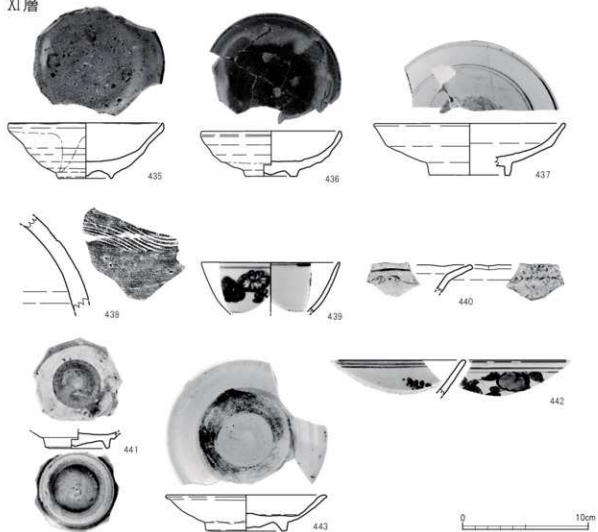
第51図 保田家屋敷跡検出面3整地層出土遺物1 (S=1/3)



第52図 保田家屋敷跡検出面3 整地層出土遺物2 (S=1/3)



XI層



第53図 保田家屋敷跡検出面3 整地層出土遺物3 (S=1/3)

第12表 保田家屋敷跡検出面3遺構一覧

遺構番号	種別	埋土注記	備考
S106	土坑	茶褐色土。小ブロック土・炭含む。 i : 暗茶色土。しまり弱い。粘性強い。礫含む。	3号土坑
S107	柱穴	ii : 堀方。暗茶褐色土。しまりやや強い。粘性弱い。黄色叩き土含む。 iii : 暗青灰色砂質土。しまり強い。粘性弱い。	7号柱穴列
S112	柱穴	淡灰褐色土。しまり、粘性弱い。	7号柱穴列
S113	柱穴	i 暗褐色土。しまり弱い。粘性やや強い。焼土・炭やや多く含む。 ii 暗褐色土。しまり弱い。粘性強い。焼土・炭含む。i が水を含んだものか。	5号柱穴列
S114	土坑	暗茶灰色土。しまり弱い。粘性強い。やや砂質。	4号土坑
S115	柱穴	暗灰色砂質土。	
S116	柱穴	暗褐色土。しまり弱い。粘性強い。赤褐色焼土多量に含む。	5号柱穴列
S117	柱穴	i : 暗褐色土。焼土・炭含む。 ii : 黒褐色土。しまり弱い。粘性強い。炭多く含む。	5号柱穴列
S119	柱穴	暗灰褐色土。しまりやや弱い。粘性強い。焼土多量に含む。炭含む。	5号柱穴列
S120	柱穴	暗褐色土。しまり弱い。粘性やや強い。焼土少量含む。	5号柱穴列
S122	土坑	暗灰色土。しまり弱い。粘性やや弱い。	5号土坑
S123	柱穴	茶褐色土。しまりやや強い。粘性弱い。焼土ブロック多く含む。	5号柱穴列
S124	柱穴	明茶色土。しまりやや弱い。粘性やや強い。黄色粒含む。	
S125	柱穴	茶灰色土。しまり弱い。粘性強い。焼土ブロック・礫多く含む。	5号柱穴列
S126	柱穴	i : 黄色土。しまり強い。 ii : 黒褐色土。しまり、粘性弱い。炭含む。	6号柱穴列
S127	柱穴	i : 橙色土。しまり強い。 ii : 灰黒色土。炭多量に含む。 iii : 灰茶色砂質土。しまり弱い砂礫。	6号柱穴列
S128	柱穴	暗褐色土。しまり、粘性弱い。やや砂質。	6号柱穴列
S129	溝	i : 赤褐色焼土。しまり、粘性弱い。 ii : 黒褐色土。しまり弱い。粘性やや強い。炭多量に含む。 iii : 褐色土。しまり、粘性弱い。砂礫含む。	
S130	柱穴	褐灰色土。しまりやや強い。粘性弱い。小礫含む。砂質。	7号柱穴列
S131	柱穴	褐茶色土。しまり弱い。粘性やや弱い。小礫含む。	
S132	柱穴	褐灰色土。しまりやや弱い。粘性弱い。小礫多く含む。砂質。	7号柱穴列
	柱穴	褐灰色土。しまりやや強い。粘性弱い。小礫含む。砂質。	
S131	土坑	褐茶色土。しまり弱い。粘性やや弱い。小礫含む。	
S132	柱穴	褐灰色土。しまりやや弱い。粘性弱い。小礫多く含む。砂質。	
S170	ピット		

第13表 保田家屋敷跡検出面3出土遺物一覧1

陶器番号	位置	種類	器種	法 量 (cm)				文 様				年代	産地	備 考
				口径	器高	底径	給付・輪	外面	内面	見込み	高台内			
282	S113	陶器	碗	(12.8)			鉄輪					16C中	瀬戸美濃	天日輪
283	S113	磁器	皿	10.0	2.9	5.4	染付・透明輪					16C末～17C初頭	津洲系	貫入・蛇の目輪草子・墨付高台内露筋・酸化気味
284	S123	磁器	皿	(12.4)	3.3	(6.2)	白磁					16C	景徳鎮	漆華唐・墨付輪筋
285	S107	陶器	皿	13.5	3.5	4.7	灰輪					1610～20年代	肥前	見込み砂目跡・漆華唐・三日月高台
286	S124	磁器	碗	(13.0)			白磁					1640～50年代	肥前	
287	S124	磁器	皿				染付・透明輪					1630～40年代	肥前	
288	S124	土器土器	皿											底部糸切・内外面ナブ・金雲母少量・赤色粒子含む
289	S130	陶器	壺									16C～17C初頭	肥前	
290	S106	陶器	碗	10.0	6.8	4.8	鉄輪					17C前半	肥前	
291	S106	陶器	碗			4.6	灰輪					1590～1610年代	肥前	兜巾
292	S106	陶器	皿	10.6	3.9	4.3	灰輪					1590～1610年代	肥前	見込み胎土目・兜巾・皮離手
293	S106	磁器	碗	(9.8)	5.2	4.3	染付・透明輪	唐草		花?		16C末～17C初頭	津洲	
294	S106	磁器	皿	(13.4)	3.1	(7.4)	白磁					16C末～17C前半	津洲系	蛇の目輪筋・高台内露筋胎動
295	S106	土器土器	皿		2.3									底部糸切・金雲母赤色粒子若干含む

第14表 保田家屋敷跡検出面3出土遺物一覧2

陶器 番号	位置	種類	器種	法 量(cm)			文 様				年 代	産地	備 考
				口径	器高	底径	輪付・輪	外面	内面	見込み			
296	S114	陶器	碗	(12.0)	(6.4)		鉄輪				1610～30年代	肥前	
297	S114	陶器	皿	13.5	3.4	5.0	紅線・白線				1590～1610年代	肥前	輪花風・兜巾・高台高胎・移付着
298	S114	土師瓦土器	焼塋器	4.9	8.9	5.0							内面ナラ仕上げ・内面黒付着・転用か
299	S114	土師瓦土器	皿	(10.2)	2.2	7.5							底部赤切・内外面ナラ・一部黒付着
400	S114	土師瓦土器	皿	(10.4)	2.5	7.0							底部赤切・内外面ナラ・金雲母赤色粒点含む
401	S114	磁器	小杯	(7.4)			染付・透明釉	赤・黒			17C前半	景徳鎮	
402	S114	磁器	碗	(11.0)	5.5	(4.8)	染付・透明釉	赤・黒	黒線		16C末～17C初頭	漳州	
403	S114	磁器	碗		5.1		染付・透明釉			黒・赤	16C後半	景徳鎮	
404	X	陶器	小杯	(7.0)	4.1	3.3	灰釉				1590～1610年代	肥前	
405	X	陶器	碗			5.2	緑釉				17C第28年頭～後半	肥前	
406	X	磁器	皿	(14.0)			染付・透明釉				1610～30年代	肥前	
407	X	磁器	碗	(9.6)	6.6	(4.8)	染付・透明釉	花			1630～40年代	肥前	
408	X	陶器	皿	11.8	2.7	4.6					17C初頭	肥前	高台高胎・兜巾
409	X	陶器	皿	10.1	2.5	4.3	灰釉				1590～1610年代	肥前	見込み胎土目肌・高台高胎・焼成不良
410	X	陶器	皿	(12.4)	2.8	(5.6)	灰釉・鉄絵				1590～1610年代	肥前	高台高胎
411	X	陶器	皿	(12.4)	2.9	(5.4)	灰釉				1590～1610年代	肥前	
412	X	陶器	皿	(10.4)	3.3	4.3	灰釉				1590～1610年代	肥前	染付輪郭・移付着
413	X	陶器	皿	(12.3)	2.5	5.2	灰釉				1590～1610年代	肥前	高台高胎・三日月高台・兜巾・胎土目横み
414	X	陶器	皿	10.5	2.9	4.8	長石釉				16C末～17C初頭	瀬戸美濃	びん積み灰
415	X	陶器	皿	(21.0)	5.1	(7.1)					1610～1630年代	肥前	砂目積み・染付輪郭
416	X	陶器	大皿			10.0	黒灰釉小				17C前半	福岡	外体部下位高胎
417	X	陶器	大皿			11.2	鉄絵				1590～1610年代	肥前	胎土目肌
418	X	陶器	片口小鉢	(18.0)			灰釉				1590～1630年代	肥前	板肌
419	X	陶器	片口				灰釉				17Cか	福岡小	
420	X	陶器	瑠璃	(28.0)							16C後半～17C初頭	備前	交差摺り目
421	X	陶器	皿	(29.6)			焼き締め				17C第18年頭	福岡	たたく成彩
422	X	陶器	皿	(37.2)			鉄輪灰釉				16C末～17C初頭	肥前小福岡	たたく成彩
423	X	土師瓦土器	皿	(10.4)	2.5	7.3							底部赤切・内外面ヨコナラ
424	X	土師瓦土器	皿	8.0	1.9	6.4							底部赤切・内外面ヨコナラ・金雲母を含む
425	X	土師瓦土器	皿	(12.4)	2.5	(8.0)							底部赤切・内外面ヨコナラ
426	X	土師瓦土器	皿		2.0								底部赤切・内外面ヨコナラ
427	X	土製品	土鉢	長さ4.9	幅1.5	孔径0.5							
428	X	磁器	小瓶	(10.2)	(4.9)	(4.0)	染付・透明釉				16C後半～17C初	景徳鎮	
429	X	磁器	皿	(13.0)	2.7	(8.0)	染付・透明釉				16C末～17C初頭	景徳鎮	
430	X	磁器	皿	(13.2)	3.0	(6.4)	染付・透明釉				17C前半	景徳鎮	
431	X	磁器	皿				染付		黒線		17C前半	漳州	高台に砂目肌
432	X	磁器	皿	(12.6)			白釉				16C末～17C初頭	漳州	
433	X	土師瓦土器	輪郭口		幅11.3	穴内径2.8							焼熱で変色する
434	X	瓦	鬼瓦										
435	X	陶器	皿	(12.4)	4.4	4.0	灰釉				1590～1610年代	肥前	胎土目肌・兜巾・産地手
436	X	陶器	皿	(11.2)	3.6	4.0	灰釉				1590～1610年代	肥前	胎土目肌・兜巾
437	X	磁器	皿	(15.7)	4.1	(6.3)	染付・透明釉				1610～1630年代か	肥前	漆黒さ・蛇の目輪郭・染付輪郭・砂目積み
438	X	陶器	壺								16C頃	備前	
439	X	磁器	碗	(11.0)			染付・透明釉				16C後半～17C初	景徳鎮	漆黒さ
440	X	磁器	碗				染付・透明釉				16C後半頃	景徳鎮	輪花風
441	X	磁器	碗小皿		4.6		染付・透明釉				16C後半～17C初	漳州	蛇の目輪郭さ
442	X	磁器	皿				染付・透明釉				16C末～17C初頭	景徳鎮	輪郭が掛け切れていない
443	X	磁器	皿	12.8	2.9	6.4	白釉				16C末～17C初頭	福建省	蛇の目輪郭さ・貫入・高台高胎

第5節 自然科学分析

放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ

伊藤 茂・安 昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一
Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani・黒沼保子

1 はじめに

佐伯城下町から出土した木材3点について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。1点についてはウィグルマッチング法を用いて分析を行った。

2 試料と方法

試料は、S119から出土した木柱1点と、木杭が2点(No.1、No.3)の計3点である。

ウィグルマッチング測定試料は、S119から出土した木柱である。形状および部位は不明で、最終形成年輪は残存していなかった。残存径は18.0cm×16.5cmで、樹種はマツ属複雑管束亜属であった。樹皮側から1-5年目

(PLD-28546)と、26-30年目(PLD-28547)、46-50年目(PLD-28548)の年輪部分から測定試料を採取した。

単体試料は、木杭2点である。木杭サンプルNo.1(PLD-28549)は、形状および部位不明で、最終形成年輪は残存していなかった。木杭サンプルNo.6(PLD-28550)は、芯持丸木で最終形成年輪が残存していた。樹種は、2点ともマツ属複雑管束亜属であった。

測定試料の情報、調製データは表1、2のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS: NEC製 L5SDH)を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

表1 ウィグルマッチング測定試料および処理

測定番号	遺跡・試料データ	採取データ	前処理
PLD-28546	遺構:S119 種類:生材(マツ属複雑管束亜属)	採取位置: 樹皮側から1-5年目	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1.0N,塩酸:1.2N)
PLD-28547	試料の性状:最終形成年輪以外、部位不明 器種:柱材	採取位置:26-30年目	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1.0N,塩酸:1.2N)
PLD-28548	状態:wet	採取位置:46-50年目	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1.0N,塩酸:1.2N)

表2 単体測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-28549	試料No.木杭サンプルNo.1	種類:生材(マツ属複雑管束亜属) 試料の性状:最終形成年輪以外、部位不明 器種:杭材 状態:dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1.0N,塩酸:1.2N)
PLD-28550	試料No.木杭サンプルNo.6	種類:生材(マツ属複雑管束亜属) 試料の性状:最終形成年輪 器種:杭材 状態:dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1.0N,塩酸:1.2N)

3 結果

表3に同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、ウィグルマッピング結果を、表4に単体試料の暦年較正結果を、図1にウィグルマッピング結果を、図2に単体試料の暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代

誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正、ウィグルマッピング法の詳細は以下のとおりである。

[暦年較正]

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い (^{14}C の半減期5730 \pm 40年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正にはOxCal4.2 (較正曲線データ: IntCal13) を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して

表3 S119出土木柱の放射性炭素年代測定、暦年較正、ウィグルマッピングの結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-28546	-29.29 \pm 0.13	320 \pm 20	320 \pm 20	1521-1591 cal AD (54.9%)	1492-1603 cal AD (75.8%)
				1620-1636 cal AD (13.3%)	1615-1643 cal AD (19.6%)
PLD-28547	-27.55 \pm 0.11	330 \pm 19	330 \pm 20	1513-1528 cal AD (11.9%)	1488-1604 cal AD (76.1%)
				1551-1601 cal AD (41.9%)	1610-1640 cal AD (19.3%)
				1617-1634 cal AD (14.4%)	
PLD-28548	-29.30 \pm 0.14	341 \pm 22	340 \pm 20	1492-1524 cal AD (23.0%)	1472-1636 cal AD (95.4%)
				1559-1602 cal AD (31.2%)	
			最外試料年代	1535-1573 cal AD (46.1%)	1519-1603 cal AD (70.3%)
				1585-1593 cal AD (5.6%)	1610-1644 cal AD (25.1%)
				1616-1629 cal AD (14.8%)	
				1638-1641 cal AD (1.7%)	

表4 単体試料の放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-28549 試料No.木柱No1	-27.77 \pm 0.22	117 \pm 19	115 \pm 20	1691-1707 cal AD (10.4%)	1682-1736 cal AD (27.8%)
				1719-1728 cal AD (5.9%)	1805-1895 cal AD (54.5%)
				1811-1826 cal AD (9.0%)	1904-1935 cal AD (13.1%)
				1833-1885 cal AD (35.8%)	
				1913-1925 cal AD (7.1%)	
PLD-28550 試料No.木柱No6	-28.60 \pm 0.19	97 \pm 19	95 \pm 20	1697-1726 cal AD (25.0%)	1691-1729 cal AD (26.7%)
				1815-1836 cal AD (17.8%)	1810-1922 cal AD (68.7%)
				1877-1894 cal AD (14.5%)	
				1904-1917 cal AD (10.8%)	

算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2 σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

[ウィグルマッチング法]

ウィグルマッチング法とは、複数の試料を測定し、それぞれの試料間の年代差の情報を用いて試料の年代パターンと較正曲線のパターンが最も一致する年代値を算出することによって、高精度で年代値を求める方法である。測定では、得られた年輪数が確認できる木材について、1年毎あるいは数年分をまとめた年輪を数点用意し、それぞれ年代測定を行う。個々の測定値から暦年較正を行い、得られた確率分布を最外試料と当該試料の中心値の差だけずらしてすべてを掛け合わせることで、最外試料の確率分布を算出し、年代範囲を求める。なお、得られた最外試料の年代範囲は、まとめた試料の中心の年代を表している。そのため試料となった木材の最外年輪年代を得るためには、最外試料の中心よりも外側にある年輪数を考慮する必要がある。

4 考察

以下、暦年較正結果のうちウィグルマッチング測定試料については1 σ 暦年代範囲(確率68.2%)、単体試料は2 σ 暦年代範囲(確率95.4%)に着目して、結果を整理する。

S119出土木柱は、樹皮側から1-5年目(PLD-28546)と、26-30年目(PLD-28547)、46-50年目(PLD-28548)の年輪部分を用いてウィグルマッチング法による年代測定を行った結果、1 σ 暦年代範囲(確率68.2%)では1535-1573 cal AD (46.1%)、1585-1593 cal AD (5.6%)、1616-1629 cal AD (14.8%)、1638-1641 cal AD (1.7%)であった。これは16世紀前半～17世紀中頃で、室町時代～江

戸時代前期に相当する。その中でも、特に16世紀の確率が高い。

木杭サンプルNo.1 (PLD-28549) は、2 σ 暦年代範囲(確率95.4%)で1682-1736 cal AD (27.8%)、1805-1895 cal AD (54.5%)、1904-1935 cal AD (13.1%)であった。これは17世紀後半～18世紀前半と19世紀初頭～末葉、20世紀初頭～前半で、江戸時代前期～中期もしくは江戸時代後期～昭和時代に相当する。

木杭サンプルNo.6 (PLD-28550) は、2 σ 暦年代範囲(確率95.4%)で1691-1729 cal AD (26.7%)および1810-1922 cal AD (68.7%)であった。これは17世紀末～18世紀前半と19世紀初頭～20世紀前半で、江戸時代前期～中期もしくは江戸時代後期～大正時代に相当する。

木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、内側であるほど古い年代が得られる(古木効果)。S119出土木柱と木杭サンプルNo.1は、最終形成年輪が残存していなかったため、残存している最外年輪のさらに外側にも年輪が存在していたと考えられる。したがって、試料の木材が実際に伐採されたのは、得られた暦年代範囲より幾分新しい時期であったと推測される。なお、木杭サンプルNo.6は、最終形成年輪が残存しており、得られた最終形成年輪の年代は、木材が伐採された年代を示していると考えられる。

引用・参考文献

Bronk Ramsey, C., van der Plicht, J., and Weninger, B. (2001) 'Wiggle matching' radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 43 (2A), 381-389.

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51 (1), 337-360.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の

基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編
「日本先史時代の¹⁴C年代」: 3-20,日本第四
紀学会.

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55 (4), 1869-1887.

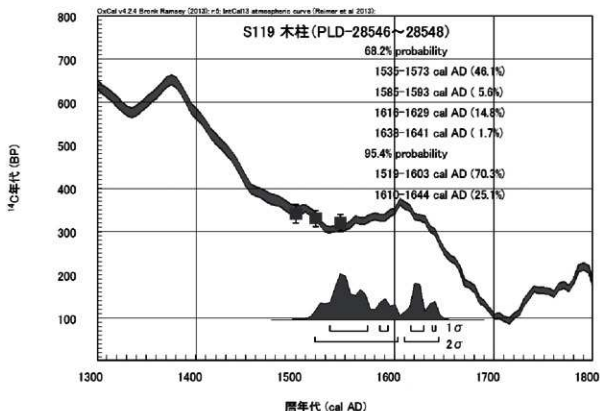


図1 ウィグルマッピング結果

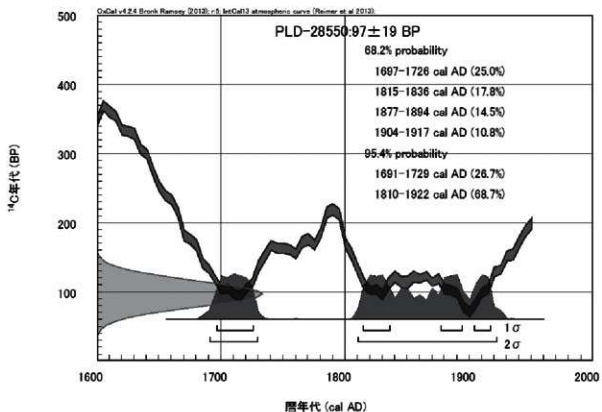
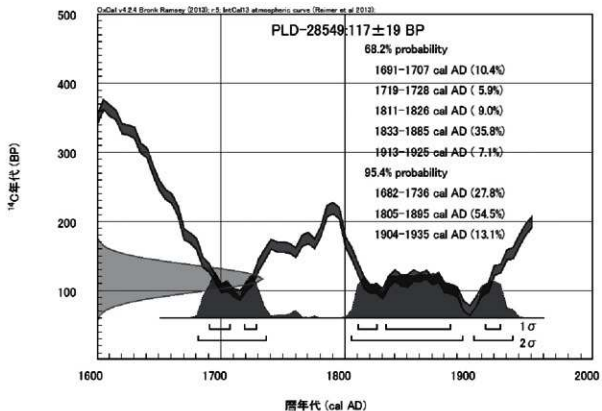
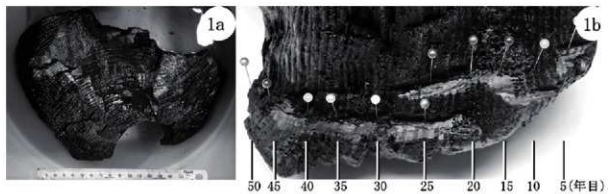


図2 単体試料の暦年校正結果



図版1 ウィグルマッチング年代測定を行った木材(PLD-28546～28548)と年輪計測結果

1a.木材の横断面(残存径18×16cm、マツ属複雑管束亜属)

1b.年輪計測結果(50年輪、最終形成年輪なし)

1 はじめに

佐伯市に所在する佐伯城下町から出土した木材3点の樹種同定を行った。なお、同一試料を用いて放射性炭素年代測定も行われている（放射性炭素年代測定の項参照）。

2 試料と方法

試料は、木杭が2点（No.1、6）と、S119から出土した木柱が1点の、計3点である。調査所見から、時期は近世もしくは幕末と推測されている。

これらの試料から、剃刀を用いて3断面（横断面・接線断面・放射断面）の切片を採取し、ガムクロラールで封入してプレパラートを作製した。これを光学顕微鏡で観察および同定、写真撮影を行った。

3 結果

樹種同定の結果、3点とも針葉樹のマツ属複維管束亜属であった。結果の一覧を表1に示す。

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、光学顕微鏡写真を図版に示す。

- (1) マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diplaxylon* マツ科 図版1 1a-1c (S119木柱)、2a-2c (木杭サンプルNo.1)、3a-3c (木杭サンプルNo.6)

仮道管と垂直および水平樹脂道、放射組織、放射仮道管からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部は広い。大型の樹脂道を薄壁のエピセリウム細胞が囲んでいる。分野壁孔は窓状で、放射仮道

管の水平壁は内側向きに鋸歯状に肥厚する。

マツ属複維管束亜属は暖帯から温帯下部に分布する常緑高木で、アカマツとクロマツがある。材は油気が多く、靱性は大である。

4 考察

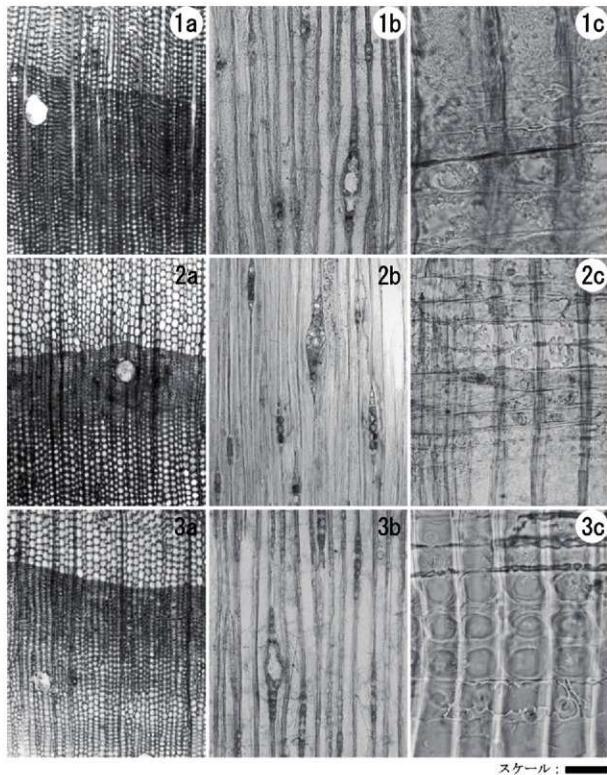
分析を行った木柱と木杭は、すべてマツ属複維管束亜属であった。マツ属複維管束亜属の材は、針葉樹の中では重硬であり、心材は水湿に強い。したがって、建築材や土木材として多く用いられる（平井,1996）。本試料も、このマツ属複維管束亜属の特性を考慮した選択であった可能性がある。

引用文献

平井信二(1996)木の大本科.394p.朝倉書店.

表1 樹種同定結果

No.	樹種	木取り	残存径
S119本柱	マツ属複維管束亜属	不明	18×16.5cm
木杭サンプルNo.1	マツ属複維管束亜属	不明	4.5×3.5cm
木杭サンプルNo.6	マツ属複維管束亜属	芯持丸木	直径7.5cm



図版1 佐伯城下町出土木材の光学顕微鏡写真

1a-1c. マツ属複維管束亜属 (S119木柱)、2a-2c. マツ属複維管束亜属 (木杭サンプルNo.1)、3a-3c. マツ属複維管束亜属 (木杭サンプルNo.6)

a : 横断面(スケール=250 μ m)、b : 接線断面(スケール=100 μ m)、c : 放射断面(スケール=25 μ m)

1 はじめに

大分県佐伯市に所在する佐伯城下町において、用途不明の甕が検出された。この甕がトイレ遺構である可能性を検討する目的で寄生虫卵分析を行った。

2 試料と分析方法

分析試料は、甕内部から採取された土壌1点である。この試料について、以下の手順にしたがって寄生虫卵分析を試みた。

計量した試料に、10%の水酸化カリウム溶液を加え10分間湯煎する。水洗後、46%のフッ化水素酸溶液を加え1時間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理（無水酢酸9：1濃硫酸の割合の混酸を加え20分間湯煎）を行う。水洗後、この残渣に適容量のグリセリンを加えて計量した。この残渣からプレバートを作製し、プレバート全面に渡り検鏡した。なお、試料1g中の寄生虫卵含有数は、次式で求める。

$$X = BD/AC$$

X：試料1g中の寄生虫卵含有数、A：分析に用いた試料の重量（g）、B：濃縮試料＋グリセリンの重量（g）、C：濃縮試料＋グリセリンのうち、封入に用いた重量（g）、D：プレバート中の寄生虫卵数

3 分析結果

計量し、検鏡した結果を表1に、プレバートの顕微鏡写真を図版に示す。プレバート全面を検鏡した結果、微粒炭が検出されたものの、寄生虫卵は1つも検出されなかった。

表1 寄生虫卵分析に用いた試料の計量値

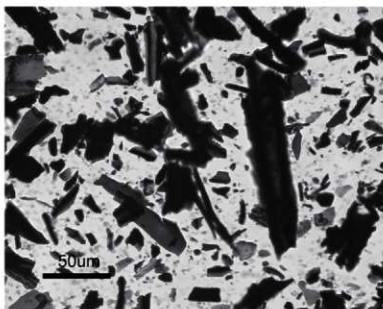
分析に用いた試料(g)	3.8565
残渣＋グリセリン(g)	1.5880
封入に用いた量(g)	0.0618
寄生虫卵個数	0

4 考察

検鏡の結果、今回の分析試料からは寄生虫卵が検出されなかった。したがって、今回の甕がトイレ遺構であった可能性は低い。ただし、寄生虫卵はキチン質の卵殻をもつものの、湿乾を繰り返す環境や乾燥した環境で分解されるため（金原2004）、堆積時に寄生虫卵が含まれていたとしても分解されてしまった可能性は残る。いずれにしろ今回の分析結果では、甕がトイレ遺構であった証拠は確認できなかった。

引用文献

金原正明（2004）寄生虫卵分析，安田喜憲編「環境考古学ハンドブック」：419-429，朝倉書店。



図版1 プレバラートの顕微鏡写真

第3章 まとめ

今回の発掘調査では、戸倉家においては近世末頃の大規模な整地の痕跡、保田家屋敷跡においては近世初期から近世後期頃までの整地層とともに建物跡や塀跡、埋篋等を検出した。特に保田家屋敷跡では3面の遺構面を確認することができた。ここではまとめとして、調査地の空間構成の変遷を整理してみる。

なお、両屋敷地の居住者名が確認できるのは文政9年(1826)の絵図のみである。元文3年(1738)の絵図では、屋敷地の形状に変化は見られないが、戸倉家などの主要な家臣以外は居住者名が省略されている(第54図)。そのため、保田家屋敷側は厳密には近世中期以前の居住者は不明であるが、ここでは報告の便宜上、時期に関わらず調査区の北東側を保田家屋敷跡、南西側を戸倉家屋敷跡と呼ぶこととする。

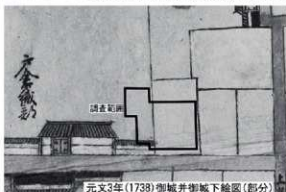
①期：17世紀初頭(第55図左上)

調査を行った遺構面のうち最も古いものは、保田家屋敷跡の検出面3である。なかでも埋土に焼土を含む5号柱穴列と溝状遺構が一段階古いものの可能性が高い。柱穴内の出土遺物は中世末から近世初頭に生産されたもので、慶長6年(1601)の毛利高政入部に始まる最初期の城下町の遺構と位置付けられる。5号柱穴列を屋敷地の境に建てられた塀の基礎と考えると、当初の城下町では元文・文政の絵図とは全く異なる屋敷地割であったことになる。

なお、これらの遺構の下位に、焼土と炭化物を多く含む第Ⅷ層が薄く広がっていた。層中の出土遺物も17世紀初頭を上限とし、城下町建設を開始した頃のものである。高政は番匠川河口付近にあった「塩屋千軒」と呼ばれる集落を埋め立てて城下町を作ったと言われるが、第Ⅷ層をこの時のものと仮定すれば、埋め立てに先立って障害となる草木を焼き払ったか、湿気の多い地盤を改良するために表土を焼いたか、あるいはその両方が目的であったとも想像できる。

②期：17世紀第1四半期(第55図右上)

焼土を含まない保田家屋敷跡検出面3の遺構(第55図右上)は、出土遺物に17世紀前半代を上限とする資料が増えてくることから、ここでは17世紀第1四半期頃に位置づけおきたい。遺構としては柱穴と土坑が該当するものの、配置に規則性は見られない。I期の遺構と併存していた可能性もある。



第54図 近世絵図における調査地周辺

③期：17世紀第2四半期(第55図左中)

次期は第Ⅷ層と第Ⅸ層の整地を挟んで、保田家屋敷跡検出面2の遺構群である。遺構内と第Ⅸ層の出土遺物から、17世紀第2四半期頃の屋敷跡と考える。敷地の中央に主屋であろう2号建物跡の礎石が並び、調査区東端で検出した地業跡は主屋に対する付属屋のためのものであろうか。位置と厳重な沈下対策から想定すると土蔵の可能性を考えるが、礎石等は残されていない。また、調査区南西の4号柱穴列は、戸倉家との屋敷境の塀であったと考えられる。ただし柱穴は調査区南東のみしか検出されず、北西の延長上には一部に石列があるのみである。第54図にみるように、柱穴のある調査区南東には佐伯城内へ向かう大通りがあり、通りに面する部分は柱を基礎とする塀とし、奥まった部分は柱を持たない、より簡易な構造に作り分けていた可能性もある。さらに第Ⅸ層にて検出した砂礫層は、調査時の印象としては通路の沈下対策ではないかと考えた^(注1)。なお、こうした施設の配置状況と、塀を戸倉家との敷地境と考えると、この頃には元文3年の絵図に見られる屋敷地割が出来上がっている。

④期：18世紀(第55図右下)

その後、大規模な整地が行われ、第Ⅶ層と第Ⅵ層がこれにあたる。第Ⅶ層は出土遺物から17

世紀後半の整地と考えられ、上面で検出した保田家屋敷跡検出面1の遺構群は18世紀代の屋敷跡である。この頃の構成としては、屋敷地の中央やや北西側に主屋となる1号建物跡があり、戸倉家に近い南西側は埋荒や廃棄土坑のスペースとして利用している。これらの土坑等の広がりを見ると、戸倉家との屋敷境は、③期よりも少し南西側に変更された可能性が高い。また、南等の2号柱穴は大通りに面する塙の基礎であろう。屋敷地は南西に拡張する一方で、南東は縮小したことになる。主屋の南で検出した石敷きは、玄関などのオモテを意識したのとも考えられるが、主屋の正確な間取りが不明であるため検討は難しい。

⑤期：19世紀前半（第55図右下）

少し時代が下ると、敷地南西の埋荒等は破棄され、建物の礎石も覆うように第V層の整地が行われる。層中の遺物から、18世紀後半から末頃のことである。焼土や炭化物が混じることから、火災が契機ではないかと思われる^(註2)。焼土廃棄土坑と考えたS17も火災処理に伴う可能性が考えられる。第V層整地後の遺構としては、保田家屋敷跡検出面1の遺構のうち、第V層上面から掘り込まれていることが明らかな3号柱穴がある。通りと屋敷を区画する塙と考えられる。また、戸倉家との屋敷境に多数の杭が打たれるのはこの頃であろう。年代測定の結果もそれを裏付ける。これも塙などの基礎と考えられ、④期で若干南西方向に移動した屋敷境が、③期とはほぼ同じ位置に戻っている。しかし、保田家屋敷跡ではこの他の遺構は検出されなかった。屋敷跡であったことは確かなので、礎石等を据えていた遺構面は後の整地で削平されてしまったと考えられる。

なお、戸倉家の第IV層の大規模整地も第V層にやや遅れて行われている。戸倉家屋敷跡で検出した土坑群もこの段階に位置づけられる。戸倉家屋敷跡でも土坑以外に目立つ遺構は検出されなかったが、これについては遺構面が後世の整地によって削平されたという理由のほかに、広大な戸倉家屋敷の隅にあたるため、もともと建物等は建てられなかった可能性もある。

まとめ

以上のように、調査によって検出した遺構面を時期ごとに考えてみると、17世紀代には頻繁に整地が行われていることが分かる。特に①期から③期までの50年ほどの間に、屋敷地割が大

きく変更されている可能性が見えてきた。城下町建設を始めて間もない時期であり、試行錯誤があったのであろうか。③期頃には現在まで続く屋敷地割の原形がほぼ出来上がっていると考えられ、絵図のない近世中期以前の地割を考える上でポイントとなる。この時期から礎石をもつ屋敷が建てられるようになることは、屋敷地割が固定化し、城下町が完成に近づいていることと無関係ではないだろう。その後第VI層の整地がなされると、非常に安定した生活面であったためか、およそ1世紀にわたって利用される。確認できた最後の整地の契機は18世紀後半から末頃の火災であろう。

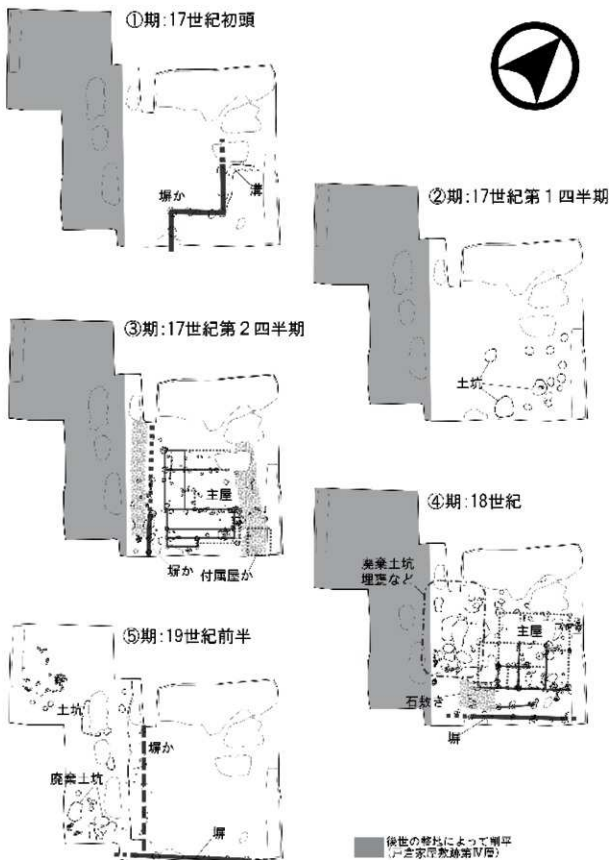
このように調査範囲内の空間構成要素の変遷を辿ることで、佐伯城下町が完成していく工程の一端を見ることができた。しかしながら、今回は筆者の力量不足のために出土遺物についての検討を十分に行えなかった。今回の調査の遺物、特に保田家屋敷跡の遺物についてはこれまで佐伯市内の発掘調査では事例のなかった近世初期に遡る資料が、複数の検出面に伴う形で出土している点で、極めて重要な意味を持つ。各遺構面や整地層における器種や生産地を対象とした分析を行うことで、各時代の佐伯藩内での物資の流通や、藩士の生活を垣間見ることのできる資料となるはずである。また、他の屋敷地での出土資料と比較可能な状態に整理することで、佐伯城下での基準資料となる価値を含んでいる。これら出土遺物の分析と評価が今後の重要課題である^(註3)。

注1 近世武家屋敷地内の例ではないが、中世大友府内町跡において城下町の道路に砂礫を敷く例がある。
注2 この時期に武家地にまで被害が及んだ可能性のある火災としては、宝暦14年(1764)、明和4年(1767)、寛政10年(1798)、文化6年(1809)があったといわれる。

注3 類例の希少な遺物のポイントをあげれば、1) 欧州に関連する輸入磁器(21)と輸出用磁器(33-107-114)、2) 近世初期のみ採集し、消費地での出土例が極めて少ない佐伯藩波越焼製品(22-282-355-408)、3) 同じく短期間採集のお楽しみ窯とされる小倉藩菜園場窯製品(246)、4) 中世末に現在の大分市東部で生産され、流通範囲の南限の可能性が「二連雷文」瓦管火鉢(305)、5) 九州では類例が少なく、豊臣系大名との関連が指摘される近世初期の乗焼(310)などが課題となる。

【参考文献】

- ・上野淳也2007「豊後波越焼跡」表面最終資料による考察『史学論叢』第37号
- ・大分市教育委員会2005「鶴崎町遺跡群(堀川)」
- ・大分市教育委員会2014「大友府内19」ほか
- ・佐伯市史編さん委員会1974「佐伯市史」
- ・吉田寛2012「双頭映手文と二連雷文・戦国時代末期の「豊後府内」における瓦質土器の一種相」『山口大学考古学論集』中村友博先生退任記念論文集



第55図 遺構変遷図



戸倉家屋敷跡全景 北東から



戸倉家屋敷跡全景 東から

図版2



近代井戸 検出状況



戸倉家屋敷跡 北西壁土層



S1検出状況 南東から



S1完掘状況 北西から



S2遺物検出状況 南から



S2完掘状況 南から



イギリス製磁器製品

ヨーロッパ輸出用磁器製品



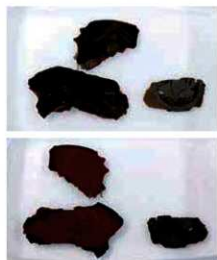
第I層・第II層・第IV層出土向付



第IV層出土灰落し・水滴



第IV層出土漆付着土器



第IV層出土木製椀



保田家屋敷跡 検出面1 遺構検出状況 南東が下



保田家屋敷跡 検出面1 礎石検出状況 北東から



保田家屋敷跡 検出面1 柱穴検出状況 南東から

図版6



S20・S94検出状況 北から



保田家屋敷跡 調査区南東壁土層



S15検出状況 北東から



S15完掘状況 北東から



S16検出状況 西から



S16半裁状況 南から



S16完掘状況 南から



石敷き検出状況 南西から

图版 8



S15出土埋甕



S16出土埋甕



第V層出土磁器碗・皿



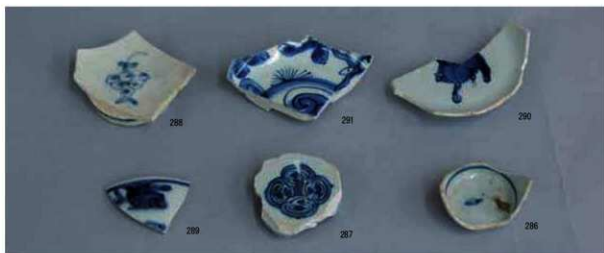
第V層出土陶器碗・皿



第V層出土在地系壺



第V層出土鉢・甕ほか



第VI層出土輸入磁器



保田家屋敷跡 検出面2礎石検出状況 北東から



保田家屋敷跡 検出面2礎石検出状況 東から



第VI層掘削状況



第VI層掘削状況



S100完掘状況 西から



S167検出状況 北西から



調査区東端土層堆積状況



調査区北西砂礫層検出状況

図版12



第Ⅶ層・第Ⅸ層出土肥前陶器

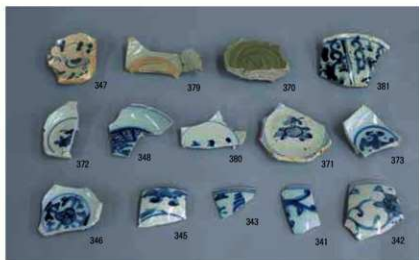


第Ⅶ層出土陶器

第Ⅸ層出土在地系陶器皿



第Ⅶ層出土楽茶碗



第Ⅶ層・第Ⅸ層出土輸入磁器



保田家屋敷跡 検出面3柱穴検出状況 北東から



保田家屋敷跡 検出面3柱穴検出状況 東から

図版14



S119木柱検出状況 北西から



S119木柱除去後半裁状況 北西から



S114完掘状況 南東から



S122底石検出状況 南から



S128・S129検出状況 北西から



S129検出状況 北西から



S106出土遺物



S114出土遺物



第X層出土在地系陶器皿



第X層出土釉羽口



第X層·第XI層出土肥前陶器皿



第X層·第XI層出土輸入磁器

報告書抄録

ふりがな	さいきじょうかまちいせき とくらげやしきあと・やすだけやしきあと
書名	佐伯城下町遺跡 戸倉家屋敷跡・保田家屋敷跡
シリーズ名	佐伯市文化財調査報告書
シリーズ番号	第8集
編著者名	福田 聡
編集機関	佐伯市教育委員会
所在地	〒876-0853 大分県佐伯市中村東町6番9号
発行年月日	2016年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
佐伯城下町	大分県佐伯市 城下西町696番地1-2・3697番地	44205	205012	32° 57' 27"	131° 53' 39"	20130722～ 20131204	510㎡	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
佐伯城下町	城下町	近世	建物礎石・柱穴・ 廃棄土坑ほか	陶磁器・土師質土器・金属製品・銭貨	近世中～末頃の屋敷跡 近世初期の屋敷跡

佐伯市文化財調査報告書第8集
佐伯城下町遺跡
戸倉家屋敷跡・保田家屋敷跡

平成25年度大分銀行佐伯支店建て替え工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
2016年3月

発行 佐伯市教育委員会
〒876-0853 大分県佐伯市中村東町6番9号
TEL 0972(22)4234 FAX 0972(22)3912

印刷 木津印刷
〒876-0844 大分県佐伯市向島2丁目13番12号
TEL 0972(22)1798 FAX 0972(22)5611